の些子此れを了れば更に餘蘊なしと、其時旁らに健羨懇請して已まざる者あり、則ち又た曰く些子を連ねて亦た放つ處なし、今や寧王宸濠張忠、許泰の變亂を經歷して後ち始めて良知の說を立つるに至れりと、以て致良知說を得たるの因由を知るべきなり、

陸象山の子孫を錄す、陸王二子の關係　先生、宋の陸象山は孔孟の正傳を得て而かも學術久しく抑へられて未だ彰はれず、文廟尙ほ配享(孔子廟從祀)の典を缺き、子孫未だ褒崇の澤に沾はざるを以て遺憾と爲し象山の鄕里なる撫州府金谿縣官吏に命じ陸氏の嫡派の子孫に對し各處の聖賢の子孫の事例に倣ふて其の差役を免じ俊秀なる子弟あらば名を提學道(學務課)に上申し學堂に送り業を習はしめたり、余嘗て朱子學及び陸王學の歷史を略論して曰く、抑も朱子は支那太古より傳はれる所有思想を悉く網羅して自家學說の資料に供せり、故に朱子學は大山は土壤を讓らざるが故に高く江海は細流を擇ばざるが故に深しと云ふの觀あり、而して朱子が最も力を得しは北宋諸家なりとす、其著名なる者は周濂溪、張橫渠、邵康節、程明道、程伊川等なり、特に二程子は近世哲學史上に重要の位置を占むる者なり、概して言へば陸象山、王陽明は間接に程明道の系統を受け、朱子は主として程伊川の系統を受けたり、而して朱子は伊川の沒(西曆一一〇七)後二十三年にして生れたり、其系統は程伊川—楊龜山—羅從彥—李延平—朱子と爲れり、朱子は實に宋學の大成者にして又た儒敎史上に一新時期を開ける偉人なり、陸象山は朱子と同時代の人にして朱子の親善なる講友なり、然れども其の講學の方法は全く相反せり、此に於て天下の學者朱陸二派に兩分せらるゝに至れり、朱(西曆一一二〇〇卒)二子の沒後、南宋の滅亡は西曆一二七九に在れば此間約八十年、元代八十八年、明朝に入て王陽明の生時に至るまで、百〇三年二百七十年間は儒學界は朱子派、陸子派、朱陸調和派の三派と爲れり、然れども朱子學は註釋完備し、一般の試驗及び敎科書に用ひられたれば、官吏登庸試驗に應ぜんとする者廣く之を講讀し其勢力遙かに陸學の上に在り、陸氏歿後二百八十年にして王陽明出で、朱子學の弊習を目擊し、陸學の實踐に適切にして而かも振はざるを慨き、大に陸學を鼓吹し、遂に能く簡易直截なる一派を大成して所謂陽明學を成せるなりと、斯かる關係を有するが故に陽明先生は陸氏

の子孫を表彰し、又た象山文集を刻して序を爲り以て之を表彰せり、席元山（名は書）嘗て先生が學を龍場に論ずるを聞き深く陸學の顚はれざるを病ひ鳴冤錄を作つて以て之に寄贈す、先生元山が斯道を以て自ら任じて天下之を非とするも毫も顧みざるを稱せり、

門人を白鹿洞に集む　五月先生、歸鄉の志あり、同門の士と久しく聚り共に此學を明かにせんと欲す、適々南昌府の知府吳嘉聰は府誌を編纂せんと欲す時に蔡宗兗は南康府學の敎授と爲り白鹿洞學舍の事を主る、皆な先生の門人なり、是に於て先生兩者の便宜を謀り、遂に局を洞中に開き門人夏良勝、舒芬、萬潮、陳九川を集て纂誌講學の事を同くせしむ、先生又た書を與へ鄒守益（字は之）を促がして曰く、余の歸遁近日に在らん、聖天子、政を新にし給ふ、英明なる謙之の如きも亦た宜しく裝束し、北上して京に入るべし、且つ此會は宜しく急に來講を謀るべしと、先生の講學に熱心なる、之れに徵するも亦た知るべし、孝宗弘治十五年（正德辛巳より二十年前）春、湛甘泉は地を髮履塚の下に避け、霍兀厓、韶方叔と同時に家居して講學の會を爲す、先生之を聞き、奬勵して曰く、英賢の生るゝ、何の幸ぞ時を同くし地を共にす、又た虛しく光陰を過して此機會を失ふべけんやと、是秋霍兀厓は洪都に過ぎり、先生と與もに大學の主意を論じて程朱の舊說を主張せり、先生曰く、若し嘗史を傳習し、古今を考究し以て己が見聞を廣めんと欲せば則ち可らん、若し是を以て聖境に入るの門路を求め得んと欲せば譬へば枝葉を摘採して根本を綴成して其の血脈を通せんと欲するが如し、蓋し亦た難いかなと、以て先生が程朱の舊說に對する態度を見るべし、

隨意體認天理　是月講友湛甘泉は學庸測（天學中庸臆測の一篇を寄贈す、先生書を甘泉に與へて曰く、貴兄の所謂意に隨て天理を體認すとは是れ眞實にして誰かざるの語なり、貴兄の主意を究むるに發端に於て卻て毫釐未だ理に合せざる所あり、夫れ脩齊治平は總て是れ格物なり、但し此くの如く節節に細釋せんと欲するも亦た說明の甚だ繁多なるを覺ゆ、且つ語意務て簡古を爲したれば之を大學中庸の本文に比較するも反つて更らに深晦なりとす、謂へらく其の詞を淺近にし略〻徑路を指示し人をして自ら思て之を得て更らに意味深重なるを覺えしむるに若くはなからんと、是れ又た先生の簡易直截なる講學法に基ける

の評論なり、

衆說の異同を諭す　方叔賢は大學と尙書洪範論の一篇を寄贈す、先生書を方叔賢に與へて曰く道は一なるのみ、其の大本一源を論すれば則ち六經(詩書易春秋禮樂)四書(學庸論孟)も推して同くすべからざる者なし、又た特に洪範篇の大學に於けるのみならず、之を草木に譬ふるに其の同じき者は生意あること是れなり、其花實の疎密、枝葉の高下も亦た盡く比して之を同うせんと欲するが如し、吾れ造化の巧技の是くの如く雕刻せざるを恐るゝなり、君子が學を論ずるは固より唯だ是に之れ從ふ、必ずしも同じきを以て貴と爲すに非ず、故に入門下手の處に至つては則ち足下の爲に明に之を辯せざるべからざる者あり」と、以て衆說の異同を判定するの意見を察すべきなり、

心の動靜を論ず　是より先き倫彦式(字は以訓)は崔て虔州の名中に過ぎりて學を先生に問ひしが、是時に至り弟以諒を遣はし書を以て問て曰く、(一)學に靜根なし、(二)物に感じて動き易し、(三)事を處置して後悔多し、之を如何んすべきやと、先生曰く『汝が三言の病も亦た互に相連關す、唯だ學を以て別に靜根を求むるが故に物に感じて其の動き易きを懼る、物に感じて其動き易きを懼るゝが故に事を處して後悔多し、心は動靜なき者なり、故に君子の其の靜を學ぶや常に覺て未だ嘗て無ならざるなり、故に常に百事に應じて而かも常に寂然たり、心は一なるのみ、靜は其の體なり、而して復た別に靜根を求むるは是れ其の體を撓めて其の用を動かす者なり、而して其の動き易きを懼るゝは是れ其の用を廢するなり、故に靜を求むるの心は即ち動なり、動を惡むの心は靜に非るなり、是れ之を動も亦動き、靜も亦た動き、送迎起伏して無窮に相迎ふ」と謂ふ、故に正理に循ふ之を靜と謂ひ、邪欲に從ふ之を動と謂ふなり』と、此等の說稍〻深遠に亘れども熟讀玩味せば益を得ること少からざるべし、

君父に對するの情　三月武宗崩御、四月世宗即位し嘉靖と改元す、世宗皇帝江彬、許泰、張忠、劉霍等諸奸を誅し、先生の功を錄し勅を降して之を召す、其詞に謂へらく「爾昔に能く亂賊を討平し地方を安定せり、朝廷新政の初なれば特に茲に召して用ひんとす、勅命至らば爾驛を馳せて京に來るべし、或は稽り遲るゝあるとなかれ」と、先生即ち六月二十日に於て程旅行を起し道を錢塘に取りしも在朝

の補臣等先生の顯達を嫉み之を障へて潛かに科道官に諷し建言せしめて曰く、「朝廷政を新にし、武宗皇帝の國喪資費浩繁なれば、宜しく宴賞の事を行ふべからずと、是に於て先生錢塘に至り上疏して懇ろに便道に因り歸省せん事を乞ふ、朝廷許して歸省せしめ南京兵部尚書に陞任し、機務を參贊せしめ、蟒衣(錦衣)玉帶を賜へり、蓋し異常の待遇を賜ひしなり、先生が歸省を乞ふの疏を按ずるに曰く、臣は兩年より以來四たび歸省疏を上るも皆な親老いて多病なるを以てし懇ろに暫らく歸て省視せんことを乞へり、復た權姦等讒姝し、曖昧の禍に罹らんことを恐れし故に其時は暫らく歸るを以て請願を爲しゝと雖も實に身を山林邱壑に終ふるの念を抱けり、既にして天は神聖を啓き陛下入つて大統を承けさせ給ひ、賢良を親み舊臣に任ず、向きの讒姝を以て斥けられ、正德興て公道顯はる、臣の斯時に於ける陷穽を出でゝ春臺に登るが如きの歡喜あり、豈に朝に發し夕に至り一たび其の拜舞踊躍の私意を快くすることを欲せざらんや、顧るに臣の父は老い且つ病む、近頃讒構に遭ひ朝夕常に父子相見ざるの悲痛あり、今幸に殃咎を脫洗し復た天日を視る、父子の衷情固より一たび顏面を見て

以て其の悲慘離隔の懷を叙せんことを思ふ、況んや臣は道を錢塘に取る、鄉里に迂回するも只だ僅かに一日程なるのみ、此れ親交の厚きに在りても將に情に於て止むこと能はざらんとす、而るを況んや父子をや、然れども之を以て明かに朝に請はずして私かに之を行ふは、是れ君を欺くなり、君を欺くは不忠なり、父を忘るゝは不孝なり、故に臣は敢て罪を冒して以て懇請するのみと、忠君孝親の情發表して餘蘊なし、

神仙養生論

是月先生門人陸澄(字元靜)と京中に神仙養生の法を論じて曰く、近頃聞くが如くんば吾子は多病の故を以て將に養生の道に從事せんとすと、余往年嘗て力を養生の術に竭せしも後ち遂に養德と養身とは只だ是れ一事なることを知れり、元靜が云ふ所の眞我なる者は果して能く戒謹恐懼して心を是こに專にせば則ち神住み氣住み精住まん、而して仙家に所謂長生久視の說も亦た其の中に在り、老子、彭鑛神仙家の祖宗の徒は乃ち其の天然の稟賦も此くの若き長壽を得べき者あり、學で至るべきにあらず、後生白玉蟾、邱長春(神仙家の徒)

の屬の如きは皆な是れ彼等が稱述して以て祖師と爲す所の者なれども、其の壽を得しことは皆な五六十に過ぎざれば則ち所謂長生の說は當さに必ず他に指す所あるべく、專ら壽命の長久を指すに非るべし、元靜は氣質弱くして多病なり、但よ宜しく清心寡慾、意を聖賢の學に專一にすべし、前の所謂眞我の說の如きは輕しく信ずべからず、神仙不死の道は徒らに聰明を惑亂し精神を消耗して身心に益なきなり」と、聖學の見地に立て養德養身は是れ一事なりと斷ずる所眞に先生の面目を發揮するものと謂つべし、八月越に至る、是より後ち五十六歲に至るまで越に在て學を講ず、

錦を衣て故鄉に歸る　九月先生餘姚に歸て祖の塋を弔ひ瑞雲樓を訪ふ、

胎衣(産時の服)を藏するの地を指し淚を垂るゝことこれを久うす、蓋し母の生存中には孝養するを得ず、祖母岑氏死亡せしときは會して葬る能はざるを痛みしなり、是より日に宗族親友と與もに宴遊し、到る處に隨て良知を指し示す、錢德洪嘗て先生が學を江右(江西地方)に講するを聞き久く門に及んで學を聞かんことを思ひしも、鄉中の故老等猶ほ先生の少壯時代豪邁不羈にして或は任俠縱遊を事とせしを追憶して心に之を非とし、其の道學的修養の既に成就せるを疑ひて之を制止せんとす、然れども德洪獨り潛かに先生の擧動を伺ひ深く之を信じ、乃ち衆議を排し父の認可を請ひ、二姪大經、應揚及び鄭寅、俞大本を率ゐ王正心の紹介に因つて贄を通じて見えんことを請て遂に弟子と爲れり、明日夏淳の范引年、吳仁、柴鳳孫、應奎、諸陽の徐珊、管州の谷鍾秀、黃文渙、周子德、楊珂等凡そ七十四人來り謁して良知の談を聽けり、

武功を以て新建伯と爲る　十有二月新建伯に封ぜらる、

制詞に曰く「江西の反賊を勦平し地方を安定し、各該官員の功績顯著なり、倘が部下既に官を會し議を集め、等第を分別すること明白なり、王守仁を新建伯に奉天翊衞推誠宣力守正文臣特進光祿大夫柱國に封ず、還た南京の兵部尚書を兼ね舊例に照して機務を參贊せしむ、歲支祿米一千石、三代、妻を幷て一體追封す、誥卷を給與し子孫世世承襲せしむ」と、斯の偉勳ありて斯の榮譽を得たり、亦た斯道の幸榮なり、

龍山公の誕辰、父子再會、盈成の戒、榮辱の感懷　正德十六年十二月

十九日勅使を派遣し賞物を齎らして慰勞し兼て溫旨を下し父華を家に存問し、賜ふに羊酒を以てせらる、勅使至るの日適〻龍山公（父の號）の誕辰にして親戚朋友皆な集まれり、先きに宸濠の逆を謀るの時に當て先生逆を助くと言ふ者あり、龍山公曰く吾が兒素と天理上に在て功夫を用ふ、必ず此を爲さずと、又た或は先生孫燧許逵と同じく宸濠の害を被るとを得ば吾復た何をか憂へんと、先生兵を起して宸濠を討すと聞くに及んで又た濠先生を怒り人をして公を刺さしめんと傳へ、公宜しく少しく避くべしと言ふ、公笑て曰く、吾兒方さに大義を擧げ、吾れは國の大臣と爲る、恨らくは年老て戈を荷ひ事を同うする能はず、奈何ぞ先づ去て以て民望を爲さんやと、恬然として變せず、是に於て父子相見る、獻ぶこと再生の如し、先生、恩賜の蟒衣を服し玉を腰にし艙を捧て壽を爲す、龍山翁慨然として曰く、寧王宸濠の變起るや、皆な汝を以て死せりと爲す、而も死せず、皆な反亂事件を以て平げ難しとせり而も卒に平ぐ、讒構朋なひ興り、禍機四方に發して前後二年岌々乎として免かれざるを豫期せり、然かも皇天至公善に福し淫に禍し日月を開き忠を顯はし良を遂げしめ、貴官高爵溫りに封賞を受く、父子復た一堂に相見るを得たるは茲れ其の幸に非るか、然も盛は衰の始にして、福は禍の基なれば以て幸と爲すと雖も、又た以て懼と爲すなりと、先生艙を洗ひ跪づきて之を獻して曰く、大人の兒を敎へ給ふや、日夜心を切にする所の者なりと、滿堂聞く者皆な會遇の隆盛なるを歎美し盈成の訓戒を感佩せり、而して先生既に拔群の武功を奏して茲に一門の歡迎を受く、此時喜懼の感懷果して如何ぞや、讀者其れ之を身に體して追思熟考せよ、人生の佳興は必ず此間にあらん、

先生壽宴の翌朝に至て門人に謂て曰く、昨日恩賜の蟒衣を服し玉を腰にす、人我を見て至榮と謂ふ、晩來衣を解ぎて寢に就く、舊に依て一身窮骨頭何ぞ曾て分毫を添へ得んや、乃ち知る榮辱は原と人に在らず人自ら迷ふのみと、乃ち詩一首を吟じて云く

百戰歸來白髮新　青山從此作閒人
蜂捿何憶衝鋒陣　雲起猶疑見廟塵
島嶼微茫滄海暮　桃花爛熳武陵春

而今始信還丹訣　却笑當年識未眞

世の人一功名を成せば傲然人に誇示して以て快と爲す、先生功成り名遂けて亟も與らざるが如し、精神修養の功此こに於て見るべし

禍を避けんが爲に封爵を辭す

世宗嘉靖元年先生五十一歲越に在り是れより先き先生巨賊を平げ或は宸濠を擒にせしとき、倶に兵部尙書王瓊事に先ちて謀を爲し、假すに便宜事を行ふを以てし、捷疏を上る毎に、必ず功を先生の兵に歸し、百方先生を擁護せり、是れに由りて朝廷の奸臣等先生の功を猜忌する者ありしが、是こに至て先生の榮進を妨げんと欲し乃ち征討に從事せし諸人を抑え、將に紀功冊を改造して務て削除を爲さんとす、故に正月先生上疏して封爵を辭して曰く、紀功冊中に載する所は特に見るべきの功のみ、若し夫れ部下の士或は難を犯し役に走りて溝壑に死し或は忠を以て冤を抱きて死を獄中に遂げ、將士の與かり知らざる所、幽魂の未だ泄らすに及ばざる者あるが如きは紀功冊中に能く盡く載する所に非ず、今や其の見るべきの功に於て又た之を削除せんとす、何を以てか忠を效し、義に赴くの士を勵さんやと、是れ乃ち疏を上りて封爵を辭せし所以なり、且つ謂へらく、殃は天の功を妄りにするより大なるは莫く、罪は人の善を掩ふより大なるは莫し、惡は下の能を毀ふより深きは莫く、辱は己れを忘るゝの恥より重きは莫し、四者備りて禍至し、此れ臣の敢て爵を受けざるは以て榮を辭するに非ず、禍を避くるのみと、疏上りしも報せず、先生の志操の高潔想見すべし、

龍山公卒し葬喪の禮を盡くす

二月十二日龍山翁年七十二にして疾且さに革まる、時に朝廷先生の征討の功を推論し翁及び祖竹軒公、槐里公を追封して倶に新建伯と爲す、是日勅使適〻至る、翁は勅使已に門に在りと聞き、先生及び諸弟に命じて迎へしめて曰く、倉卒の際と雖も何ぞ以て禮を廢すべけんと、已に禮を成すやと問ひ、然後瞑目して逝きぬ、先生家人を戒めて哭することなからしむ、新冕服を加へ諸具を整へて、始て哀を擧ぐ、一哭頓に絕え病て勝ふること能はず、門人子弟喪事を輔助し、才能に因て之を任使す、仙居縣の金克厚の謹恪なるを以て廚を監せしむ、克厚は品物を出納する事甚だ謹む、部下愼まざる者あれば直に之を放ち遣へす、內外の諸務井然たり、室中齋食百日の後ち弟姪猶ほして稍〻

乾肉を食せしめて曰く、諸子肉食の習慣久し、其の能はざるを強ひるは是れ其の僞を作すを恣にするなりと、稍〻之を寛うして各々自ら盡すを求めしめて可なりと、越俗弔客を宴するに必ず餅糖を列ね鮮魚肥肉を割烹し以て豐侈を競ふ、先生盡く之を改正す、唯だ高年遠客を待遇するときは素食の中間肉二皿を供す、曰く潔齋は我が幕内に行ふのみ、若し弔客をして孝子（喪主）の食に同うせしめば以て高年を安んじて賓旅に酬ゆる所以に非るなりと、後ち先生の莫逆の友淸甘泉來り弔し、肉食を見て喜びず書を遺つて之を詰責す、而かも先生罪を引て辯ずることを爲さず、是年金克厚、錢德洪と同じく鄕試に應じ尋きて進士に及第す、克厚、德洪に謂て曰く、吾が學は王門の喪時に厨の事を司ることを得て大に進歩し、且つ之を以て試驗に及第するを得たり、陽明先生常に謂ふ學は必ず事を行つて而後に實力を得べしと誠に至教なりと、斯師にして斯弟子あり、篤學感やきかな、

病中面會謝絶の辭

先生、病に臥せしとき、遠方の同志日に至る、乃ち壁面に揭示して曰く某は淺劣にして知識あることなく、且つ憂病の中に在り、故に凡

そ四方同志の來臨を辱くする者は皆な敢て見えず、或は已むを得ずして相見るも亦た敢て論說する所あらず、各歸りて之を孔孟の訓に求て可なり、夫れ孔孟の訓は昭々として日月の如し、凡そ支離決裂して是に似て而かも非なる者は皆な異說なり、聖人の學に志ある者は孔孟の遺訓を外にして他に求むるは是れ日月の明を捨てゝ光を螢火の微に希へるなり、亦た繆らずやと、文意懇到、蓋し病氣重かりし時の詞ならん、

七月再び上疏して封爵を辭す、同月十九日、勅使は聖旨を奉じて來れり、詔に曰く卿は義を唱へ兵を督し地方の大患を除き、忠を盡し國に報ず、勞績嘉すべし、特に封爵を加へ以て公義を昭かにす、宜しく勉て恩命を承くべし、辭する所は允さず」と、蓋し亦た至當の恩遇なり、

恩賞の普及を乞ふ

是より先き先生疏を上りて爵を辭し恩典を普くせんことを乞ふ、蓋し政路に當る者は征討の賞を明かにせず陰かに調査を行ひ或は賞し或は否らず或は賞を行はずして幷びに其の績を削り、或は賞未だ施すに及ばずして罰已に先づ行ひ、或は虛しく榮進の名を受て私かに退かしめ、或は不

忠の號を蒙らしめ隨て以て廢斥せらる、先生乃ち歎して曰く、事を同くせし諸臣は顯を延て待つこと且さに三年ならんとす、予にして之を言はずんば誰か復た之が論を爲すものあらん、紀功冊中に列記せし者は均しく忠義の氣を振ひ以て國難に赴けるものなり、而かも功成り賞を行ふとき、唯だ吾れ一人之れに當り、人は將さに其の餘を食はざらんとすと、乃ち再び上疏して曰く、曩きに宸濠の變あるや、其の横氣積威、千里の外に在りと雖も、震駭して措きどころを失はざるはなし、而るを況んや直に害を被むりし江西諸郡縣の人民をや、臣は逆旅の孤身を以て事を其の間に舉ぐ、然り而して未だ巡撫の命を受ざれば則ち各官は臣の統率する所に非るなり、未だ賊を討ずるの命を奉せざれば其事は乃ち義を以て唱へしのみ、若し其時に郡縣各官をして果して死を畏れ生を偷み但だ未だ成命あらざるを以て各〻土地を辭と爲さしめば、則ち臣も亦如何すべきや、然り而して臣の調發を聞き、即ち感激奮勵し身を挺んでゝ來りしは是れ眞に軀を捐て難に赴くの義力を褒せ主に報ゆるの忠あるに非ずんば、孰れか肯へて粉身碎骨の禍を甘んじ、赤族の誅に從ひ、以て萬一、冀ひ難きの功を希はんや、然れば則ち凡そ臣と事を共にせし者に在りては皆な忠義の熱誠ある者なり、然るに今や賞罰宜しきを得ず、人は但だ其の賞の未だ施されずして罰の己に及ぶを見、功の未だ記錄せられずして罪の加へらるゝあり、姦を創し惡を警むること能はずして、徒らに以て忠義の氣を阻げ、讒嫉の心を快くせり、臣一人を賞して諸士の忠義を激勵せんとするは猶ほ一杯の酒を河水に投じて飲む者の醉を求むるが如し」と、疏上りしも報せず、先生の遺憾以て察すべきなり、

雅懷彈劾せらる　程啓充、給事毛玉議論を唱へ、先生を彈劾するに、聖賢の正學を妨害するを以てす、蓋し先生を敵視する所の當路大臣の意を承けたるなり、陸澄時に刑部主事と爲る、上疏して六箇條の辯明を爲し以て之を救はんとす、先生、陸澄の辯明を聞き卻つて之を止めて曰く、「謗を止るに辯ずるとなかれとは、曾て昔人の教を聞けり、況んや今何ぞ是の彈劾のみに止まらん、四方の英傑は講學の異同を以て議論紛々たり、吾豈豈逐一辯ずるに勝ふべけんや、惟ふに當さに之を己れに反求すべし苟も論者の言にして是ならしめ、吾れ尚ほ未だ信せざるあるか、則ち當さに務めて吾非を求むべし、輒ち己れを是として人を非とするを得

す、論者の言にして非ならしめ、吾れ既に以て自ら信ずるか、則ち當さに益自ら快きを求むべし、所謂默して之を成し、言はずして信ずる者なり、然らば則ち今日の非難は孰れか吾輩の心を動し性を忍び切磋するの便に非るか、且つ彼の議論の興るは必ずしも我に私怨あるにあらず、亦た將に以て夫の道を守らんが爲めなり、況や其說は本と自ら先儒の緒論より出づ、吾輩の言は屢々昔人に異れり、反省して若し不穩なる者あらば固より宜しく非笑して惑を解くべし、未だ專ら彼を罪するを以て爲すべからざるなり、と、嗚呼何等の雅懷洪度ぞや、以て吾人の龜鑑と爲すべし、是月、錢德洪浙江省の試驗に赴かんとし、先生に辭して敎を請ふ、先生曰く、胸中須らく常に舜禹は天下を有つて與からざるの氣象を有すべしと、德洪其詳を請ひ問ふ、先生曰く、舜禹は天下に王たるも之を以て榮譽快樂と爲さず、殆ど之に關せざる者の如し、又た何の得失か其の胸中に介せんやと、是れ則ち先生實得の言なり、

九月父龍山公を石泉山に葬る、

試驗官、王學者を排す　嘉靖二年先生五十二歲、越に在り、二月南宮の試驗

官は殊更らに心學を以て問題と爲し、陰かに以て先生の學說を排斥し以て朱子の說を擴張せんことを謀る、門人徐珊問題を讀み、歎じて曰く、吾れ何ぞ能く吾が良知を昧まし以て時好を僥倖せんやと、答へずして試驗場より出て去る、聞く者其の節操を高しとせり、然るに同窓の歐陽德、王臣、魏良弼等は直ちに同問題を解答するに先生の心學上の說を發して諱まざりしも亦た合格せり、識者或は以爲らく進退は命ありと、余謂へらく進退命あるにあらず、先生の說の眞にして排斥するを得ざればなり、

誹謗續起の原因を問答す、鄉愚、狂者の辯　錢德洪試驗に落第して歸り深く時事の志に反するを恨み、先生に見ゆ、先生喜んで之れに語りて曰く、聖學之れより大に明かならんと、德洪曰く、時事の非なること此くの如し、何んぞ大に明なるを得んや、先生曰く、吾學何んぞ逐一天下の士に語るを得んや、今や吾手に成れる山東會試錄は窮鄉深谷の民と雖も之を讀まざる者なし、若し吾學既に非ならば天下必ず起つて他に眞是（眞理）を求むる者あらんと、嗚呼何等勇猛の精神ぞや、

門人鄒守益、薛侃、黄宗明、馬明衡、王艮等侍坐せり、因て言ふ、先生に對するの謗議、日に熾んなりと、先生曰く諸君具さに其の故を言ふべしと、或は先生の學日に明かに宋學と異同り、是れ忌嫉を以て謗るなりと言ふ者あり、或は先生の勢威隆盛なを爭ふが爲めに學術を以て謗るなりと言ふ者あり、或は天下の從遊者衆く、其の善に進むを與るして其の往日の操行を驗せず、又た一身上の怨を以て謗ると言ふ者あり、先生曰く、三者の言、誠に皆な之あり、特に吾れ自ら知る、諸君の論未だ及ばざるのみと、門人之を請ひ問ふ、先生曰く「吾れ南京より（先生四十三歳南京に仕官す）以前は尚ほ世俗に同和するの意あり、則ち所謂鄉愿（一鄉の善人）の意思の在るありき、今只だ良知の眞是眞非の處を信じて更に揜藏するとなく、又廻護するとなく志望超俗にして狂者（志望高遠者）と做り得て天下の人をして盡く我が行を批評して憚る所なからしめ吾も亦た只だ良知に依て行ふのみと、門人亦た鄉愿と狂者との辯を請ひ問ふ、先生曰く鄉愿は忠信廉潔の行あるを以て君子の棄つる所とならず、俗流に同じくし、汙濁に合するを以て小人に忤ふことなし、故に鄉愿の行を非とするなり、而かも殊更に擧げて之を非難すべきなし、非難すべきなしと雖も、然かも其の心を究めば乃ち忠信廉潔は君子に媚ぶる所以にして流に同じくし汙に合するは小人に媚ぶる所以なり、其心底已に善良ならず、故に與もに進で堯舜の道に入るべからず、是れ鄉愿の非難すべき所以なり、狂者の志は遠く聖人と爲るに存す、一切の紛囂俗染は擧げて以て其の心を累はすに足らず、眞に鳳凰の千仞に翔るの意あり、一たび精修猛進せば即ち聖人と爲るべし、唯だ精修猛進せざるが故に事情に迂濶にして行も常に志に及ばず唯だ其れ及ばず、故に心底尚ほ未だ眞正を失はずして庶幾くば與もに進で裁正すべし」と、蓋し世間に先生を誹謗する者の倍、多きは先生が鄉愿より一變して狂者と爲りしに由れるなり、門人罷未だ之を知らず、唯だ先生自ら之を知るのみ、故に門人を諭し鄉愿と狂者を辯することと此くの如く詳密なり、夫れ鄉愿の意志を懷ける間は世人に和合するを務むれば誹謗を爲すに由なけれども既に狂者と爲りて專ら自己の主義を發揚して憚る所なければ世人と衝突することも亦た多く、隨て批評を受くることも倍〻繁からん、先生が自から狂者を以て任じ、世の非毀を意に介せざるは是れ又た人品に於て一層の進歩を見るべし、凡そ社會に立て活動する者は必ず多少の

敵を有せざるはなし、或は敵の愈〻多きは其の人物の愈〻偉大なるを證する者と謂つべからん、亞聖顏回嘗て言はずや、「容れられざる、何ぞ病へん然後に君子たることを見る」と、古今聖賢皆な敵なきはなし、要は唯だ自己の操守を公正ならしむべきのみ、

講友間の態度を教ふ　先生黄宗賢に書を與へて曰く、近頃薛尚謙黄宗明と與もに孟子の鄉愿狂狷の一章を講じて頗る警發せし所あるを覺ゆ、相見る時は須らく更に一論すべし、四方の朋友來去定まりなし、中間に切磋琢磨の益なしとせず、但だ眞に力量の能く堪へ得るものあらんも、亦た自ら見ること少なし、大抵近世の學者は必ず聖人と爲るの志あることなし、胸中に物ありて未だ清脫を得ざるのみ、聞く足下同志を引接し孜々として怠らずと、甚だ善し、但し議論は須らく謙虚簡明を佳とすべし、若し自ら處すること任に過ぎて詞意重復せば卻て恐くば益なくして損あらんと、此等の言は直に以て吾人講學者の指針と爲すべし

輕傲を論ず　薛尚謙の去るに臨で詩を贈りて曰く

珍重江船冒暑行　須從根本求生死　久奈世儒橫臆說　良知底用安排得

又た薛尚謙が學を問ふに復書して曰く、自ら咎むるに罪疾は只だ輕傲の二字に緣ると謂へるは力を用ふるの懇切なるを知るに足る、但だ輕傲を知るものは即ち是れ良知なり、此の良知を致して輕傲を除くは即ち是れ格物なり、致良知の三字を究め得ば千古人品の高下眞僞一齊に看破して毫髮も掩藏を容さず、前に論せし所の鄉愿の說熟味すべきなり、致良知の三字は虔州に在りし時に終日此れを論せしも同志中尚ほ多く未だ徹底せざりき、近頃古本大學序中に於て數語を改めて頗る此意を發揮せり、然れども見る者往々亦た察すること能はず、今や一書を寄す、幸に更らに精讀熟味せよ、此れ乃ち千古聖學の秘訣にして從前の僞者は多く曾て悟り到らざりしが故に其說は支離に流れ外道に入りて覺えざりしなりと、先生の自信の深厚及び悟道の進步、此語に徵するも知るべきなり、

九月、父龍山公を天柱峰に改葬し、鄭太夫人を徐山に改葬せり、蓋し、鄭太夫人は嘗て餘姚の穴湖に附葬せしも、既にして郡南の石泉山に改窆す、龍山公を合葬し壙を開くに及んで洪水の災害あり、先生之を聞て夢寐に寧んぜず、是に至て遂に改葬せしなり、

十月、先生蕭山に至る、見素林公、都御史より職を辭し、歸路錢塘に江を渡つて來り訪ふ、先生趨つて蕭山に迎へ浮峰寺に宿す、公相對して時事の非なるを感慨す、此時先生に從へる諸友にも亦た時に及で學を勉め初志に負く無かれと慫慂せり、

儒老佛三教を論ず　張元沖先生に

老二氏と聖人の學との差ふ所は毫釐にして其れ皆な性命の奥義に於て悟り得る所あり、但仙佛二氏は性命の中に於て些の利を着くれば則ち千里の謬を生ず、今釋老の作用を觀るも亦た吾が身に功ある者あり、知らず亦た須らく兼ね取るべきや否やと、先生曰く、兼ね取ると説くは則ち是ならず、聖人が性を盡し命に至るは何物か具へざらん、何ぞ更に仙佛二氏を兼ね取るを待んや、二氏の用は皆な我の用なり、吾が性を盡し命に至るの中に即きて此身を完全に養ふ之を仙と謂ひ吾が性を盡くし命に至るの中に即きて世の煩累に染まざる之を佛と謂ふ、但だ後世の儒者は聖學の全體を見ず故に聖學と仙佛二氏とを二と爲して見るのみ、之を譬ふるに三室共に合せて一家を爲す、儒者は皆な用ふる所を知らず、佛氏を見ては則ち左邊の一室を割きて之れに與へ、老氏を見ては則ち右邊の一室を割きて之に與へて己れは則ち自ら中央の一室に處るが如し、皆な一を舉げて百を廢するなり、聖人は天地萬物と體を同くす、儒佛老は皆な吾の用なりとする、是れ之を大道と謂ひ、二氏は自ら其身を私にす、是れ之を小道と謂ふと、是れ即ち先生の三教達觀なり、

南大吉門人と爲る　三年先生五十三歲、越に在り、門人日に進む、郡守南大吉は座主を以て先生の門人と稱す、然れども資性豪曠にして小節に拘はらず、先生と與もに學を論して悟る所あり、乃ち先生に告げて曰く、大吉は政に臨で過失多し、先生何ぞ一言の訓誡なきや、先生曰く、何の過ぞ、大吉歷ねく其事を數む、先生曰く、吾れ之を言へり、大吉曰く何ぞ、曰く吾言はずんば何を以てか之を知る、曰く良知之を知る、先生曰く、良知は吾が常に言ふ所に非ずして何ぞや、大吉笑ひ謝し

て去る、居る數日にして復た自ら過を數むること倍〻密、且つ曰く、其の過て後に悔ひ改めんよりは何ぞ預じめ言て犯さゞるの佳なるに若かんやと、先生曰く人の言ふは自ら悔るの眞なるに如かずと、大吉又た笑ひ謝して去る、居る數日にして復た自ら過を數むる益〻密、且つ曰く身の過は勉むべきも心の過は奈何せんと、先生曰く前きに鏡の未だ開かざりしときは垢を藏くすを得べきも、今や鏡は開けて明かなり、一塵の落るも自ら脚を留め難し、此れ正に聖境に入るの機なり、之を勉めよやと、愈々出て愈々精微、吾人を益すること特に多きを見る、

聽講者三百餘人　是に於て南大吉は稽山書院を開き八邑の俊才を聚めて躬から卒先して講習し以て之を監督す、是に於て蕭璆、楊汝榮、楊紹芳等は湖廣より來り、楊仕鳴、薛宗鎧、黃夢星等は廣東より來り、王艮、孟源、周衡等は直隸より來り、何秦、黃弘綱等は南贛より來り、魏良采、劉文敏等は安福より來り、魏良政、魏良器等は新建より來り、曾忭は泰和より來る、講習に用ふる所の寺院は狹隘にして容ること能はず、一日君子は義に喩り小人は利に喩る(論語)の章を講ず、衆人倶もに感動して汗を發せり、邑の學生王畿、魏良器と相厚し、毎に言ふ、良知の學は擧業を妨

害すと、人に對つても亦た陽明の講を聞く勿れと勸めしも、是日講を聞くに及で自ら前の失言を悔い、即日贄を執りて弟子と爲れり、王畿は龍溪と號し、先生高足の弟子と爲り、先生を輔佐すること頗る多し、蓋し此時講座を環りて聽く者三百餘人先生之に臨で只だ大學の萬物一體の旨を發し、人をして各々本性を求めて良知を致し以て至善に止らしむ、功夫得るあるときは因て方さに教を設く、故に人々其學に隨ひ易きを悦べり、

詩人董澐門人と爲る　海寧の董澐蘿石と號す詩を能くするを以て江湖に聞ゆ、年六十八來て會稽に遊び、先生の學を講ずるを聞き、杖を以て其瓢笠詩卷を肩にして來訪し門に入て長揖して座に上ぼる、先生其の氣象容貌を異として之を敬禮し之と與もに語ること連日夜澐悟る所あり、何秦の紹介に因て强ひて拜を納れて先生の弟子と爲る、先生之と與もに山水の間を徜徉す、澐日に聞くこと是くの若きやと、澐曰く、吾方さに幸に苦海を逃れ汝等の自ら苦むを憫れむ、願つて吾を以て苦むとなすや、吾れ方さに

を渤澥に揚げて羽を雲霄の上に振ふ、安んぞ能く復た網裏に投じ樊籠に入らんや、去れ、吾將に吾が好む所に從はんとす、遂に自ら號して從吾道人と曰ふ、先生之が爲に從吾道人記を爲れり（陽明全書卷八に在り）

門人を天泉橋に宴す　八月清夜月白くして晝の如し、先生侍者に命じ席を碧霞池の上りに設く、門人侍する者百餘人酒酣にして歌聲漸く動く、之を久しくて或は投壺聚算し、或は劇を撃ち、或は舟を泛ぶ、先生は諸生の興酣なるを見て退て詩を作る、

月夜與諸生歌于天泉橋

萬里中秋月正晴　四山雲靄忽然生
須臾濁霧隨風散　依舊青天此月明
肯信良知原不昧　從他外物豈能攖
老夫今夜狂歌發　化作鈞天滿太清

其二

處々中秋此月明　不知何處亦群英
須憐絕學經千載　莫負男兒過一生
影響尚疑朱仲晦　支離羞作鄭康成
鏗然合奏春風裏　點也雖狂得我情

明日諸生入て謝す、先生曰く、昔し孔子陳に在まして魯の狂士を思ふ、世の學者は富貴聲利の場に沒溺し、拘の如く囚の如くして之を脫すること莫し、孔子の教を聞くに及で始て一切の俗緣は皆な性の本體に非ざるを知り、乃ち豁然逸脫す、但し此意を見得るも實踐を加へて以て精微に入らずんば即ち漸く世故を輕減し人倫に踈略なるの病あり、世の庸々瑣々たる者に比せば同らずと雖も、其の未だ道を得ずと爲すは一なり、故に孔子陳に在まして歸て以て之を裁して道に入らしめんと思ひしのみ、諸君の講學は但だ未だ此の意を得ざるを思ふ、今幸に此を見て正に好み、精しく詣り力め造りて以て道に至るを求て以て一見自ら足て終に狂に止まること無れと、敎化の盛況實に羨望するに堪へたり、

敬畏と灑落　是月舒柏、敬畏は灑落を累はすや否やを問ふ、先生曰く、君子の所謂敬畏は恐懼憂患の謂に非るなり、睹ざるを戒愼し、聞かざるを恐懼するの謂

のみ、君子の所謂灑落は曠蕩放逸の謂に非るなり、乃ち其の心體は欲に累はされず、入るとして自得せざることなきの謂のみ、夫れ心の本體は即ち天理なり、天理の靈覺は所謂良知なり、君子戒愼恐懼の功夫は時として或は間斷あることなければ則ち天理常に存して其の昭明靈覺の本體、自ら蔽ふ所なく、自ら擾る所なく、自ら餒ゆる所なく、動容周旋して禮に中り心の欲する所に從ふて矩を踰えず、斯れ乃ち所謂眞の灑落なり、是の灑落は天理の常存に生じ、天理の常存は戒愼恐懼の間斷なきに生ず、孰れか敬畏の心は反へつて灑落の累と爲ると謂ふやと、奧妙精微の解眞に味ふべし、

入山養靜の可否　劉侯嘗て山に入りて靜を養ふの可否を問ふ、先生曰く、「君子の心を養ふの學は良醫の病を治むるが如し、其の虛實寒熱に隨て之を斟酌す、要は病を去るに在るのみ、初より一定の方の必ず人人をして之を服せしむることなきなり、若し專ら深山に入り、世故を絕ち、思慮を屛けんと欲するときは既に空寂の性を養はんことを恐る」と、動的功夫、事上練磨是れ又た養心法に外ならず、

聖學は擧業に妨なきを論ず　錢德洪は二弟德周、仲實を携へて城南の某家に讀む、德洪の父、心漁翁往て之を視る、德洪等三人魏良政、魏良器輩と與もに禹穴地方の諸名勝に遊び、十日間返へるを忘る、心漁翁問ふて曰く、諸君相携へて遊歷日久しきを聞く、是れ課業を妨ぐること無きを得んやと、德洪等答て曰く、吾が受驗の科業は時として習はざるはなしと、心漁翁曰く、固より心學は以て類に觸れて通ずべきを知る、然かも朱子の學說も亦た須らく理會すべきや否や、二子の曰く吾が良知を以て朱晦翁の說を求むる、又た何ぞ得ざるを憂へんやと、心漁翁疑未だ釋けず、進で先生に問ふ、先生曰く、「豈に特に妨害なきのみならんや乃ち大益あるのみ、聖賢を學ぶ者は之を譬ふるに、家を治むるに其の產業第宅、服食器物は皆な自ら備へ置く所なるが如し、客を請せんと欲せば、其の有する所を出して以て之に享し、客去れば其の物は具さに有り、還た以て自ち享し、終身之を用て窮りなきなり、今の擧業を爲す者は之を譬ふるに、家を治むるに居積を務めず、專ら假借を以て功夫と爲すが如し、客を招待せんと欲し、客室より以て供具百物に至るまで徧く借らざるなし、客幸にして來れば則ち諸種借物、一時豐裕、觀るべし、客

去れば則ち盡く以て人に還へし、一物も所有に非るなり、若し客を招待して至らずんば則ち時過ぎ氣衰へ假借物も亦た備はらず、終身奔勞して一窶人と作るのみ、是れ求むることの得るに益なきは求むること外に在ればなり」と、明年乙酉、學者大に稽山書院に會講す、錢德洪、魏良政と竝びに其の意見を江浙地方に發表す、心漁翁之を聞て始て實力あるを喜べり、

是時朝廷大禮の議論起る、先生、或夜碧霞池畔に坐す、詩あり曰く

一雨秋涼入夜新　池邊孤月倍精神
潛魚水底傳心訣　棲鳥枝頭說道眞
莫謂天機非嗜慾　須知萬物是吾身
無端禮樂紛紛議　誰與青天掃舊塵

又た賦して曰く、

獨坐秋庭月色新　乾坤何處更間人
高歌度與清風去　幽意自隨流水春
千聖本無心外訣　六經須拂鏡中塵
卻憐擾々周公夢　未及惺々陋巷貧

蓋し痛く大禮の紛事に感ずることありしならん、二詩已に其の微意を示せり、

四月父龍山公の忌服闋る、朝中の諸臣屢〻上疏して先生を引薦す、霍兀厓、席元山、黃宗賢、黃宗明、先後皆な大禮の議を以て先生に問ひしも竟に答へざりき、蓋し別に深意ありしなり、

傳習錄を續刻す

傳習錄は首め薛侃が虔州に刻せしは凡て三卷なりき、是年十月に至て南大吉は先生の論學書を取りて復た五卷を增し、越州に續刻す、四年先生五十四歲、越に在り、正月夫人諸氏卒す、徐山の祖墓に祔葬せり、

尊經閣記

是月先生稽山書院、尊經閣の記を作る、略に曰く、「聖人が人極を扶け、後世を憂へて六經を述ぶるや、猶ほ富家の父祖、其の產業庫藏の積を慮り、其の子孫たる者或は遺亡散失に至り卒に困窮して以て自ら全うすることなきを慮かり、其の家の所有を記錄し以て之を貽し、之をして世々其の產業庫藏の積を守て、享け用ひ以て困窮の患を免れしむるが如し、故に六經なる者は吾心の記錄なり、六經の實は則ち吾心に具はる、猶ほ產業庫藏の實積、種々具さに其の家に存し、

其の記錄は特だ名狀數目のみなるが如し、而して世の學者は六經の實を吾心に求むるを知らずして徒らに影響の間に考索し、文義の末に牽制し、徑々(頑固)然として以て是れ六經なりと爲せり、是れ猶ほ富家の子孫の務て成規を守りて其の產業庫藏の實積を享け用ひず、日に遂亡散失して簸人丐夫に至りて猶ほ囂々然として其の記錄を指して、斯れ吾が產業庫藏の實積なりと曰ふが如し、何を以てか是れに異ならんやと、以て先生の六經に對するの意見を窺ふべし、按ずるに是年南大吉滋政の堂に匾額を掛くして親民堂と曰ひ、山陰の知縣吳嵐重ねて縣學を脩め、提擧僉事萬潮監察御史潘倣と與もに萬松書院を省城の南に開き、試士の未だ盡く錄せられざる者を取りて之を敎養す、皆な記を以て先生に請ふ、皆な爲めに記を作れり、

六月、禮部尙書席書、先生の忌服閔はりたるを以て例に依て應さに就官せしむべしと薦む、御史石金等書を交へて論薦す、皆な用ひられず、禮部尙書席書、上疏を爲りて特に薦めて曰く、生れて臣の前に在る者一人を見る、曰く楊一淸生れて臣の後に在る者一人を見る、曰く王守仁、且さに親しく誥券を領し宮闕に趨きて恩を謝せしむべしと、是こに於て楊一淸は入閣して事を辯じ、明年に領券謝恩の召ありしも、尋て故障ありて之を果さず、九月、徐姚に歸て祖先の墓を弔す、

壁書して諸生を勵ます

先生鄕里に歸て學會を龍泉寺の中天閣に定む、每月、朔望八廿三の四日を以て期と爲し、壁書して以て諸生を勉めしめて曰く、天下に生じ易き物ありと雖も、一日之を曝ためて十日之を寒さば未だ能く生ずる者あらざるなり、諸君の予を聽とせざるや、予の來歸する每に咸な此こに集まり問學を以て事となす、甚だ盛意なるを知る、然れども旬日の間、又た三四會に過ぎず、一別の後ち輒ち復た離群索居して相見ざる者動もすれば年歲を經るあり、然らば則ち豈に唯だ十日の寒のみならんや、是の若くにして萌蘖の暢茂條達を求むるも得べからず、故に予は諸君が予の去留を以て聚散を爲さず、或は五六日八九日俗事相妨くることありと雖も、亦た須らく排障して一會すべきを切望す、此こに於て務は誘掖奬勵、砥礪切磋に在り、道德仁義の習をして日に親しく日に近からしめば、則ち勢利紛華の習染も亦た日に遠く日に疎からん、相會するの時尤も須らく心を虛くし志を遜し、相親み相敬すべし、大抵明友の交は相下るを以

て益と爲す、或は議論未だ合はざるも要は從容涵育、相感して以て成すに在り、氣を動かし勝を求め、傲を長し非を遂ぐるを得ざれ、務は默して之を成し、言はすして信するに在り、其れ或は己の長を矜り、人の短を攻め、粗心浮氣、矯て以て名を沽り、訐を以て直と爲し、勝心を挾みて憤嫉を行ひ、族を圮り群を敗るを以て志と爲さば、則ち日に講じ時に習ふと雖も此れに於て亦た益なからん」と、是れ眞に方今講學者頂門の一針なり、

致知格物論　顧東橋璘に答ふる書に曰く、「足下所謂格物と云ふは是れ吾心を以て理を事々物々の中に求む、孝の理を其の親に求むるが如きの謂なり、是れ恐くは非なり、何となれば孝の理を求めば果して吾の心に在るか、抑〻果して親の身に在るか假りに果して親の身に在りとせば親沒するの後ち吾心には遂に孝の理なきか、孺子の非に入るを見れば必ず惻隱の理あり、是れ惻隱の理は果して孺子の身に在るか、抑〻吾身の良知に在るか、是れを以て之を例せば萬事萬物の理皆な然らざるはなし、是れ以て心と理とを析ちて二と爲すの非を見るべし、予が所謂致知格物の若きは吾心の良知を事々物々に致すなり、吾が心の良知は即ち所謂天理なり、吾心の天理を事々物々に致せば即ち事々物々皆な其理を得るなり、故に曰く、吾心の良知を致すとは致知なり、事々物々皆な其理を得るとは格物なり、是れ心と理とを析ちて一と爲す者なり、心と理とを合せて一と爲せば則ち凡そ余が前きに云ひし所と朱子晩年の論とは皆な言はすして諭るべし」と又た曰く、「心なる者は身の主宰にして心の虛靈明覺は即ち所謂本然の良知なり、其の虛靈明覺の良知が感に應じて動く者之を意と謂ふ、知ありて而る後に意あり、知なくんば則ち意なし、知は意の體に非すや、意の用る所必ず其の物あり、物は即ち事なり、若し意を親に事ふるに用ふるときは即ち親に事ふるを一物と爲す、意を民を治むるに用ふるときは即ち民を治るを一物と爲す、意を訟を聽くに用ふるときは即ち訟を聽くを一物と爲す、凡そ意の在る所は物なき者あることなし、是意あらば則ち是物あり、是意なくんば則ち是物なし、物は意の用に非すや」と、尙ほ本書附錄の格物致知の條を見るべし、

拔本塞源論、先生の理想的治世　先生は以上の致知格物論の末に繼ぐに拔本塞源論を以てせり、是れ有名なる傑作にして至大至廣の觀念を示せり、其の

畧に曰く「聖人の心は天下の人を視るに內外遠近なし、凡そ血氣ある者は皆な其の兄弟赤子なる親族なり、安全にして之を敎養し以て其の萬物一體の念を遂げざるはなし、天下の人心の其の始も亦た聖人に異なることあるにあらず、特に其の有我の私に間てられ、物欲の蔽に隔てられ、大なる者は以て小と爲り、通ずる者は以て塞がる甚しきは其の父子兄弟を視ること仇讎の如くなる者あり、聖人は之を憂ふるあり、是を以て其の天地萬物一體の仁を推し以て天下の人に敎へて皆な以て其の私に克ち其の蔽を去り、以て其の心體の同然に復せしむ、其の敎の大端は則ち堯舜禹の相授受せし所謂「人心惟れ危く道心惟れ微なり惟れ精惟れ一、允に厥の中を執れ」と云ふものにして、其の節目は則ち舜が契に命せし所謂「父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり」と云ふ五者のみ、是の時に當りて人に異見なく、家に異習なし、此こに安んずる者は之を聖と謂ひ、此を勉むる者は之を賢と謂ひ、此に背く者は愚昧なること丹朱の如しと雖も亦た之を不肖と謂ふ、下は閭井田野、農工商賈の賤人に至るまで皆な是の學あらざるはなし、而して唯だ其の德行を成すを以て務と爲す、何となれば見聞の雜、記誦の煩、辭章の靡濫、功利の馳逐あることなし、而かも但だ之をして其の父母に孝し、其の長者に悌し、其の朋友を信じ、以て其の心體の同然に復せしむれば則ち人も亦た孰れか之を能くせざらんや、學校の中唯だ德を成すを以て事と爲す、禮樂に長じ政敎に長じ水土播植に長する者あらば則ち其の成德に就きて因て益々其の能を精くせしむ、夫の德を擧げて任ずるに及では則ち之を用ふる者は唯だ心を同くし德を一にし以て共に天下の民を安んずるを知り、才の適否を視て尊卑を以て輕重と爲さず、勞逸を以て美惡と爲さず、用を效す者も亦た心を同くし德を一にし以て天下の民を安んずるを知り、苟も其の能に當らば則ち身を終るまで卑瑣に安んじて以て賤と爲さず、是の時に當りて才質の下なる者は則ち其の農工商賈の分に安んじ、各自其の業を勤め以て相生じ相養て、高を希ひ外を慕ふの心を有することなし、才能の卓越なること皐夔稷契の若き者は則ち出て、各自其能を效し、或は衣食を營み、或は有無を通し、或は器用を備へ、謀を集め力を併はせ以て其の仰て事へ俯して有するの願を遂げんことを求む、之を一身に譬ふるに目は其の聰なきを恥ぢずして耳の涉る所は目必ず之を營む、足は其の執ることな

きを恥ぢずして手の探くる所は足必ず之に前む、蓋し其の元氣周充し血脈條暢す、是を以て痒痾呼吸、感觸神應し、言はずして之を喩るの妙あり、此れ聖人の學は唯だ心體の同然に復するに在る所以にして知識技能は與かり論ずる所に非るなり、三代以降は敎ふる者も復た此を以て敎と爲さずして學者も復た此を以て學と爲さず、窮者の徒は先王の近似せる者を竊み取て之を外に假りて以て內に其の私を濟す、天下靡然として之を宗とす、聖人の道は遂に以て蕪塞す、世の儒者慨然として悲傷し、先聖王の典章法制を蒐獵して煨燼の餘を掇拾脩補す、聖學の門牆は遂に復た覩るべからず、是に於てか訓詁の學ありて之を傳へ以て名を爲し、記誦の學ありて之を博と爲し、詞章の學ありて之を侈て以て麗と爲す、相矜るに知を以てし、相軋るに勢を以てし、相爭ふに利を以てし、相高ぶるに技能を以てし、相取るに聲譽を以てす、其の出て仕ふるや錢穀を治むる者は則ち夫の兵刑を幷さんと欲し、禮樂を典る者は又た褒貶黜陟の議に與みせんと欲す、故に其の事を能くせずんば則ち以て其の官を棄るを得ず、其說に通せずんば則ち以て其の譽を要むべからず、記誦の廣は適〻以て其の敝を長じ、知識の多は適〻以て其の惡を行ひ、見聞の博は適〻以て其の僞を飾るのみなり、嗚呼是の若きの積染を以てして、又た之を講ずるに是の若きの學術を以てす、宜べなるかな、其の吾が聖人の敎を聞きて之を視て以て無用の長物と爲すや、豪傑の士、待つ所なくして興る者に非んば吾れ誰と與もにか望んやと」、先生の眞意を熟知せんと欲する者は勉めて此種の文を精讀すべし、

十月、門人等陽明書院を越城に立つ、書院は越城の西郭門內、光相橋の東に在り、是より後十二年（嘉靖十七年、先沒後十年、先）にして巡按御史門人周汝員祠を樓前に建て匾額を掲げて陽明先生祠と曰ふ、

良知上より禮を論ず　五年先生五十五歲越に在り、三月、鄒守益に書を與ふ、守益は到廣德州に貶謫せられ、復古書院を築き、以て生徒を集め、「諭俗禮要」を刻し以て民俗を改善す、書至る、先生復書して之を贊せり、其の要に曰く「古の禮の世に存する者は老師宿儒も當年、其說を窮むること能はず、世人其の煩且つ難を苦み、遂に皆な廢置して行はず、故に今人の上と爲りて民を禮に導かんと欲する者は詳

且つ備を難しと爲すに非ず、唯だ簡切明白にして行ひ易からしむるを貴しと爲すのみ、蓋し、天下古今の人、其情は一のみ、先王の禮を制せしは皆な人情に因りて之が節文を爲せり、是こを以て之を萬世に行ふて皆な準あり、或は吾が心に反省して未だ安からざる所の者あるは其の傳記の訛闕にあらずんば、必ず古今風氣習俗の宜しきを異にする者なり、此れ先王は未だ之れあらざりしと雖も、亦た義を以て起すべし、是れ三王の相ひ襲禮せざる所以なり、後世心學を講せず、人其正情を失ふ、難ひかな、之れと與もに禮を言ふことや、然れども良知の人心に在るは萬古も一日の如し、苟も吾心の良知に順ひ以て之を致せば則ち孟子の所謂「足を知らずして履を爲るも我れ其の簀と爲らざるを知る」ものなり、天子に非ずんば禮と制度とを議せずと云ふ、今此を爲すは以て禮を議すと爲すに非るなり、徒だ末世廢禮の極を以て聊か之が兆を爲し以て之を興起せんとす、故に特に此の簡易の說を爲し之をして知り易く從ひ易からしめんと欲するのみ」と、蓋し道德に變遷常恒の二種の部分あうと言ふの論は此語を參酌せば自ら知るを得ん。

南大吉の致良知的修養の効果

四月南大吉入覲す、大吉は當時貶黜せら

る、而も書を先生に致せしとき、千數百言懇々懇々、唯だ道を聞くを得るを以て喜と爲し、學問を急にするを事と爲し、卒に聖人と爲るを得ざるを恐るゝを憂と爲し、畧ぼ一字の得喪榮辱の間に及ぶなし、先生之を讀で嘆して曰く、此れ眞に「朝に道を聞て夕に死すとも可なり」との志ある者にあらずんば未だ以て斯境に涉り易からずと、是こに於て書を復せり、其の要に曰く「世の高抗通脫の士、富貴を捐て利害を輕んじ、爵祿を棄て、快然長く往て顧みざる者も亦皆な之れあり、彼れ其れ或は外道詭異の說に從好し、詩酒山水技藝の樂に投情す、又た或は意氣に奮發し、嗜好に牽溺し、物に待つことあり以て相勝つ、是こを以て彼を去り此を取て而る後に能くす、其の之く所の既に僞み意衒かに心醫し、情の物に隨つて移つるに及べば則ち憂愁悲苦、之れに隨つて作る果して能く富貴を捐て利害を輕んじ爵祿を棄て快然として自得せざることなきのみならんや、夫れ唯だ有道の士は眞に以て其の良知の昭明靈覺、廓然として太虛と體を同くするを見るあり、太虛の中、何物か有らざらん、而かも一物も能く太虛の障礙と爲ることなし、故に凡そ富貴を慕ひ貧賤を憂へ、欣戚得喪、愛憎取舍の類、皆な以て吾が聰明叡知

の體を蔽ひ、吾が洞泉時出の用を窒ぐに足る、明目の中にして之を翳らすに塵沙を以てし、聰耳の中にして之を塞ぐに木楔を以てするが如し、其の疾病醫逆は將に必ず速かに之を去りて快を爲さんとす、何ぞ能く時刻を忍ばんや、關中は古より豪傑多し、其の忠信沈毅の質、明達英偉の器、四方の士、吾が見たりし所も亦た多きも、未だ關中の盛なるが如き者あらず、然れども北宋の張橫渠より後ち此心學を講せず、或は亦た四方と異なることなし、此れより以後關中の士振發興起する所あらん、氣節を變じて聖賢の學を爲す、將に必ず吾が元善兄弟より始まらんとす」と、蓋し南大吉が修養の成れるは力を先生の薫陶に得る者多し、

講學と實務　歐陽德は初め先生に虔州に見ゆ弟子中年最も少し、時に既に鄉試に及第せり、先生常に小秀才を以て之を呼び、左右に侍して使役に服せしむ、德欣然として命を恭ひ勞すと雖も怠らず、先生深く之を器とす、嘉靖二年、進士に登第し、出でゝ六安州を守り、數月にして書を奉じ、以爲へらく、初政多忙後ち稍〻次第し始て諸生と與もに學を講ずるを得んと、先生曰く、善が講ずる所の學は正に政務多忙の中に在り、豈に必ず徒を聚めて而る後に學を講ずることを爲さんや、と、實用活學の主意見るべきなり、

良知と見聞　又た嘗て書を歐陽德に與ふ、其の要に曰く、良知は見聞に因りて有らざるも見聞は良知の用に非るはなし、故に良知は見聞に滯らずして亦た見聞を離れず、孔子曰く、吾れ知あらんや知なしと、故に致良知は是れ聖門に入を敎ふるの第一義なり、今專ら之を見聞の末に求むと云ふときは落て第二義に在り、若し其の良知を致すを、之を見聞に求むと曰ふときは語意の間未だ二と爲るを免れず、此れ專ら之を見聞の末に求むる者とは稍〻同からずと雖も、其の未だ精一の旨を得ずと爲すは一なりと、德性の知と見聞の知との差異は本書附錄の良知の條を見るべし、

錢德洪、王畿と並びに南宮の試驗に擧がりしも俱に志を果さず黃弘綱、張元沖と僧に舟を同くして越に歸る、先生喜び、凡て初て門に及びし者は必ず錢德洪をして開導せしめ其の志定り入ることあるを俟て方さに見えんことを請はしむ、德洪坐に臨む每に默對し、香を焚て語なかりき、蓋し沈毅の人なり、

天地萬物一體と良知　八月聶豹は御史を以て福建省を巡按し錢塘を渡

り來て先生に見ゆ別後に書を致して謂へらく、子思、孟子、周濂溪、程明道、意なくして千歳の下に相逢ふ、其の盡く天下に信せられんよりは眞に一人に信せられんに若かず、道は固より自在、學も亦た自在なりと、先生答書を以て之を諭す其略に曰く、來書を讀み誠に易に所謂君子は是とせられずして悶ることなし」の心を見る、乃ち余は大に已むを得ざる者ありて其の間に存す、以て人の信すると信せざるとを計るに非るなり、夫れ人は天地の心にして天地萬物は本來吾が一體なる者なり、生民の困苦荼毒は熟れか疾痛の吾が身に切なる者に非るか、吾が身の疾痛を知らざるは是非の心なき者なり、是非の心は慮らずして知り、學ばずして能くす、孟子の所謂良知なり、良知の人心に在るは聖愚を問つることなく、天下古今の同くする所なり、世の君子は唯だ其の良知を致すことを務むれば則ち自ら能く是非を公けにし好惡を同くし、人を視ること猶ほ己が家を視るが如くし、天地萬物を以て一體と爲す、斯かれば天下の治平あること無からんことを欲するも得べからざるなり、古の人、能く善を見ては嘗だに己れより出づるが若くするのみならず、民の饑溺を視ること猶ほ己れの饑溺するが如くし、一夫も其の所を獲ずんば己れ推して之を溝中に納れたるが若くなる者は、故さらに是を爲して天下の己れを信せんことを求めしにはあらず、其の良知を致して其の自ら快よきを求むることを務めしのみ、後世良知の學明かならず、天下の人、外は仁義の名を假り、内は以て私利の實を行ひ詞を詭りて以て俗に阿ねり、行を矯めて以て譽を求め、人の善を掩ひ襲ひ取て己が長と爲し、人の私を訐きて竊かに以て己が直と爲す、忿を以て相勝ち猶ほ之を義に徇ふと謂ふ、陰を以て相傾けて猶ほ之を惡を疾むと謂ひ、賢を妬み能を嫉みて猶ほ自ら以て是非を公にすと爲し、情を恣まゝにし慾を縱まゝにして猶ほ自ら以て好惡を同くすと爲し、相凌ぎ相賊ひ、其の一家骨肉の親よりして既に彼此藩籬の隔なきことを視んや、僕誠に天の靈に賴て偶ゝ良知の學に見るあり、以爲らく必ず此れに由りて而る後に天下は得て治むべしと、是を以て斯の民の滔溺を念ふ毎に之が爲めに戚然として心を痛ましめ其の身の不肖を忘れて、此れを以て之を救はんことを思ふ亦た自ら其の量を知らざる者なり、天下の人、其の是くの如くするを見

て、遂に相與もに誹笑して之を詆斥し、以て狂を病み心を喪ふの人のみと爲せり、嗚呼吾れ疾痛の體に切なるに方りて人の誹笑を計るに暇あらんや、昔し孔夫子の世に在ましゝ時、其の「誚を爲す」と議する者あり、其の「佞を爲す」と譏る者あり、其の「未だ賢ならず」と毀り、其れを詆て「禮を知らず」と爲し、之を侮て「東家の丘」と爲す者あり、嫉みて「之を殺さんと欲する」者あり、晨門尚實(二人)の徒は皆當時の賢士なるも、尚ほ且つ曰く「是れ其の不可なるを知て之を爲す者か、鄙きかな硜々乎(祖國の貌)たり、己れを知ることなし、斯こに已まんのみ」と、子路は升堂の列に在りしと雖も尚ほ其の「見ゆる所」に疑なきと能はず、其の「往かんと欲する所」を悦ばず、且つ之を以て「迂と爲したれば則ち當時の孔夫子を信せざる者は豈に特に十分の一二のみならんや、然り而して孔夫子は汲々遑々として亡子を道路に求むるが若くして席を暖むるに暇あらざる者、何ぞ以て人の我を知るを求むるのみならんや、僕の不肖なる、何ぞ敢て孔子の道を以て己が任と爲さんや、願るに其心も亦た已に稍〻疾痛の身に在るを知る、是こを以て彷徨四顧して將に其の我を助くる者あるを求め、相與もに策を講じて其の病を去らんとするの

み、今や誠に豪傑同志の士を得て共に良知の學を天下に明かにし、天下の人をして皆な自ら其の良知を致し、讒妬勝念の習を一洗して以て大同に至らしめば則ち僕の狂病は固より將に脫然として癒えて終に喪心の患を免れん、豈に愉快ならずや、夫れ會稽地方は素より山水の區と稱す、深林長谷、步に任せて皆な佳なり、寒暑晦明、時として宜からざるはなし、良友四集して道義日に新たなり、天地の間、何ぞ復た是れより樂しき者あらんや、孔子云く、天を怨ます人を尤めず下學して上達すと、僕は二三の同志と與もに將さに請ふ斯語を事とせんとす、奚んぞ外慕に暇あらんや、獨り其の膚に切なるの痛は乃ち未だ愁なきこと能はざる者あり と先生が講學を以て己が任と爲し、無上の至樂を其の間に得たるを見るべし、學者の態度固より是の如くならざるべからず、

死後の門人

按ずるに聶豹は初め見えしとき唯だ晩生と稱して未だ門人と稱せず、後ち六年出でゝ蘇州に守たり、先生既に世を辭して四年門人錢德洪と王畿を見て曰く、吾學は誠に之を陽明先生に得たり、尚ほ再び會見して門人と爲らんことを希ひしも今や既に及ばず、茲に二君を以て證と爲すと、香案を具へ先

生を拜して遂に門人と稱せり、是れ先生沒後の事に屬すれども聶豹初見の便を以て此こに之を記す、

十一月次子正億生る、繼室張氏の出なり、先生初て子を得しとき、同鄉の先輩に靜齋六有と云ふ者あり、齡九十を踰ゆ、聞て喜び二詩を以て賀を爲せり、先生次韻して之に謝答せり、蓋し十一月十有七日なり、先生始めに正聰と命名し後七年壬辰外舅黃綰は當時の宰相の避諱に因て今の名に更めたり、

惜陰會起る　十二月劉邦采は安福の同志を合せて會を爲り名て惜陰會と曰ひ、先生に會籍に書せんことを請ふ、先生之が說を爲る、其要に曰く、「同志の安福に在る者隔月に會を爲すこと五日之を惜陰會と曰ふ、其志や篤し、然れども五日の外、孰か惜陰の時に非る、群を離れて索居せば志は少懈なきこと能はず、故に五日の會は以て相稽切する所以のみ、嗚呼天道の運は一息の或は停まることなし、吾が心の良知の運も亦た一息の或は停まることなし、良知は卽ち天道なり、口に之を謂ふだも亦た猶ほこれを二つにするが如し、良知の一息の或は停まることなきを知るは則ち惜陰を知る、惜陰を知るは則ち其の良知を致すを知るなり、夫子は川の上に在まして曰く、『逝く者は斯の如きか晝夜を舍めず』と、此れ其の學は及ばざるが如くし、憤を發して食を忘るゝに至りし所以なり、堯舜は兢々業々たり、成湯は日に新にして又た日に新にし文王は純にして亦た已まず、周公は坐して以て旦を待ちしと、惜陰の功何んぞ獨り大禹を然りと爲すのみならんや、子思曰く、其の覩ざる所を戒愼し、其の聞かざる所を恐懼し、微の顯なるを知れば以て德に入るべしと、或は曰く、鷄鳴て起き孳々として利を爲す、兒人は不善を爲すも亦た惟れ日も足らずと、然らば則ち小人も亦た之を惜陰と謂つべきか」と、蓋し致良知に就きて光陰を惜むべきを示せるなり、

良知　按ずるに先生は明六年に吉安府を過ぎ、安福の諸同志に書を寄す、其の要に曰く、「諸友始て惜陰會を爲ししとき、當時唯だ虛語と成らんことを恐れしに、近來乃ち遠近豪傑風を聞て至る者百を以て數ふと聞く、此れ以て良知の人心固有たるを見るべくして斯道大に明かなるの幾は此に於て亦た以て之を卜知すべし、程明道言へるあり曰く、寧ろ聖人を學で至らざるも一善を以て名を成さゝれと、此れ聖人に志ありて未だ能く眞に聖人の學を得ざる者の爲めには、此くの

如く說くべし、然れども今日講ずる所の良知の說の如きは乃ち眞に是れ聖學の正傳なり、但だ此れに從ふて學ばゝ聖人は却つて至らざる者なし、唯だ恐らくは吾輩尙ほ一善以て名を成すの意ありて、未だ肯へて此こに專心致志せざるなり」と、蓋し同志の士は知的探求既に至りて實踐躬行之に及ばざる所ありしならん、吾人も亦た之に類するの弊あり、戒むべきかな、

致良知的修養法　六年、先生五十六歲越にあり、正月先生書を黃宗賢に與て修養を勵む、其の要に曰く、「人の仕途にあるは之を退て山林に居る時に比せば功夫の難きこと殆ど十倍す、良友を得て時々警發するに非んば平日の志向は移奪し弛然として日に頹靡に就かざる者あること鮮し、近ころ誠甫に與へて言ふ、徹しく氣を動かすの處あるを見ば即ち須らく致良知等の語を提起して互に相規正すべし、凡そ人は言語正さに決意に到る時、便ち翛然として能く忍默し得、意氣正に發揚に到る時、便ち翕然として能く收斂し得、憤怒嗜慾正さに騰沸に到る時、便ち廓然として能く消化し得ることは、此れ天下の大勇に非ずんば能はざるなり、然れども良知を見得て親切なる時は其の功夫も亦た自ら緣り難からず、此の

數病は良知は本來無き所なれども只だ良知の昏昧に依て而る後ちに生ず、中庸に曰へらく「恥を知るは勇に近し」と只だ是れ其の自己の良知を致し得ること能はざるを恥づるのみ、今人多く言語を以て人を屈服し得ること能はず、憤怒嗜慾に當て意を直くし得ること能はざるを以て恥と爲す、殊に知らず此數病なるの事にして、正に君子の宜しく深く恥づべき所なり、諸君の知謀才略は自ら是れ超然として衆人の上に出づ、未だ自ら信ずること能はざる所は只だ未だ自己の良知を致し得ること能はざるのみ、須らく是れ私欲を克ち去り眞に能く天地萬物を以て一體と爲すべし」と、句々緊切、妙味限りなし、

著書に就ての問答　四月鄒守益、先生の文錄を廣德州に刻せんと請ふ、先生自ら年月を標記し、錢德洪に命じて分類編次せしむ、且つ書を與へて曰く、錄する所は年月を以て次第を爲し復た體類を分別せずと、蓋し專ら學を講じ道を明かにするを以て事と爲し、文字體裁の間に意を注がざるなりと、明日德洪遺す所の文を掇拾して又た刻せんことを請ふ先生曰く、此れ便ち孔子が六經を刪述せし

手段に非ず三代の教の明かならざるは、蓋し後世學者の繁文盛にして實意衰へたるに因れり、故に學ぶ所は其本を忘れしのみ、譬へば孔子が詩を刪るが若きも、若し其辭を以てせば豈に三百篇に止まらんや、唯だ其れ一に道を明かにするを以て志と爲す、故に取る所は此に止まりしのみ、例するに六經皆な然り、若し文辭を愛惜するを以てすれば孔子が筆を後世に垂るゝの心に非るなりと、德洪曰く先生の文章は一時の應酬にして彼此同じからずと雖も、亦た性情に本づかざるは莫し、況んや學者の傳誦すること日に久し、恐らくは後世好事者に編輯せられ、反へつて今日裁定の意を失はんと、是に於て先生、附錄一卷を刻するを許し、以て守益に遺る、凡て四冊なり、今日傳はる所の傳習錄中卷にも錢德洪の小序あり、一讀して編輯の意を見るべし。

結論　先生既に宸濠の大難を鎭定し奸臣の讒構を排除し、所謂百死千難中より良知を發見せられたり、此の時期に至ては既に心即理、知行合一、致良知の三綱領完く備はり、陽明學の全體系已に成立せり、故に此の間に於ける先生は自家の學說を主張し門人同志と往復論難して諸種の教學を後人に遺されたり、神仙養生論、儒老佛三教論、入山養靜論、拔本塞源論、天地萬物一體論より、心の動靜に瀝落と敬畏に、講友間の態度等に至るまで最も懇切に說示されたる所、恰も孔門の師弟の問答に似たる者あり、蓋し王門の諸士は文武兼達し學德並進せる偉人を標的として之に近接せんことを努めたるなり、

第十篇　第三靖亂時期

本篇に述ぶる所は先生五十六歲の五月より終焉に至る一年餘に於ける武功及び講學の狀態なり、故に之を或は先生の晚年と稱するも亦た可ならん、抑も先生が文武兩道に於て成功し、文教講授の際に於て武を忘れず、出征靖亂の際に於て講學布教を廢せざりしは頗る稱すべき所なれども、特に第三回の出征靖亂は殆ど干戈に訴へずして、文德を以て感化したるものなれば、此間文教に意を注ぎしことも亦た多かりしを見るなり。

出征の拜命　嘉靖六年五月、先生、都察院左都御史を兼て思州、田州の反賊を征することを命せらる、六月上疏して辭せしも允されず、是より先き廣西、田州の

岑猛亂を爲し、提督御史姚鏌之を征し、猛の父子は擒に就き已に功を論じ賞を行へり、又た盧蘇、王受と云ふ者あり衆を聚め亂を爲し攻て田州思州を陷る、鏌は四省の兵を合せて之を征し久くして克たず遂に巡按御史石金の爲めに駁論せらる、是時朝議に於て侍郎張璁、桂萼の推薦を以て特に先生を起こし、兩廣及び江西湖廣の軍務を總督し事勢を量り宜きに隨て鎭撫せしめ、且つ土地の人を官吏とすると、京師より派遣するとは孰れが便なるや、並に是れより先き事に當りし諸臣の功過を調査して以聞せしめ、且つ責るに愛國を以て心と爲し、或は他人の例に循ふて辭退することなからしむ、先生命を聞て上疏して言ふ「臣伏して念ふに、君命して召せば當に怠を俟たずして行くべし、況んや茲に軍旅のことなるをや、何ぞ敢て辭すと言はん、顧るに臣は今や痰疾を患ひ、增〻劇し、若し疾を冒かして輕しく出で〻事を敗るに至らば死するとも及ぶことなからん、臣又た思ふに思州田州の役は、土着官吏の讎殺に起る、之を寇賊の郡縣を攻劫し生靈を荼毒する者に比せば勢尙ほ差々緩やかなり、若し處置して宜しきを得ば事も亦た成就すべし、姚鏌は素と老成の人、一時の利鈍も亦た兵家の常事なり、御史石金が事に據りて其の罪を論奏せしは鏌等を激勵し之をして後を善くして功を最後に收めしむる所以なり、臣以爲へらく今日の事は宜く專ら鏌等を責むべし、其の委任を大にし其の威權を重くし其の小過を許し、假すに歲月を以てして其の成功を求めて終に績を成すなきに至て然る後に別に才能あり、兼て民情風俗を暗んずる者尙書胡世寧、李承勛の如き者を選び往て其の任に代らしめば事は必ず成るあらん」と、上疏入る、而かも用ひられず遂に鏌に詔して致仕せしめ、使を遣はし敦く先生を促がして征途に上らしむ、八月先生將に兩廣に入らんとす、嘗て「客坐私噿（或は祝に作る）」を爲る、

客坐私祝

但だ願ふ溫恭在諒の友、此こに來り學を講じ道を論じ示すに孝友謙和の行を以てし德業相勸め過失相規し、以て我が子弟を敎訓して非僻に陷ること勿らしめんことを、（前說）願はず狂燥惰慢の徒、此こに來りて、博奕飮酒、傲を長し非を飾り、導くに驕奢淫蕩の事を以てし、誘ふに財を貪り貨を黷すの謀を以てし、冥頑にして恥づることなく、煽惑詖動し以て我が子弟の不肖を益すことを

（後說）、

嗚呼、前說に由る、是を良士と謂ひ、後說に由る、是を凶人と謂ふ、我が子弟苟も良士を遠ざけて凶人に近かば是を逆子と謂ふ、之を戒めよ、之を戒めよ、嘉靖丁亥八月、將に雨廣の行あらんとす、此れを書して以て我が子弟を戒め幷せて以て夫の士友の斯に來臨を辱うする者に告げ一覽して之を敎へんことを請ふと、是れ直ち に取て以て吾人の訓戒と爲すべし、

九月越中を發せんとす、是月八日錢德洪、王畿と與に張元冲を舟中に訪ひ、因て學を爲すの要旨を論ず、將に征途に上らんとするの前夜、德洪王畿大に四言敎の要旨を論じて先生の批判を請へり、四言敎の論は本書附錄に讓る、先生、既に征途に就き錢塘を渡り吳に遊び、山月巖及び巖灘を過ぎて俱に詩あり、又た釣臺を過るの詩に曰く、

憶昔過釣臺　　驅馳正軍旅
十年今始來　　復以兵戈起
空山煙霧深　　往跡如夢裏
微雨林徑滑　　肺病雙足胝
仰瞻臺上雲　　俯溜臺下水
人生何碌々　　高尙乃如此
痼疾念同胞　　至人匪爲己
過門不遑入　　憂勞豈得已
滔々良自傷　　果哉末難已

跋に曰く、右は正德十四己卯に宸濠の俘を獻じ行きて釣臺を過ぎしも登るに及ばず、今茲復た來り、又た兵革の役を以て乘て肺病足疾あり、徒らに顧瞻悵望するのみ、此を書して桐廬縣の尹沈元材に付し、驛亭の壁に刻し、聊か以て經行の歲月を紀すと云ふのみと、時に從行せし諸士は錢德洪、王汝中（龍溪）建德縣の尹楊忠臣、及び沈元材、凡て四人なり、往きて西安の市に至る、雨中に諸生出で迎ふ、因て錢德洪、王汝中及び書院の諸生に示せる詩あり曰く、

幾度西安道　　江聲暮雨時
機關鷗鳥破　　踪跡水雲疑
仗劍非吾事　　傳經媿我師

天眞泉石秀　新有鹿門期
後德洪、王汝中方さに地を卜して書院を築く、先生盛に天眞地方の奇觀を稱す、又
た之れに寄せたる詩あり曰く
不踏天眞路　依稀二十年
石門深竹徑　蒼峽瀉雲泉
泮壁環香水　龜畴見宋田
文明原有象　卜築豈無緣
是に仰止祠、環海樓、太極、雲泉、洞雲の諸亭ありしと云ふ
常山を過るの詩に曰く、
長生徒有慕　苦乏大藥資
名山徧深歷　悠々發生絲
微軀一繫念　去道日遠而
中歲忽有覺　九還乃有茲
非媿亦非鼎　何坎復何離
本無終始究　寧有死生期
彼哉遊方士　詭辭反增疑
紛然諸老翁　自傳困多岐
乾坤由我在　安用他求爲
千聖皆過影　良知乃吾師

徐樾の禪定を諭す

十月、南昌府に至らんとす、先生舟を廣信府に發す、沿途の諸生徐樾、張士賢、桂軌等見えんことを請ひしも俱に謝するに兵事未だ暇あらざるを以てす、徐樾は貴溪より追ふて徐于に至る、先生舟に登らしむ、樾方さに白鹿洞の靜坐より禪定に入るの意あり、先生與もに語りて之を知り、靜虛の功夫に僻することなれと戒めらる、

歡迎の盛況

既にして南浦に至る、父老軍民俱に歡迎して林の如く立ち、道路に充滿して、行くこと能はざるに至る、父老左右前後より先生を奉擁して官府に入る、先生乃ち父老軍民に命じて就きて面謁せしめ東門より入て西門に出でしむ、或は出でざる者あり、或は出でゝ復た入る者あり、辰より未に至て(六時間)漸く

散せり、茲に始て常例儀式を擧行し、明日孔子の廟に拜謁し、大學を明倫堂に講ず、諸生群聚して滿堂立錐の地なく多くは聞くこと能はざりき、

氣象人を動す　是時に唐堯臣と云ふ者あり、先生に茶を獻じ講堂に上るこを得て傍聽す、初め堯臣は疑を懷て學を信せず、先生の南浦に至るを聞て鄕より出て迎へ心已に內に動き面謁するに及び先生の氣象を見て悠然として悟りて毫も疑なし、同門に黃文明、魏良器の輩あり、笑て堯臣に謂つて曰く、汝懷疑者も亦た來りて降參せるかと、堯臣曰く、須らく此の如き名將を得て方さに能く我を降すべし、汝輩安んぞ能く我を降さんやと、以て先生の感化力の大なるを見るべし、

士友三百餘人を會し良知を談ず　吉安府に至りしとき、螺川の諸生、彭簪、王釗、劉陽、歐陽瑜、等と偕に舊遊三百餘人歡迎して螺川驛中に導びく、先生立談倦まず、其の要に曰く、堯舜は生知安行的聖人なるも猶ほ勉めて困知勉行的功夫を用ひたり、吾輩は困知勉行的資質を以て悠々として坐しながら生知安行的成功を收めんとす、是れ豈に己れを誤り人を誤まるにあらずやと又た曰く、良知の效用は至大至廣なれども若し假りて以て過を文ざり非を飾らば其の害たること大ならんと、別に臨て諸人に囑して曰く修學の工夫は只だ是れ簡易眞切なれ、愈々眞切にして愈々簡易、愈々簡易にして愈々眞切なれと、蓋し簡易は是れ陽明學の特徵なればなり

同志を督勵す　十一月十八日肇慶に至り、先生、書を錢德洪、王畿（字は汝中）に寄せらる、其の要に謂へらく「家事は魏廷豹の盡力に依賴す、德洪、王汝中も亦た相與もに其間に蒸陶切劘すれば吾れ以て內顧することなかるべし、紹興書院中の同志、近來の意向如何を審かにせざれども、德洪、汝中既に其の責に任ずれば當に能く振作接引して興起する所あるべし、會講の規約は但〻廢せざるを得ば其間に縱令ひ一二懈弛あるも亦た此れに因て維持せば遂に傾倒あることを致さゝるべし、餘姚の諸士も又た應元地方の諸友を得て作興鼓舞せば想ふに其の進德益〻日に異にして月に同からざらん、今や老夫は山林を出づると雖も亦た每に之を以て自ら慰め、諸賢は皆な一日千里の驥足、豈に區々が警策する所あるを

待たんや、聊か亦た此を以て鞭影を視めさんとするのみ、即日已に肇慶に至り梧州に去り、三四日ならずして到て方さに田州の賊地に入るべし、紹興書院及び餘姚の各會同志の諸賢は一一名字を列すること能はず、宜しく余が意を傳ふべし」

經略上の意見

十一月二十日梧州に施政府を開く、十二月朔上疏して曰く、

「田州の事は尚ほ未だ會議審處するに及ばず、然れども臣は沿途に於て之を諸老に問ひ、頗る聞く所あり、敢て陛下の爲めに略を言はずんばあらず、臣惟ふに岑猛の父子は固より誅すべきの罪あり、然れども彼等を是の若きに致せし所以の者は則ち是れより先き事に當れる諸官も亦た宜しく其責を分受すべし、蓋し兩廣軍門（鎮臺）は專ら諸蠻賊及び諸流賊防禦の爲めに設けたれば其の事其の權質に專且つ重なり、若し其兵威を振ひ自ら以て諸蠻賊を制服するに足らしめば、夫れ何の軍政か日に壞れんや、而かも今や上に任ずべきの將なく、下に用ふべきの兵なく、警報あらば必ず地方官吏と地方兵卒を調發使用すべしとす、岑猛の屬の若き者にして而る後に亂を行ふ、故に此輩は以て兵力を憑恃し、日に桀驁を增すを

得たり、亂の平定するに及では則ち又た功を上に歸して地方官吏兵卒は與かる所なし、故に固より以て怨憤なきこと能はず、始にして調發に期を愆り、既にして調遣するも至らず、上の嫉と下の憤は日に深く月に積み、之を劫かすに勢を以てして威益〻濱がれ、之を籠絡するに詐を以てして益〻塞がり、之を撫して益〻疑ひ、遂に今日あるに至れり、今や山盜海賊は隙に乘じて動搖し、窮迫せるの寇盜も既に從ふて之を煽誘す、貧苦流亡の民も又た從ふて逃れて之に歸す、其の憂危すべきは奚ぞ曾だ二酋に百倍する患と爲すのみならんや、其の事既に兆して變已に形はる、願て猶ほ此れを慮らずして二酋の征討に汲々たるは則ち當事者の過なり、臣又た聞く、諸々兩廣地方の士民の言に皆な謂ふ派遣官久しく設けたるも亦た徒らに虛名ありて實は禍を爲すと、其の所以を詰るに皆な云ふ、未だ派遣官を設けざるの前は土人歲に土兵三千を出し以て官府の調遣に應せり、既にして派遣官を設くるの後は官府歲に民兵數千を發し以て土人の反叛を防げりと、此の一事に就きて考ふるも利害知るべし、且つ思州田州に派遣官を設けしより十八九年の間、反亂數〻起り、征討日に休息なし、

良民の膏血を絞りて之を無用の地に塗る、此れ派遣官の無益なること、斷じて識るべし、論者以爲へらく既に派遣官を設けて復た之を去らば則ち輕しく變更するの嫌あり、恐くは世の物議を招かんと、是を以て寧ろ一方の民をして久しく塗炭の苦に罹らしむるも敢て明かに朝廷の爲めに言はず、寧ろ朝廷に負くも敢て衆議に反抗せず、甚しいかな、人臣の不忠なるや、苟も國に利益ありて民に補益あらば死すとも且さに之を爲さんとすべし、而るを何の物議か計るに足らんや、臣は始て此こに至り未だ能く知り備さに見ること能はずと雖も、然れども形勢は略ゝ概見すべし、田州は交趾に接近し、其間は深山絶谷、蠻賊盤據するもの、動もすれば千人を以てす、必ず須らく土着官を存し、其の兵力に頼りて以て中土の藩屏と爲すべし、若し盡く其の人を殺し土着官を改めて派遣官と爲さば則ち邊鄙の患は我自ら之れに當り自ら藩屏を撤去するなり、後ち必ず悔あらん」と、在朝の諸士議して先生の說を採用す、決議の要に曰く、「守仁は才略素より優なり、議する所必ず自ら見あらん、事は遙に度り難し、其の會議の熟する處を俟て須らく處置は中庸を得て久きを經て患なかるべきを要す、事の宜く亟かに行ふべき者あらば、其の便宜を聽るし、願忌を憚きて以て後患を貽す勿れと、蓋し先生の才略は既に朝野に聞えたるなり

文德の化を懷ふ

初め總督の命下るや、疏を上まつりて之を辭免し若し強ひて我を用ひんとならば、南北京太、常國子の任の如き閑散の職に就かしめばと則ち報恩を圖るに適當ならんと曰ひしも遂に允されず、黃綰に書を與へて曰く、「往年宸濠の亂に於て義に赴ける將士の功も久しく未だ上報せず、人々勸むる所なきに再び出でば何の面目あつてか之れに見えん、且つ東南の小賊は特だ疥癬の疾の如きのみ、在朝の百僚、讒妖朋比せば此れ則ち腹心の禍、大に憂ふべき者と爲す、諸公、事に任ずるの勇を思はずんば何を以てか後を善くせん、大都、君子の道表はれて小人の道消え、疾病既に除きて元氣自ら復す、但し病を去ると雖も亦た元氣を耗す、藥石固より當に漸を以てすべしと、又た曰く、思田二州の事は本と緊要なし、只だ從前張皇太だ過ぎたる後なるが爲に收拾し難し、今必ず奏中に請ひし所の如きを得ば、庶がはくは久安を圖るべし、否ずんば則ち反覆未だ知るべからざるなりと」黃綰は先生の親戚にして先輩なり故に意中を語ること

と此の如し方獻夫に與ふる書に曰く、「今上は聰明不世出なり、今日の急にする所は唯だ君德を培養し其の志向を端すに在り、此こに於て立つあらば是れを一たび君を正しくして國定ると謂ふなり、然れども眞に國を體するの誠あり、其心斷々（誠一の貌）休々（寛大の貌）たる者たらずんば亦た徒らに其の名を事とするのみと、又曰く諸公は皆な賢を薦むるの上疏あり、此れ誠に君子が朝に立つの盛節なり、但し各〻自ら事に與みせば其の間郤つて未だ諭らざる所の者あり、此れ天下の治亂盛衰の繫る所君子小人進退存亡の機なり、以て愼まざるべからざるなり、之を養蠹に譬ふるに但た一爛蠹を其中に雜ふれば即ち一窪の好蠹は盡く壞る所と爲るが如し、凡そ賢を朝に薦むるは自己が人を用ふるとは同からず、自己が人を用ふるは憺度は我に在り、賢を朝に薦むるが若きは則ち品評宜く定むべし、小人の才も豈に用ふべきものなからんやと」

又た曰く「思田二州の事は已に壞れたり、無事を以て之を處せんと欲するも已に能はず、只だ一分を減省するを求めば則ち地方も亦た一分の勞擾を減省すべきのみ、此議は深く大に事を喜ぶ者の心に怫るを知る、然れども數千無罪の人を殺して以て一將の功を成すを求むるは仁者の忍びざる所なり」と、方獻夫も亦た先生の先輩なり故に此言ありしなり十二月暫らく兩廣を巡撫するを兼務するを命せらる、上疏して辭せしも允されず

賊徒鎭定の報告

七年先生五十七歲梧州に在り、二月思州田州平ぐ、先生上疏す、其略に曰く「臣は成命を奉有して巡按紀功御史石金、布政使林富等、副使祝[illegible]、林文輅等、參將李璋、沈希儀等と與もに會議す、思田二州の役、兵連り禍結ぶ、兩省の荼毒已に二年に踰え、兵力は哨守に盡き、民脂は轉輸に竭き、官吏は奔走に罷る、今日の事は已に破壞せる舟の顚風巨浪に漂泊するが如し、救溺の患は洶々として目に在ること智者を待たずして之を知る」と、因て其時の利害を詳にして反救して之を言ひ、且つ曰く「臣は南寧府に至り乃ち令を下し盡く調集防禦の兵を撤したれば、數日の內に解散して歸る者數萬人、唯だ湖兵數千人は道阻しく且つ遠くして即ち歸り易からず、仍て賓寧縣に分留し、甲を解きて休養し、間を待て發せしむ、初め蘇受等は臣が命を鎭撫に奉ずと聞き、始めて朝廷に必ず殺すの意なきを知り、皆な投降生存の念あり、日夜懸望して唯た臣至るの速かならざるを恐る、

已にして太監總兵相繼で召還せらるゝを聞き、是に至て又た、守兵の盡く撤するを見て、其の投降生存の念益々堅し、乃ち其の頭目黃富等を遣はし先つ軍門に赴き告訴して境を掃ふて投降生存するを得んことを願ひ、唯だ一死を免せんことを乞へり、臣等諭すに朝廷の意を以てして、曰く正に爾等の虐枉する所あるを恐る、故に特に大臣を遣はして審査せしめ、爾等蘇生の路を開く、爾等果して能く誠心投順せば當に爾の死を免すべしと、因て復た朝廷の威德を露布し各々歸省諭旨を持し、期を刻して降を聽さしむ、蘇受等は合圍を得て皆な羅拜踴躍し、歡聲雷動す、衆を率ゐ境を掃ふて命を南寧城下に歸し、四營に分屯す、蘇受等四首は自縛して其の頭目數百人と與もに軍門に赴きて命を請ふ、臣等諭すに朝廷既に爾等の罪を赦すを以てせり、豈に復た信義を虧失せんや、但だ爾等が衆を擁し固を負ひしは死を畏るゝに由ると雖も、然かも一方を騷動し、上は九重の慮を煩はし、下は三省の民を疲らせり、若し罪を示さずんは何を以てか軍民の憤を泄らさんやと是に於て蘇受を軍門に下して各々之を杖すること、一百、乃ち其の縛を解き、諭して曰く『今日に於て爾が一死を宥す者は朝廷の天地好生の仁なり、必ず爾を杖して罪を示す者は我等人臣の法を執るの義なり』と、是に於て衆皆な叩首悅服せり、臣も亦た隨て其の營に至て其の衆を撫定せり、凡そ一萬七千人、道路に讖々として踴躍歡聞し、皆な謂へらく朝廷此の如き再生の恩我等誓て死を以て報せんと且つ卽ち願くは賊を殺し功を立てゝ罪を贖はんと乞ふ、臣因て諭すに朝廷の意を以てし、唯だ爾等を生全せんと欲す、今爾等方さに來て投順す、豈に又た之を兵刃の下に驅るに忍びんや、爾等逃竄日已に久しく、且つ宜く速かに歸て爾の家室を完うし生計を回復すべし、諸路の群盜に至ては自ら區分處置する所あらん徐ろに當に爾等を調發すべしと、是に於て又た皆な感泣歡呼して皆な謂へらく、朝廷此の如き再生の恩、我等誓て死を以て報せんと、臣是に於て遂に張祐、方陽に委任して之を平定せしめたり、是れ皆皇上の神武不殺の威風、廟堂の上に行はれて百蠻の表に草偃せるなり、是を以て師を班へすこと七旬を待たずして蠻夷卽ち爾かく來り格る、一矢を折らず、一卒を戮さずして數萬の生靈を全活す、是れ所謂之を紱んずれは斯に來り之を動かせは斯に和らく者なりと、上疏入る、勅して行人を遣はして奬勵し、銀五十兩紵絲四襲を賞賜し、所司は羊酒を分賜せられ、其

の餘は各々賞を給ふこと差等あり、先生文を爲り石に勒して曰く、

嘉靖丙戌(五年)夏、官兵田州を代つ、隨て思恩の人人と與もに相煽し軍を集め四省洶々たること連年、時に於て皇帝は元元を憂悶せられ、無辜にして死する者あるべけんやと、迺ち新建伯王守仁に令すらく、盍ぞ往て師を視ざるや、且れ德を以て綏んじ兵を以てすることなかれと、虔んで師を班へし旅を撤し、信義大に宣び、諸夷感慕す、旬日の間に自ら縛して來り歸する者一萬七千、悉く之を放ちて農に還らしめ、兩省以て安し、昔し、有苗(蠻賊)徂て征すること七旬にして來り格る」と、今は未だ期月ならずして蠻夷率ひ服す、之を綏んずれば斯に來る郵傳よりも速かなり、舞干(舜の文德の化)の化も何を以てか之れに加へん、爰に思田の民に告げて帝德を忘るゝこと勿らしめ、爰に山石に勒して此の赫々たる文武の聖神を昭かにす、率土の濱、凡そ血氣ある者の尊親せざるはなし」と、

學校を建つ

四月に都臺を田州に遷すことを議せしも、果さず、思州田州の學校を興す、先生以爲へらく、田州は新に歸服す、風俗を改善するは宜しく學校あるべし、但〻瘡痍逃竄の民、未だ業に就かず、學は何に由つて建つべきか、而かも風化の根元は紲に緩くすべからずと、乃ち屬する所の諸生に命じて、田州の府學に從事せしめ、又た各處の儒生にして學に入るを願ふ者は之を許可し、相與もに講習遊息し、孝悌の道を興す、或は唱へて鄉約を行ひ事に隨て開導し、漸く之が端緒を爲し、學堂を增設するを俟て然後に各生徒を許して學校に昇降して業を習はしめたり、

五月、新民を愛撫す、六月に南寧府の學校を興す、先生謂へらく、性理の學明かならずんば人心陷溺す、是を以て士習日に偷く、風敎振はずと、日に各學校の敎師と與もに朝夕に講を開き已に漸く奮發の志あるを覺ゆ、又た窮鄉僻邑にして身の其地に至ること能はざるを恐れ、陳逅に委し、靈山諸縣の敎育を主らしめ、季本をして敷文書院に敎鞭を執らしむ、

餘賊の征討

七月に八寨及び斷藤峽を襲つて之を破る、八寨及び斷藤峽の諸賊數萬人、南方交趾の諸夷に通じ、西方雲南貴州の諸蠻に接し、東北は牛腸、仙臺、華相、風門、佛子及び柳慶、府江等の諸賊と與もに廻旋連絡し、延袤二百餘里、流劫出沒して害を爲すこと歲久し、比ごろ思州田州に事あるに因て、勢征討に及ぶに暇

あらず、是に至て先生は思田二州既に平ぎ盧蘇、王受、新に歸服せるを以て乃ち湖廣を保安し師を歸へすの便に因て、布政使林富、副總兵張祐等をして其不意に出で道を分て之を征せしむ、富、祐は右江及び思田二州の兵を率ゐ進で八寨の諸賊を破り、參議汪必東、副使翁素等は左江及び永保の土兵を率ゐ進で斷藤峽の諸賊を破り、該道の分巡兵備に合せしかば紀功御史刪報及び行太監張陽幷に各鎭臺の兵來會せり、一月の內、大に賊の衆を破る、斬獲三千餘人、先生諸賊の巢穴既に掃蕩して我兵の疾疫あるを見て遂に師を班へし捷を上奏す、

乃ち上疏して思田二州八寨及び斷藤峽を經略せんと請ふ、上疏の略に曰く、斷藤峽の諸賊は各處に屯聚す、國初より以來歷〻征すれども服せず、天順（英宗の時）年間に至て都御史韓雍は兵二十萬を統ひ其の巢穴を破て兵を撤回せり、既にして賊復た湟州を攻陷し、城に據りて大に亂る、後ち復た兵を合して討撫に從ふを量る、自後竊かに發すること時なし、兇惡性と成り改め化すべからず、八寨の諸賊に至ては尤も兇猛と爲す、利刀毒弩も其鋒に當るなし、且つ其の寨壁天險にして兵を進むるに路なし、國初より都督韓觀甞て數萬の衆を以て其地を圍みしも亦た破る能はず、竟に招撫に從ふて罷む、後ち師を興して合討せしも一も獲る所なく、反て我に擾襲多し、唯だ成化（憲宗の時）年間に至て土官岑瑛甞て精兵を合せて深く敵地に入り、斬獲二百人、已にして賊勢大にして銳氣支ふること能はず、亦た慰撫に從て罷む、今や湖廣の歸兵に因て其順服の勢を致し、思田二州の新服兵を作して善く其の報效の機を用ふ、兩地の進兵各〻八千の衆に滿たずして三月に捷を報ず、兩廣の父老皆な以爲へらく數十年來未だ此快舉あらざるなりと、以て成功の速なるを察すべし、九月八日行人馮恩は恩賜の賞品を賫捧して鎭（所守）に至る、蓋し思田二州の功を賞せしなり、故に先生上疏して之を謝せり、

學況及び家事を案ず　是時錢德洪、王畿の二人に書を與へて家鄉の消息を問ふ其の要に曰く、該地方の事幸に遂に平定せり、諸君と相見るも漸く期すべし、近年、同志の聚會如何を審にせず、法堂の前今已に草の深さ一丈なるとなきを得るや否や、想ふに臥龍地方の會は大に益する所あること能はずと雖も、亦た宜しく遂に爾かく荒落せしむべからず、且らく餘羊（形跡）を存せば後ち或は興起せんも亦た未だ知るべからず、徐姚に應元地方の諸友を得て相與もに唱へ率ゐば益

と爲ること少からず、近頃人あり家鄕より來る、龍山の講會は今に至て廢せずと聞く、亦た殊に喜ぶべし、書到らば徧く同志に聲を寄せ益〻相與もに之を勉めんことを望む、守儉、守文、正憲輩能く來りて親近するや否やを審にせず、誘掖接引の功、人と與もに善を爲すの心は當に予が多喋を俟たざるべし、魏廷豹は決して能く依託する所に負かず、兒輩、或は敎に率ふ能はずんば亦た相與もに之を夾持せんことを望む」と、遠征の途に在りて同志家庭を懷ふ、情緒果して如何ぞや、

咳痢を患ふ　十月、先生疾劇きを以て疏を上りて賜暇を請へり、其略に曰く、「臣は往年より乏を南贛に承け、炎毒の中る所と爲り、遂に咳痢の疾を患へ、歲に益〻甚し、其後ち林野に退休し稍〻醫藥に就きしも疾も亦た終に止まると能はず、去歲より廣(地方)に入りて炎毒益〻甚し、疾を力めて事に從ひ事を竣て出て遂に爾かく復た步行すること能はず、今已に輿に乘じて南寧府に至り移て舟に臥し、次で將に遂に梧州より廣に入り、命を韶、雄(地方)の間に待たんとす、夫れ忠を竭し以て國に報ずるは臣の素志なり、陛下の深恩を受て粉身碎骨し以て自ら效すを得んことを思ふ、病日に危に就きて尙ほ苟も全からんことを求め、以て後報を圖りて病を養ふの擧を爲す、此れ臣の大に已むを得ざる所以なりと、奏疏入りしも、亦た允されず、

先生一日、伏波將軍の廟に拜謁す、廟は梧州に在り、漢の馬援を祀る所なり、先生十五歲の時嘗て夢に伏波廟に謁せしが、是に至て祠下に拜す、宛然夢中の如し、謂へらく茲行殆んど偶然に非るなりと、感慨胸に塞がる、因て二詩を賦す、

其の一に曰く、

四十年前夢裡詩　此行天定豈人爲
徂征敢倚風雲陣　所過須同時雨師
尙喜遠人知向望　却慚無術救瘡痍
從來勝算歸廊廟　恥說兵戈定四夷

其の二に曰く、

樓船金鼓宿鳥蠻　魚麗群舟夜上灘
月遶旌旗千嶂靜　風傳鈴木九溪寒
荒夷未必先聲服　神武由來不殺難

想見虎廷新氣象　　兩階干羽五雲瑞

隨處體認天理と致良知　鄒守益に書を與へ、講學法を示すに、隨處體認天理の說、勿忘勿助の說は大約未だ營て是れ根本的たらず、即ち未だ捕風捉影たるを免れず、縱令ひ微旨に徹底するも亦た聖門致良知の功と尙ほ一塵を隔つ、若し復た之を失ふこと毫釐ならば便ち千里の繆あらん、世間無志の人、既に聲利辭章の弊習に瞞らる、間〻自己性分の當に求むべきを知る者あるも又た一種の似是而非の學に羈縻せられて終身之を解くことを得ず、未だ眞に聖人たるの志あらず、未だ見小欲速の私心を挾有するを免れず、是を以て豪傑の士に在りと雖も任重く道遠し、志稍〻力めずんば又た其中に陷る者多しとの意を以てせり、

增城なる先祖の廟を祀る　蓋し先生五世の祖、王綱苗賊の難に死し、增城に廟祠するあり、是月、有司、復び其の祠宇を新にす、先生、祠に謁し祀を奉ず、因て知友湛甘泉の廬に過ぎり、詩を其の壁に題して曰く

我祖死國事　肇禋在增城
荒祠幸新復　適來奉初烝
亦有兄弟好　念言思一尋
蒼々見霞色　宛隔環瀛深
入門散圖史　想見拘膝吟
賢郎敬父執　童僕意相親
病軀不遑宿　留詩慰慇懃
落々千百載　人生幾知音
道同著形迹　期無奉初心

又た湛甘泉の居に題して曰く、

我聞甘泉居　近連菊坡麓
十年勞夢思　今來快心目
徘徊欲移家　山南尙堪屋
渴飮甘泉泉　饑食菊坡菊
行看羅浮雲　此心聊復足

同志を勵し、家事を囑す　又た錢德洪、王畿に書を與へ、當時の狀況を述

べて曰く、來書を見て、近日工夫の進むあるを知り、喜慰と爲すに足る而して餘姚、紹興の諸同志又た能く相聚會講學、蓄發興起し、日に勤て懈らず、吾道の隆昌は火燃え泉達するの機あり、喜幸當に何如すべきや、此間地方悉く已に平靖せり、只だ二三の大賊巢ありて兩省盜賊の根株淵藪と爲り、民患を爲す、予れ亦た一除剪を爲さゝること能はず、故に復た逗留すること二三月なりしも、今亦た其の事を了れり、旬月の間便ち當に歸途に就くべし、守儉守文二弟は近頃挾持啓發を承く、想ふに亦た漸く進む所あらん、正憲は尤も懶惰を極む、若し痛く鍼砭を加へずんば其の病未だ能く去り易からず、父子兄弟の間、情既に迫切す、善を責むるは反て難し、其任は乃ち師友の間に在り、想ふに平日骨肉道義の愛當に多囑を俟たざるべしと、先生預じめ歸鄉の期を報じて樂と爲したれども遂に不幸にして征途に卒するの慘狀を呈するに至れり、

終焉、此心光明復何言　是時に方りて先生の病勢日に劇しく、廣城に至てより又た下痢を增し、日夜數行して止むるを得ず、今に至て遂に兩足坐立することと能はざるに至れり、蓋し先生の疾は年來の肺患に加ふるに下痢を以てしたれば身體漸次衰弱に趨きたる者の如し、今や思田二州の賊徒既に平定して歸鄉の途に在り、且つ先生は歸途同志と會談するの快を豫想し、又歸田靜養の心算を爲せるも一も果たす能はず、天何んぞ其れ斯偉人に幸せざるや、十一月廿五日梅嶺を踰え、南安府に至り舟に登る、時に南安推官門人周積來り見ゆ、先生起坐、咳喘已まず、徐ろに言て曰く、近來學に進むこと何如周積は政を以て對へ、遂に道體恙なきやを問ふ、先生曰く、病勢危篤なり未だ死せざる所の者は元氣のみと、周積退て醫を迎ふ、醫來て診察して服藥せしむ、廿八日晚に舟を泊す、何地ぞと問ふ、侍者曰く、青龍舖なりと、明日先生、周積を召して舟に入れ、之を久うして目を開き視て曰く、吾去らんと、周積泣き下り、何の遺言かあると問ふ、先生微笑して曰く、此心光明復た何をか言はんと、之を頃くして目を瞑して逝きぬ、實に是れ嘉靖七年十一月二十九日辰の時なり、百世殊絕の偉人遂に世を辭せり、噫

歿後の狀況　是に於て贛州の兵備官門人張思聰は親ら南埜驛に迎て廣の布政使門人王大用が贈る所の美材を以て棺を製し、周積は驛の中堂に沐浴斂禮の如くす、十二月三日門人劉邦采至り、官屬奠を設けて棺に入る、明日輿櫬して

べて曰く、來書を見て、近日工夫の進むあるを知り、喜慰と爲すに足る而して餘姚・紹興の諸同志又た能く相聚會講學、奮發興起し、日に勤て懈らず、吾道の隆昌は火燃え泉達するの機あり、喜幸當に何如すべきや、此間地方悉く已に平靖せり、只だ二三の大賊巢ありて兩省盜賊の根株淵藪と爲り、民患を爲す、予れ亦た一除剪を爲さゝること能はず、故に復た逗留すること二三月なりしも、今亦た其の事を了れり、旬月の間便ち當に歸途に就くべし、守儉守文二弟は近頃挾持啓發を承く、想ふに亦た漸く進む所あらん、正憲は尤も懶惰を極む、若し痛く鍼砭を加へずんば其の病未だ能く去り易からず、父子兄弟の間、情既に迫切す、善を責むるは反て難し、其任は乃ち師友の間に在り、想ふに平日骨肉道義の愛當に多囑を俟たざるべしと、先生預じめ歸鄉の期を報じて樂と爲したれども遂に不幸にして征途に卒するの慘狀を呈するに至れり、

終焉、此心光明復、何言　是時に方りて先生の病勢日に劇しく、廣城に至てより又た下痢を增し、日夜數行して止むるを得ず、今に至て遂に兩足坐立すること能はざるに至れり、蓋し先生の疾は年來の肺患に加ふるに下痢を以てしたれば身體漸次衰弱に趨きたる者の如し、今や思田二州の賊徒既に平定して歸鄉の途に在り、且つ先生は歸途同志と會談するの快を豫想し、又歸田靜養の心算を爲せるも一も果たす能はず、天何んぞ其れ斯偉人に幸せざるや、十一月廿五日梅嶺を踰え、南安府に至り舟に登る、時に南安推官門人周積來り見ゆ、先生起坐、咳喘已まず、徐ろに言て曰く、近來學に進むこと何如周積は政を以て對へ、遂に道體恙なきやを問ふ、先生曰く、病勢危篤なり未だ死せざる所の者は元氣のみと、周積退て醫を迎ふ、醫來て診察して服藥せしむ、廿八日晚に舟を泊す、何地ぞと問ふ、侍者曰く、靑龍舖なりと、明日先生、周積を召して舟に入れ、之を久うして目を開き視て曰く、吾去らんと、周積泣き下り、何の遺言かあると問ふ、先生微笑して曰く、此心光明復た何をか言はんと、之を頃くして目を瞑して逝きぬ、實に是れ嘉靖七年十一月二十九日辰の時なり、百世殊絕の偉人遂に世を辭せり、噫

歿後の狀況　是に於て贛州の兵備官門人張思聰は親ら南埜驛に迎て廣の布政使門人王大用が贈る所の美材を以て棺を製し、周積は驛の中堂に沐浴斂殮の禮の如くす、十二月三日門人劉邦采至り、官屬奠を設けて棺に入る、明日輿櫬して

復た舟に登る、士民遠近道を遮りて、大に哭す、舟の過ぐる所、門生軍民祭を設けて拜す、

八年己丑正月、喪、南昌府を發し、六日弋陽縣に至る、錢德洪、王畿は正憲と倶に來會せり、二月庚午、喪、鄉里に至る、四日子弟門人柩を中堂に置き、遂に喪紀を飾る、婦人は門內に哭し、孝子正憲は弟正億を携へ、親族子弟と門外に哭し、門人は幕外に哭す、朝夕祭奠を設くること儀の如くし、每日門人來弔する者百餘人初喪より葬を卒るに至るまで歸らざる者あり、書院及諸寺院、聚會すること師存せし日の如し、十一月先生を洪溪に葬る、是月十一日門人の會葬する者千餘人柩を扶けて哭す、四方來覲する者涕を交へざるはなし、時に禮部尚書桂萼私怨を洩す所あり、讒奏して言ふ、守仁は生徒を聚め、邪說を唱へ、先儒を詆りて、忌憚する所なし、叛黨を擒獲するの功は錄するに足ると雖も、邪說の禁は姑らくも貸すべからずと、乃ち詔を下して僭贈謚の諸典を停め且つ僞學を禁ず黃綰直に上疏して反駁せしも採用せられず、然れども陽明學は却て是より倍〻天下に普及せり、十一年方獻夫等同志を合して京師に會す、陽明學の禁制嚴にして薛侃等已に罪に遭ひしも黃綰程

文德、歐陽德、黃宗明等四十餘人來り會す、十二年歐陽德同志を合して南畿に會す、十三年鄒守益復古書院を安福に建て、李遂講舍を衡麓に建てゝ先生を祀つる、其後ち門人同志の講學する者、祠祭する者日に多し、嘉靖四十五年、陽明文錄續編を刻して成る、翌隆慶元年正月、穆宗詔して、故大臣の恤典贈謚あるべくして未だ得ざる者を議せしむ、給事中御史皆な故原任、新建伯兵部尚書兼都察院左都御史王守仁の道德功勳宜しく殊卹に膺るべきを以て上疏す、乃ち五月之に新建侯を贈り文成と謚す、二年六月先生の嗣子正億新建伯を襲ぐ、神宗の萬曆十二年詔して先生を以て孔子の廟に從祀せらる、

結論　先生既に思田二州の賊を平定して歸途に就く、所謂功成り名遂げて身退くの時に至れるなり、此時に當て武功已に成り、文敎も亦た已に其組織を完備したれば事功上に於ては亦た遺憾あることなし、然れば臨終の言動の如きも公明正大、寂然不動、實に有道の君子たることを表せり、心性修養に志す者此心光明復何言の七字を服膺せば必ずや迷溺の憂なからん、

附錄

朱子學と陽明學

緒言

該附錄は本年八月上旬哲學館に開設せる夏期講習會に(凡十六時間)於て予が朱子學と陽明學と題して朱王二學の概要を講述したるものに係る、今や陽明先生の詳傳なる公にするに當り其の草稿を修正增補して之を卷末に附載し以て先生の學說を示し倍々精密に先生を了解せしめんと欲す且つ朱晦庵二程子及び陸象山に論及せし所を除去せざりしは先生の學說を比較研究するの便に供せんと欲するなり、

明治三十六年十一月三十日　　囘軒識

第一節　心即理

一、陸王二子の關係

抑も王陽明の學問の系統は陸象山より來れる者なれば其の同一の點多きは固より當然なれども、心即理說は特に象山より得る所多し、蓋し象山の學說の最要部とする所は則ち心即理是れなり、換言せば象山の學は心即理の基礎の上に建てられたるなり、而して王陽明の學も亦た心即理の基礎なくんば到底成立せざ

るなり、是故に吾人若し王陽明の心即理説を了解せば則ち既に陸象山の學の要旨を了解せる者と謂つべし、但し陸王二子は時代性質經歴等を異にすれば、其の説明用語は相同じからざるものなきにあらず、

一、心即理の意義

今先づ心即理なる用語の意味を詳解すべし、夫れ心即理或は之を心理合一ともいふも是れ唯だ異語同意のみなり、心即理とは則ち心は理なりとの意味なり、換言せば心即理とは心には理を備ふ、或は理は心に備はると曰ひ、或は理は心に求むべきなり或は心外無理と云ふと同一意義なり、而して理とは標準若くは法則又は至善と曰ふの意なり、是に於て心即理とは則ち心は標準と爲り得ると曰ふに同じきを知る、然れば吾人百般の行爲の標準は心に備はるが故に吾人は唯だ心を明かにして之に法則を求むべしと曰ふに歸す、然れども猶ほ詳説せば、心即理とは二と二との和は即ち四なりと云ふとは同じからず、何となれば其の所謂心は常に能く標準たるべき作用を爲すものにあらず、故に陸王二子は特に本心又は良知良能と曰ふて邪心若くは私心に區別す、心は固より一なれども、其の作用は常に正なる能はずして邪に陷り、公なる能はずして私に流るゝことなき能はず、其の公正なるは心の本體のまゝに起るものにして、邪私なるは外物の誘惑に由て起るものなり、古來使用する術語を以て之を示さば大略左の如し、

道心	人心
天理	人欲
本心	私心
正欲	邪欲
公欲	私欲
良心	放心(陷溺心)
良知	物欲
仁義之心	利欲之心
本然之性	氣質之性

尙ほ佛家に所謂眞如、佛性、無明、煩惱の語に參考せば互に發明する所あらん、抑も上段に示せる者は皆な人心中の神聖なる者高尙なる者にして下段に示せる者

は大抵劣等にして汚濁を免かれざる者なり、上段と下段とは全く相反する者なり、人間の心は非常に神聖高尚なる作用あり、其れより漸次下れる者を擧ぐるときは又た無数の種類ありて最劣等に下れば禽獣に近き程の劣欲なしとせず、吾れ自らも實に恥かしき程の心も發現せざるにあらず、故に公心私心の區別を明かにし、私心を止めて公心を起すべきなり、是故に陸王二子が心即理の眞意味は本心即ち良知は能く百行の標準たるべしとするのみ、邪心即ち私心を箇めて言ふにあらず、故に二と二との和は即ち四なりと云ふとは同じからず、更らに一言す、世人は往々心即理の意義を誤解して累を陸王二子に及ぼせるもの少からず、何となれば世人は心即理の文字に誤られて本心と私心とを混合して理なりと解し、遂には此心は即ち理なるが故に私心の欲する所に從ふて放僻邪侈淫欲に陷るも亦た不可なしと敢へたりと曲解するに至れり、是れ特に陸王二子の本旨に反するのみならず、恐るべき害毒を世に流すに至らん、獨り淺學の徒の誤解のみならず稍々大家と稱せらるゝ人も亦た此の曲解を爲して陸王二子を誣ひんとする者あり、是れ全く自ら精究せざるの過なり、

三、心即理と即物窮理（朱王二子の差）

王子は心即理と唱ふるが故に朱子の即物窮理説と相容れず、朱子は世間一切の事物は各自理を具ふるが故に經驗的に世の事物に就て其理を研究すべしとす、詳言せば吾人が日常爲す所の種々の事項は勿論一草一木も亦た皆な客觀的に理を具するものとし之を討求し之を知識の資料に供せんとす、譬へば君に對するの忠、親に對するの孝の如きも、先づ經驗的に忠孝を書籍又は師友の言に依て斯かるものは忠なり、斯かるものは孝なりと客觀的に認めて充分に忠孝の定理を細密に研究し然後に之を實行せんとす、是れ心外有理説なればなり、

王子は則ち然らず、世間一切の事物に即きて理を求むるを要せず、事物の理は悉く吾が心に具はる、吾が心を外かにして事物の理を求むるも事物の理なし、吾が心は善く吾人の事を爲すに當りて標準を示し、此の場合には斯くの如く爲して正なるが故に爲すべし、若くは不正なるが故に爲すべからずと指揮して、各々の事に正當の標準を與ふ、譬へば兄弟に對するの友愛、公衆に對するの親切、其他人間一切の言行に就て宜きを得せしめざるはなし、故に唯だ此の心を明かにする

を肝要とするのみと唱ふるなり、今朱王二子の心を說ける語に徵するに、

朱子曰く、人心の靈、知ることあらざることなし（大學章句八丁）

と莫し、而して天下の物、理あらざることなし（傳習錄上一丁）

王子曰く、心外無理、心外無事と（傳習錄上三十一丁）

朱子曰く、虛靈不昧、以て衆理を具へて而して萬事に應ずと（大學章句一丁）

王子曰く虛靈不昧、衆理具はりて而して萬事出づと（傳習錄上三十一丁）

朱子の心理二分說は後の「格物致知」の條を參照すべし、以上の如く朱子は心理二分說にして王子は心理合一說なり、故に王子は朱子の說を非とするの論甚だ多し、其要に謂へらく、朱子の卽物窮理は是れ事物の上に就て其所謂定理を求むる者なり、是れ吾心を以て理を事物の中に求め、心と理とを分て二と爲すなり、夫れ理を事物の上に求むるは譬へば孝の理を其の親に求むるが如きの謂なり、孝の理を其親に求めば則ち孝の理は其れ果して吾の心に在るか、抑も果して親の身に在るか、假りに果して親の身に在りとせば則ち親の歿する後は吾心は遂に孝の理なきか、是を以て心と理とを分て二と爲すの非なるを知るべしと（傳習錄中十一丁）

曰ひ、且つ朱子の卽物窮理說は心と理とを二にする所の告子の義外說と同じと非難せり、蓋し告子の義外說は孟子告子篇に見えたる論にして、孟子が仁義固有說の立脚地より告子を攻擊せるなり、是に於て兩々相對して左の如き關係を知るに至れり、

（孟子——義內
（告子——義外　——（王子——理內
（朱子——理外

而して孟告二子の所謂義㊀は朱王二子の所謂理㊁に當れり、尙ほ之を王子の語に徵するに、曰く、夫れ心を外にして以て物の理を求む、是れを以て惘くして達せざるの處あり、此れ告子義外の說にして孟子が之を義を知らずと謂ひし所以なり、心は一のみ、其の全體惻怛（そくたつ）を以て言へば之を仁と謂ひ、其の宜きを得るを以て言へば之を義と謂ひ、其の條理を以て言へば之を理と謂ふ、心を外にして以て義を求むべからず、然して豈に獨り心を外にして以て理を求むべけんや、心卽理たること知るべしと（傳習錄中七丁）以て義內外論は卽ち理內外論と異語同意たるを知るべし、又た之を西洋の理性論者と經驗論者の論法に比較研究せば自ら發明する所

あるべし、尙ほ此所に言ふ所の王子の理は朱子の理よりも範圍稍狹し、何となれば朱子は其の極度に至ては人間一切の行爲は勿論天地間の一草一木皆な理を有すと曰へども王子は專ら道德法則を指して理と曰ひたればなり、以て朱王二子の差を知るべし、

以上に陳述する所に依て王子の心即理の意義を知るべし、單に心即理と言へば形式的にして未だ內容には關係なしと見るべけれども、王子は亦た適切に之が內容を示せり、左の問答は則ち其の一例なり、嘗て門人が人間行爲の至善の標準を只だ吾が心のみに求めば恐くは百般の事理に於て盡くす能はざることあらんと問ひしとき、之に答へて謂へらく心即理なり、天下又た心外の事、心外の理あらやんと、門人曰く、君に事ふるの忠、親に事ふるの孝の如き、其間に數多の理の在るあり、恐くは亦た察知せざるべからずと、王子曰く、夫れ君に事ふるは此の心を離れて君の上に去りて忠の理を求むるを爲さず、亦た親の上に去りて孝の理を求むるを爲さず、總べて只だ此の心に在るのみ、心即理なれば此の心に私欲の蔽(おほひ)なくんば則ち是れ天理なり、外部(心外より)に一分を添ふるとを要せず、此の純(ナル)天理(ニ)の心を以て君に事ふるときは則ち是れ忠なり、親に事ふるときは則ち是れ孝なり、只だ此の心が去私欲存天理の狀態に在て功夫を爲さば即ち全く宜しからんと、又た問て曰く、孝親の一事の如きも其間に溫凊定省の類に數多の事項あり、知らず亦た講習すべきや否やと、王子曰く、如何ぞ之を講習せざらんや、只だ是れに主眼あり、只だ此の心が去私欲存天理なるに就ては只だ是れ此心の孝を盡さんことを專一として私欲の混入あらんことを恐れよ、此の心若し去私欲存天理ならば此れ孝親的誠心なり、譬へば冬は自然に父母の寒を思て自ら溫の道理を求む、此れ總べて誠心より發する條件なり、之を樹木に譬へば孝親的誠心は即ち是れ根本なり、數多の條件は即ち是れ枝葉なりと、以上の如く去私欲存天理即ち誠心即ち眞實無妄の心を以て心即理の內容を示されたり、而して其の所謂天理は吾人が主觀的に直覺する者にして客觀的に存するにはあらず、天理即良知なり、且又た良知と天則自然即ち宇宙の原則との關係は後の王子の宇宙說の條を參照して知るべし、且つ王子の所謂天理はカントの所謂無上命法に比較して考ふべし、尙ほ心即理の基礎の上に建てられ

たる知行合一説及び心即理説の内容の詳解と見るべき良知説を參考せば王子の眞意を了解するを得ん

第二節　知行合一の意義

一、知行合一の意義

抑も知行合一とは文字通りに言へば、知ることゝ行ふことの合一並進するの意味なり、故に王子は亦た屢〻知行並進と云ふ術語を使用したることあり、普通の場合には先づ知て後に行ふの順序と爲るも或は先行後知の場合なきにあらず、而して王子は特に中間を取て知行合一と唱へたるなり、之を並列して示せば

第一　先知後行　　知｜行

第二　知行合一　　知行

第三　先行後知（實際行つて見なくば分らずと云ふことなくば）　行｜知

の三種に分つことを得べし、第一の場合は何人も説明を要せずして知るべしと雖も、常に先知に止まりて後行に至らざるの弊あり、第二第三は勿論一考を要すれども極て實踐に緊要なり、而して王子の説は第一説と第三説とを折衷して得

べき説なり、知行合一説は尚ほ左の如く示すを得ん、

知行合一

一　知れば必ず行ふ、

二　知ることゝ行ふことは一緒に進む、

三　行はざるは未だ眞に知らざるが故なり、

四　眞に知つたならば必ず行ふ、

五　行はずんば到底眞知は得られず、

六・知は理想なり、行は實現なり、眞の理想は必ず實現す、若し實現せずんば其れは唯だ空想のみ、空想は之を理想と曰ふことを許さず、觀念と其の發現に就て言ふも亦た之に同じ、世間に空想家が多き故に王子の此論が起りしなり、

七　知は理論なり、行は實際なり、理論の眞價は實際に適すると否とに依て定まる、實際に適せざる理論は價値なし、理論は實際と遠ふものと諦めて怠ることは王子は決して之を許さず、知行合一説は空論排斥策なり、

八　知行合一は知行の關係論の眞相なり、即ち本義なり、
九　知行合一說は即ち實踐的勇氣鼓舞論なり、
十　知行合一の行は必しも動作に發するものに限らず、心上にも言ふことあり、譬へば惡念を知るは是れ知にして惡念を直に消除するは是れ行なり、念頭を正すに就ての知行合一を見るべし（七、朱王二子と知行の關係の條にあり）

以上の如く十種に細說せしも皆な王子の知行合一說の要旨を縱橫敷演せしに過ぎざるなり、尙ほ次に知行合一說の行はるゝ範圍に就て考ふるに、王子の意見は最初より人事上に限りて自然界には及ばざるなり、

凡そ政治道德等一切の人事上の知は行に實現し得ざるはなけれども、之を實現するに當て種々の困難あるが爲に斷行すること容易ならざるのみ、自然界の知は之を行に實現すること能はざる者少からず、然れば王子が專ら人事上に就て知行は合一なることを主張せしを知るべし、尙ほ一言すべきは知行合一の內容是れなり、知行合一と曰ふときは形式的に止りて何を知り何を行ふやの疑問を生せん、是故に王子は明かに心卽理と云ふ基礎を示し、爲善去惡に就て知行合一たるべしと敎へたり、若し誤て惡を知ては則ち惡を行ふと解せば直に大害を生ずるに至らん、然れども心卽理の意味を了解する者は必ず長善消惡に就ての知行合一たることを知るを得ん、且つ又た王子は心卽理知行合一と唱ふれども、學問を無用と云ふにはあらず、唯だ當時一般人間社會に必要なる敎訓は已に備はれるものとして、之に就て知行合一たるべしと主張したるのみ、若し然らずんば知行合一說は全く形式論に終らん、

二、知行合一の要旨

王子の知行合一の主意は最も善く左の語に依て知るを得べし、曰く、

知は是れ行的主意、行は是れ知的功夫、知は是れ行の始、行は是れ知の成、若し會得する時は只だ一箇の知を說くとき已に自ら行の在るあり、只だ一箇の行を說くとき已に自ら知の在るあり、（傳習錄上、八丁）

又た曰く

未だ知て而して行はざる者あらず、知て而して行はざるは只だ是れ未だ知ら

ざるなり」と（傳習錄上、八丁）

又た曰く

知の眞切篤實の處は即ち是れ行、行の明覺精察の處は即ち是れ知と（傳習錄中、五丁）

又た曰く

「知行の功夫は本と離るべからず、只だ後世學者が分て兩截と作して功を用て知行の本體を失卻するが爲めの故に合一並進の說あり」と（傳習錄中、五丁）

又た曰く

眞知は即ち行、たる所以なり、行はずんば之を知と謂ふに足らず（卷中、五丁）

又た曰く

知行は並進なり、宜しく前後を分別すべからずと（卷中、三丁）

以上の語は簡單にして而も極めて緊要なるものなり、須らく之を熟讀玩味すべし、此等の要語に由て之を考ふるに、王子は決して漠然朦朧たる知を以て知と爲すを許さず、即ち單に耳目見聞の知を以て眞知と爲さず、詳言せば多分然かるなるべし、又は恐くは斯かるものなるべしとの幻夢的知識は固より知識と曰ふの

價値なしとするなり、凡そ自己が實地に履修經驗接觸して行事に發現したる者に非ずんば以て知と云ふを允さず、蓋し知に於て行を豫想するが故に行なくんば知も亦た無しとするなり、然れば見聞の知に依て略、忠義の談話を爲し得るも之を忠を知る者と云はず、豈に亦た之を忠臣と云はんや、孝の談話を爲し得るも之を孝を知る者と云はず、豈に亦た之を孝子と云はんや、即ち空く忠孝を說く者を以て未だ眞に忠孝の何物たるかを知らざる者と爲す、上述の如く王子の知行並進論は實踐的にして純理的ならず、故に實踐界に於ては實に千古不朽の價値を有すれども純理界に於ては或は非難を免れざるべし、縱令ひ純理界に於て非難を免れざることありと雖も其は少しも王子の立言の主旨に關係することなし、若し之を純理的方面より難ずる者あらば恰も的を知らずして矢を發つが如しと謂つべし、

三、知行合一の疑問及辨解

王子が最初知行合一の說を唱へ始めし頃は門下諸子も亦た之を了解する能はずして屢々難問を發したり、然れども知行合一は不可能的なり或は不成立的な

りと曰ふには非ずして、多くは從來の習慣に拘泥するに因て一應疑問を發せしのみ、故に直に王子の說に服せり、今其の疑問の要旨を一括して左の三問答に於て示さん、

(一)門人問て曰く、

今人皆な親には當に孝を爲すべく、兄には當に悌を爲すべきを知る者あるも、却て孝悌を爲すこと能はざるは、是れ即ち知と行とは明かに兩分せらるゝなり、以て知行の二たるの證と爲すべしと、

王子答て曰く、

吾子の說は已に私欲に隔てらるゝなり、是れ知行的本體にあらず、未だ知て而かも行はざる者はあらず、知て行はざるは、只だ是れ未だ知らざるなり、聖賢が人を敎ふるは知行正に是れ其の本體に復歸せんことを欲す、中途にして廢止せしめず、故に眞の知行を示されては則ち好色を好むが如く、惡臭を惡むが如しと云へり、見好色は知に屬し、好好色は行に屬す、而して好色を見る時に已に自ら好み了る、見了て後に別に心を立て更めて好むにはあらず、惡惡臭の例も亦た之に准知すべし、今某人は孝を知り某人は悌を知ると稱するが如きに就ては必ず是れ其人已に曾つて孝を行ひ悌を行て方さに彼は孝悌を知ると稱すべし、只だ此些の孝悌の說話を爲すことを曉り得て便ち稱して孝悌を知ると爲すべからず、又た痛を知り、寒を知り、飢を知るの例に就て考ふるも、知行は分開するを得ざるなり、聖人の知行合一の旨は何等の緊切着實的功夫ぞやと、(傳習錄上八丁)王子の當時の人々が怠慢にして知あるも行なきは明かなり、是故に先生は合一並進說の眞意味を發明主唱して之が實行を奬勵せんとしたるのみ、吾人も亦た知ありて行なき者多し、漸愧に堪へず、

(二)門人問て曰く、

古人が知行を分て二と爲せるも亦た是れ人が見ることの分明ならんことを欲し、一方には知的功夫を爲し一方には行的功夫を爲して始めて順序功績あるべしと、

王子答て曰く

古人が知行を分て二と爲したるは已むを得ざるの救弊策なり、古人が知を說

く所以は世間一種の輕卒なる人が意に任かせて妄行し、全く沈思熟考するを知らざるが爲めなり、又た行を說く所以は世間一種の徒らに高遠なる學理に耽りて全く實踐躬行せざる者あるが爲めなり、即ち冥妄なる行動者を矯正するには知的功夫の詳說を以てしたるのみ、然るに今人は古人の眞意を知らず、知行を分て二と爲して謂へらく、知り了りて然後に能く行ふ、我れ今且らく講習討論して、知的功夫を爲し、眞を知り得るを待て方さに行的功夫を爲さんとすと、故に遂に終身行はず、亦た途に終身知らず、此弊害たる決して小なりとせず（傳習錄上八丁）末段說き得て極て適切なり熟讀すべし、尙ほ古來聖賢の知行に關係する語を列擧して質問したる者多し、然れども王子は悉く之を辨解して知行合一の意味を明かにせり、

(三)門人問て曰く、

功夫の次第は先後の差なきこと能はず、夫れ食を知て乃ち食ひ、湯を知りて乃ち飮み、衣を知りて乃ち服し、路を知りて乃ち行くが如し、未だ是物を見ざるとき、先つ是事あること無かるべしと、

王子答て曰く、

夫れ人は必ず食を欲するの心ありて然後に食を知る、食を欲するの心は即ち是れ意なり、即ち是れ行の始なり、食の味の美否は必ず口に入るを待て而る後に知るのみ、豈に口に入るを待たずして已に先づ食味の美否を知る者あらんや、必ず行かんと欲するの心ありて、然る後に路を知る、行かんと欲するの心は即ち是れ意なり、即ち是れ行の始なり、道路の險夷は必ず身親から履み歷るを待て而る後に知るのみ、豈に身親から履み歷るを待たずして已に先づ道路の險夷を知る者あらんや、湯を知て乃ち飮み、衣を知て乃ち服するの例も亦た以上の說明に准知すべしと、（卷中四丁）

以上の如く王子が如何なる難問に逢ふも直に之に答へて問者を服するは其の說の眞理にして百事を一貫すべき所あればなり、凡そ一學說として如何なる事物をも充分に說明し得るときは則ち是れ千古に傳ふべき價値ある者にして、此中必ず一部の眞理を含有すること疑なからん、

四、知行の眞意義

王子の知行合一說は當時の弊害即ち、論語說みの論語知らず」の如きの弊害を救はんが爲に起りたる者なれども一時的の假說とは言ふべからず何となれば知行關係論の中には本來合一並進の意味あるのみならず、知行は合一を以て精髓とし本義とするものなればなり、世間に不合一即ち先知後行の場合あるは知行を妨ぐる所の障礙物多くして容易ならざるが爲めのみ、故に王子曰く

吾れ今知行合一を說くは唯だ應病與藥の類たるにあらず、知行の本體元と是れ此くの如し、今若し立論の主意を知り得たる時は兩箇と說くも亦た妨げず、亦た只だ是れ一箇のみ、若し主意を知り得ずんば則ち一箇と說くも亦た何事をか成し得ん」と、（傳習錄上八丁）

又た曰く

「知行は元と是れ兩箇の字にして一箇の功夫を說く、此の一箇の功夫は須らく此の兩箇の字を着けて完全に說き得て弊害なかるべしと、（王陽明文錄鈔）

是故に王子の知行合一の眞意を了解し得たらんには知行を二箇として說くと雖も畢竟一箇の功夫を爲すが故に始は未だ融會せずとも終に百慮にして一致と爲るべし、要は眞意義の了解と斷行とに在て區々たる術語の辨解に非るなり、

五、王陽明の知行合一と程伊川の知行合一

今吾人は王子の知行合一の主義を愈々明白ならしめんが爲に之に類して而も少しく異なる所の知行關係論を述べんとす、抑も伊川は知行の關係に就ては左の如く考へたり、即ち凡そ人たる者は天性として善と知るときは必ず之を行ひ、惡と知るときは必ず之を避くべき者なり、且つ善惡を知ることの深淺に隨て行善避惡の深淺を生ず、善を行はず惡を避けざる者あるは未だ之を知らざればなり、故に德育の要務は先づ善惡に關する知識を與ふるに在りと考へたり、其說に曰く、

至るを知るときは則ち當に之に到るべし、終を知るときは則ち當さに遂に之を終ふべし、須らく知を以て本と爲すべし、之を知ること深きときは則ち之を行ふこと必ず至る、之を知て而して行ふ能はざる者あること無し、知て而して行ふこと能はざるは只だ是れ得ること淺ければなり、飢ゆと雖も烏喙を食は

す、人は水火を蹈ます、只だ是れ知ればなり、人が不善を爲すは只だ知らざるが爲めのみ」と(二程全書卷十、二十九丁)

時代より考ふるときは伊川は宋の人なれば伊川の知行合一說は王子の先驅を爲したるが如きも伊川立論の主意を案ずるに其は王子よりは寧ろソクラチースの知行合一說に似たるもの多し、均しく知行合一を唱ふるも王子は寧ろ實行を奬勵するの主意より立論し、伊川ソクラチースは寧ろ知識を重要とするの主意より立論せり、蓋し皆な時弊を救ふの精神に出づる者なり、既に知行合一並進と論じながら、知と行に輕重を附するは稍々矛盾するが如きも、其の時勢と主唱の精神とを精究するときは其間自ら輕重あるを知るべきなり、尙ほ伊川は知を重んずるの結果、左の如き說あり、凡そ好惡を知らず、是非を知らずんば、偶然信義忠孝の如き善行ありと雖も之を貴ぶに足らず、是れ全く無主義にして何等の操守なき者なればなり、其語に曰く、

「君子は識を以て本と爲す、行は之に次ぐ、今、人ありとせよ、力能く之を行ふも識以て之を知るに足らざるときは、則ち異端者の出づるあらば彼れ將に流宕し、

て反ることを知らざらんとす、內、好惡を知らず、外、是非を知らず、尾生の信、曾參の孝ありと雖も、吾れ貴ばずと(二程全書卷二十八、六丁)

之をソクラチースの知行合一論に徵するも亦た殆んど伊川と同一の主意を示せり、故に吾人は伊川の說は王子よりは寧ろソクラチースに近しと曰ふ、然れども王子の說を以て伊川の說に比較研究せば互に發明する所少からざるべし、

六、王陽明の知行合一とソクラチースの知行合一

一

抑もソクラチースの當時は眞理知るべからず、道德の標準は定むべからずとの妄說起りたれば、蘇子は之を駁して眞理標準は知るべからざるに非ずとの卓見を立てゝ道德の基礎を置き、主として知行合一說を唱へたり、抑も蘇子は知識を以て道德の根本と爲し、虛僞の知識を去りて眞正の知識を生せしむるを以て第一とす、凡そ知識ある者は其德行あり、德行あれば此に幸福あるべし、世に名譽幸福を棄てゝ惡事を犯す者は無知なるが故なり、或は無意識的に善事を爲すも未だ以て德行と爲すに足らざるなり、是の故に知識と德行と幸福は全く合一なり、

然れば今日の最大急務は人智を開發するに在りと云ふ、蘇子の主意は伊川と似たる所多きを見る、蓋し又た時勢の要求然らしめしものならん、蘇子の說は之を知德福合一說若くは知德福因果關係說とも云ふべく、王子の說は知行合一並進說と謂ふべし、而して王子の說は合一並進を理想とするが故に之を標準的と謂つべく、蘇子の說は知を主眼として德福は之に從て生じ來るものと說示するが故に說明的と謂つべし、且つ蘇子は直に幸福を明言し王子は幸福を明言せざれども王子が心卽理の基礎の上に儒敎的樂天主義より立論したるを以て察せば人道を完うせば安寧幸福を得べきは勿論なりとせしを知るべし、但ゝ王子は之を含蓄して發せざりしのみ、尙ほ用字に就て注意せんに、現今は知は動詞に用ひ智は名詞に用ふれども、此所には然る區別なく知も智と共に名詞に用ふ、而して王子の所謂知は程伊川の知識論に所謂德性の知にして見聞の知にあらず、蘇子の知も亦た同じけれども、蘇子を以て王子に比較せば知の內容稍ゝ廣きを見るなり、

七、朱王二子と知行の關係

王子の知行合一說は旣に述べしが如く一念發動の瞬間に於て爲善去惡の功夫を斷行するなり、是れ卽ち念頭を正すの意なり、若し惡念旣に起るも之を退治せず、再び之を身に行ふときは則ち是れ過を復びする者にして知行合一の主意に背けり、單に之を念頭を正すに就て言ふのみならず、心に知ると身に行ふとに就て言ふも亦た知行合一の成立を見るべし、而して王子は心卽理說を取れるが故に本心卽ち良知の指揮に從ふて知行するのみ、王子の方法順序は簡單にして可なれども動もすれば讀書講學を忽にして枯禪に陷り易き傾向を有す、之に反して朱子は行を重んぜざるに非ざれども、百般の事物を經驗的に豫じめ討究して之を實地に施さんとし、讀書講學に重きを置きたれば自然に先知後行の說と爲り、自身も終生力を訓詁註釋に注ぎ、居敬窮理を主張せり、是故に其の影響の及ぶ所末徒に至ては動もすれば讀書窮理に溺れ、集中力を失ふて支離滅裂に傾くを免れず、朱王二子は固より一代の大家にして善く弊害なきを得たりと雖も大體の方針自ら異なれば其の餘勢の及ぶ所遂に顯然發露せざる能はず、是れ從來朱王兩學派の徒が妄に疾視反目するに至れる所以なり、弊害も亦た甚しと謂つべ

し、現今我邦の學界に在りても亦た稍〻直覺的なる者と經驗的なる者との二種あるが如し、而して二者の利害は唯だ應用者の力量如何に係りて存し、輕しく決定すべきものにあらず。

更に案ずるに王子の知行合一說は實踐道德に緊要なるが故に彼の世故に長じ多く實務に當れる人士は直ちに眞意を會得するなるべし、若し夫の理論は實際と異なりと曰ふの語が愈〻多く怠慢の口實として世人に唱へらるゝならば愈〻倍〻知行合一說主張の必要を感ずるなるべし、且つ倫理學者は萬卷の倫理書を精讀するも之を直に道德家と曰ふを得ざるを知らば知行合一說は愈々緊要なることを知るべし、之に反して如何なる場合にも倫理學者即道德家、理論即實際たることを得るに至らば知行合一說は全く無用の長物として之を棄つるも可ならん、然れども現今の進度に於ける社會にては容易に然ることを能はざるべし。

王子は道德實踐家にして倫理學者に非ず、故に倫理學と倫理の區別の如きは夢想だも及ばざりし所ならん、然れども是れ只だ時代進化の然らしむる所にして

古來何人も免かるゝこと能はざる所なり、現今分業發達の結果、倫理學を專業とする者少からず、而して或は自ら倫理學者必ずしも道德家に非ずと主張して現行道德水平線以下に墮落するも猶は平然意とせざる者あり、知行合一說は固より倫理專攻學者のみを責むるが爲めの論に非ざれども知的探求に溺れて一個人たるの德行さへも行ひ得ざる者は遂に王子の罪人たるを免れず、之を要するに知行合一說は勇往直進的、活潑々地的、惟精惟一的、進取果斷的なり、故に躑躅怠慢を非とし、優柔不斷を排す、唯だ心即理即ち良知指揮の下に躬行實踐すべきのみ、

第三節　良知

一、良知發見

王陽明年譜に徵するに、良知の發見は先生年三十七歲龍場に貶謫せられし時に在り、而して致良知を盛に唱へ出せしは五十歲頃よりなり、然れども其の以前に在りても既に暗々裏に良知の本體を認識して、之れを示すに天理てふ語を用ひたること少からず、然れば致良知は早くより隱微の間に唱へ來りしが、龍場謫居を機として愈〻廓然大悟するに至れるなり、故に先生も屢〻煩悶患難を以て良

知發見の機會と明言せり、即ち曰く「吾れ龍場より以後は則ち良知の意を出てず」と、又た「今幸に良知を發見す眞に是れ痛快、手の舞足の蹈を覺えず」と曰ひ、又た「近來良知の二字を發見して日々益々眞切簡易なり、朝夕朋輩と講習するに、只だ此良知を發揮するの外に出でず」と曰ひ、又た「誠に天の靈に賴りて偶ゝ良知の學に見るあり」（卷之中 十三丁 八）と曰ひ、又た「聖人已に良知を指して人に示す、只だ後人揜匿するが爲に我れ發明せしのみ」と（卷之下 九丁）曰て良知發見當時の光景を示せり、案するに先生が良知を發見せしは固より一朝一夕の功にあらず、但だ發見の瞬間は即ち良知に大悟徹底したるの曉たりしのみ、凡そ古來教祖偉人が各其道を大悟せしと曰ふは偶然の出來事ならずして多くは長歲月の間、千辛萬苦して漸次進み來り、或機會に遭遇して恍然大悟の境に到達せるのみ、孔子が三十にして立ちしと曰ひ、釋迦が三十にして大覺せしと曰ふ、皆な其の以前多年修養の結果なり、先生の良知發見は龍場の患難辛苦を機會とすと雖も其の以前非常の熱心を以て此の方向に猛進せし結果に外ならず、蓋し大悟は發砲に於ける點火の如きものならん、

二、良知の體用

先生が良知を說くは頗る精密周到にして良知の本體を說くにも種々の語を以てせり、而して先生が初年より使用せる天理てふ語は屢々良知の說明に用ひられたり、且つ先生以前の諸家が心の本體を形容するに用ひたる語を引用することも亦た多し、左に良知の本體を示せる語を示さん、

「心之本體は即ち天理なり、天理之昭明靈覺は所謂良知なり」と（與顧東橋書）

又た曰く、

「良知は是れ天理之昭明靈覺之處なり、故に良知即ち天理なり」と、（答歐陽崇一書）

又た曰く

「良知即ち是れ未發之中即ち是れ廓然太公、寂然不動之本體なり」と、（傳習錄 中 四十八丁）

以上の如く心之本體即良知と爲せり、故に又た心之體は即ち良知之體にして心之用は即ち良知之用なりと斷言せり、然れば心と良知とは如何に異なりや、曰く凡そ心の發現に二種の狀態あり、一は天理に從ふもの、一は私欲に從ふもの、而して天理に從ふものは則ち是れ良知にして常に正善なれども、人欲は則ち邪惡な

きこと能はず、斯かれば良知は自ら心と等しく知情意の三作用に分ち得べし、西洋の倫理學者は或は良心を以て知力と爲し、或は感情と爲し、或は意志と爲せども、先生の說は該三者を兼ねたり、

換言せば先生が說く所の良知が知情意の三作用を含むことは良知は心と體用を同くすと曰へる語に由て明かなり、以下に心的三作用と良知を討究せん今先づ良知と意的分子の差を其語に徵するに曰く、

「心之虛靈明覺は即ち所謂本然之良知なり、其の虛靈明覺の良知が感に應じて動く者之を意と謂ふ、」(傳習錄卷中、四十七丁)と、

是れを以て良知に意的分子あることを見るべし、又た左の語は最も明瞭に意的分子あることを示せり、曰く、

「嘗て心に試るに喜怒憂懼の感發するとき、氣を動かすの極と雖も、而かも吾が心の良知一たび覺らば即ち惘然として消沮す、或は初に過め或は中に制し或は後に悔ゆ」と、(卷中、五十二丁)

又た曰く

人若し良知の訣竅(秘奧)を知らば多少の邪思枉念に隨て一覺せば都て自ら消融す、眞箇に是れ靈丹一粒なり、鐵を點じて金と成す」と、(卷下、七丁)

以上は良知の意的分子にして惡を制止して善を爲さしむるを示せるなり、

又た良知に情的分子ありて事物の美醜に感動することは次の語に由て知るべし、曰く、

「良知は只だ是れ一箇の天理、自然明覺發見の處、只だ是れ一箇の眞誠惻怛、便ち是れ彼の本體なり」と、(卷中、九十二丁)

「人、尋常の好惡に於て或は亦た眞切ならざる處あり、惟だ是れ好色を好み惡臭を惡むは則ち皆な是れ眞心より發し自ら快足(愉快滿足)を求めて曾て纖假(少許假僞)なし」と、(王學提綱卷上、二十丁)

又た曰く、

小人の不善を爲す既に至らざる所なしと雖も然かも其の君子を見るときは則ち必ず厭然(慚愧消沮)として其の不善を掩て其の善を著はす、(大學問)と、

又た曰く、

「所惡於上毋以使下即ち是れ致知なり」と、(卷之下、五丁)是れ則ち大學に絜矩(忠恕)の道を說ける語に就て好惡即ち情的分子を示せるなり。

又た曰く、

「孺子が井に入るを見るときは必ず惻隱之理あり」と(傳習錄卷中、十一丁)

又た曰く、

良知の發するが若きは更に私意の障礙なし即ち所謂其の惻隱の心を充てゝ「仁勝げて用ふべからず」と云へるものなり、然るに常人に在りては私意の障礙なきこと能はず、所以に須らく致知格物の功を用て私に勝ち理に復へるべし」(傳習錄卷上、十三丁)と、

此等惻隱と曰ひ、惻怛と曰ひ、好惡と曰ひ、良知の悔恨と曰ひ、又は良知の慚愧と曰ふは則ち皆な良知の情的分子の發表なること明かなり、

良知に知的分子ありて或は判斷或は批評を爲すことは先生が常に良知即是非の心と曰へるに由て已に見るべく、又た左の語あり、

「良知は常覺常照なりと、(卷中、十一丁)

又た曰く、

「知善知惡是良知」(四句敎)

又た曰く、

「良知之體は洞然明白なり、自然に是を是とし、非を非とし、纖毫も遁るゝこと莫しと、(卷之下、九十丁)

又た曰く、

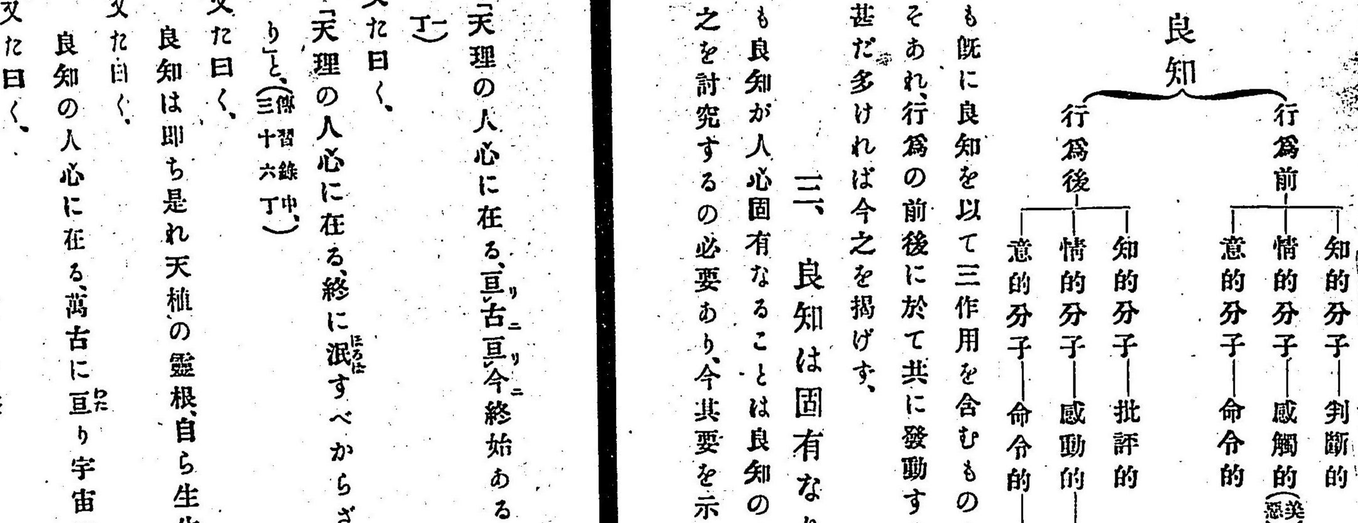
「凡そ所謂善惡之機、眞妄之辨は吾心の良知を含てゝ亦た將に何れの所に其の體察を致さんとするか」と、(卷中、十四丁)

尙ほ知的分子が良知に顯著なることは先生の遺書中最も知り易し、上來の所說よりして良知の定義を下さば大要左の如し、

「良知の體は即ち心の昭明靈覺なる者これなり、」

「良知の用は即ち昭明靈覺なる心、即ち知情意の作用が或行爲に對して發現するを云ふ、」

今此良知の各分子と行爲との關係を考ふるに左の如くなるべし、



抑も既に良知を以て三作用を含むものとせば其の働きに多少強弱顯微の差異こそあれ、行爲の前後に於て共に發動すること勿論なり、且つ其例證の如きは世に甚だ多ければ今之を掲げず、

三、良知は固有なり

抑も良知が人心固有なることは良知の本體の説に依て略〻之を知るべきも猶ほ之を討究するの必要あり、今其要を示さん

「天理の人心に在る、亘古亘今終始あることなし、天理即ち是れ良知なり」と、(傳習錄中、四十下)

又た曰く、

「天理の人心に在る、終に泯すべからざる所あり、而して良知之明は萬古一日なり」と、(傳習錄中、三十六丁)

又た曰く、

良知は即ち是れ天植の靈根、自ら生生して息まず」と、(卷下二十四丁)

又た曰く、

良知の人心に在る、萬古に亘り宇宙に塞りて而して不同なし」と、(卷中七十一丁)

又た曰く、

良知の人心に在る、聖愚を問つることなし、天下古今之所同なり」(卷中八十二丁)と、

又た門人が良知は起處ありやと問ひしに答へて、「良知の本體は渾然一體にして前後內外なし、本來固有なれば起處なし、若し起處ありと謂はゞ時ありて在らざることあらん、設令ひ良知の作用は時に妄念發動の爲に蔽はるゝことあるも、決

して本體を失ふことなし」と曰へり、且つ先生は一層適切に之を知らしめんが爲に人の胸中に各〻聖人ありと曰へり、聖人は即ち良知の體用を全うするの人を稱する者なれば實は良知の意味に外ならず、良知の人心に在るは何人と雖も之を知らざるはなし、彼の盜賊は惡人と雖も、自ら其の盜を爲すべからざるを知る、若し彼が盜を爲せりと呼ばゝ、彼必ず大に慚ぢん、是れ良知は遂に消滅せざるが故なり、黑雲日を蔽ふと雖も、日は猶ほ光明あり、良知の光明も亦た然かりと云ふ、是れ即ち絕對的に完全なる良知の固有を說示せるなり、案ずるに良知即ち良心が先天的なりや將た後天的なりやは方今倫理學上の大問題にして經驗派は大抵之を後天的と唱へ、直覺派は大抵之を先天的と唱ふ、然れば二種の良心說は容易に決定すべからず、先生は元來直覺派に屬する人にして決して後天的立論を承認せず、然れば或は先生を以て獨斷的なりとして之を難ずれども、斯かゝる立論法は古今の敎學に於て屢〻用ひらるゝ所なり、孟子が性善と說き仁義固有を證せんとして良知能良を說き創めたるも全く之と同一法なり、佛敎に一切衆生悉有佛性と說ける所亦た參考すべし、今假に一步讓りて良心は後天的とするも、原始蒙昧の時代より良心は漸次發達し、今日は社會成立以來既に幾千歲を經たり、此間に在て漸次發達し來れる良心は即ち今日の人類の良心ならずや、然れば此說明法を以て先生を難じて之を固有と見るも亦た不可なかるべし、況んや先生は專ら實踐的にして理論的ならず、道學的（實踐躬行）にして學究的分析討究ならざるが故に先生當時の社會の進度に在りては之を固有と說くも亦た可ならん、加之先生は良知の明は萬古一日と說けり、是れ抑も何の意ぞ、元來人智は大抵百歲に滿たざるに人心固有の良知を謂て萬古一日の如しと曰ふは單に一人固有と曰ふのみにては說き盡くさゞるべし、是れ即ち各個人の良知は即ち社會的良知にして、萬古の社會に普遍にして何人も否認するを得ざるの意なるべし、古來の倫理書或は賢哲の敎訓は皆な吾人良心の說明なり、天理の發現なり、良知の發達史なり、故に此社會に生存して社會てふ學校に於て種々なる方法に依て敎育を受くるときは自然に發達を爲すこと疑なし、道德の標準は固より變遷なしと言ふべからざれども、復た幾千年間の倫理書に徵するも一定不變の大德義あり、是れ豈に良知の明は萬古一日なる證據にあらずや、月は百川に落て處々皆

な圓なり、天理即良心の人心に在る、復た猶ほ此の如し、先生が萬人同性にして賢愚も同一の價値を有すと說けるは全く此良知固有の點より觀察したるの言なり、

四、良知は普遍なり

前段既に良知固有を說きたれば猶ほ一層明白ならしめんが爲に其の萬人に普遍なることを說かんとす、抑も良知は固有にして普遍的なるものなり、先生謂へらく、良知は上聖人より下愚人に至るまで之を有せざるはなし、聖人は能く其の良知を致し、愚人は致すこと能はざるのみと、又た曰く良知は即ち所謂是非の心人皆な之を有す、學を待たずして有り、慮を待たずして得る者なり、人孰か是の良知なからん、獨り之を致す能はざるのみ、良知は聖人より愚人に至り、一人の心より四海の遠きに達し、千古の前人より萬代の後人に至るまで同からざるなしと、上述の如く良知は萬人に普遍なれば文明人も野蠻人も皆な良知を有せざるはなし、精神的に特に道德的に文野を區別せば唯だ良知の發達の程度に從ふと謂つべきのみ、尙ほ或は良知は普遍ならずとの非難あれども、其の辨明は固有論の條及び標準論の條に就きて參照すべし、

五、良知は百行の標準なり

先生曰く、

「良知の節目時變に於ける、猶ほ規矩尺度の方圓長短に於けるが如し」と、(卷中十一丁)

又た曰く、

「良知を看得て透徹せば、他の千言萬語に隨て是非誠僞前に到て便ち明かなり、合し得るものは便ち是なり、合し得ざるものは便ち非なり」と、(卷下七丁)

又た曰く、

良知の人に在る、儞が如何にするに隨ふも泯滅すること能はず、盜賊と雖も亦た自ら盜を爲すべからざるを知る、他を喚びて賊と爲さば他も亦た忸怩たらんと(卷下七丁)

又た曰く、

良知眞に是れ試金石なり、指南針なり」、(卷下七丁)

又た曰く、

爾の一點の良知は是れ爾の自家底の準則なり、爾の意志の着く處には良知是は便ち是を知り、非は便ち非を知る、更に良知を喘着すること些も得ず、爾は只だ他を欺くを要せず、實々落々に他に依着して善をは便ち存し、惡をは便ち去る、を做せ、他は這裏何等の穩當快樂ぞや」と、(卷下六丁)

是れ則ち良知の判斷命令に從ふて行動せば行動後には自身に快樂を感ずることあるを曰へるなり、若し良知の命令に反して行動せば苦痛を感ずることは之を以て推測すべし、今は唯だ含で發せざりしのみ、

又た曰く、

「道は即ち是れ良知なり、良知は原と是れ完々全々、是なるものは還た他れ是と、非なるものは還た他れ非とす、是非は只だ他に依着して是ならざる處あることなし、這の良知は還た是れ個的の明師なり」と、(卷下十一丁三)

吾人は良知に從ひ良知を依信して行動せば不善あることなし、良知は吾人を教導して善に向て發達せしむる所の明師の如し、

又た曰く、

「良知は只だ是れ箇の是非之心是非は只だ是れ箇の好惡、只た好惡就ち是非を盡くす、是非は就ち萬事萬變を盡くす」と、(卷下十三丁四)

又た曰く、

「是非の兩字は是れ箇の大規矩、巧處は則ち其の人に存す」と、(卷下十三丁四)

抑も良知が能く百般行爲の標準と爲り得るや否やは今日の學者間には疑問なきにあらざれども、先生は直覺的に何等の疑念なく斷然行爲の標準たるに足れりと云ふ、惟ふに實踐的なる陽明學に在ては此說にて既に充分なるべし、何となれば現今の程度に發達せる社會に在ては多數の敎訓あるが故に、吾人が愈々實行するに當て善惡の判斷に苦むとは萬に一もあらざるべし、換言せば社會的良知が現今必要なる程度にまで發現したればなり、若し假りに吾人が良知を以て行爲の標準としては不完全なりとして更に外に標準たるべきものを求むるも亦た滿足なる結果を得ざるべし、純理的倫理學者は萬に一なる不安も職務上之を不問に措く可らざるも、實踐道德に在ては先生の說を以て既に充分なりとし、良知に對して無上の尊敬と信賴とを爲すべきのみ、唯だ吾人が今日愛ふべきは

善惡判斷の不明に非ずして、善と知りて之を行ふ能はず、惡と知りて之を避くる能はざるに在り、約言せば實踐的勇氣の欠乏に在り、孔子が智仁勇を以て三大達德と爲せる眞に趣味あるかな、今人の患は智的欠乏に非ずして勇的欠乏にあり、

六、致良知の程度

吾人の固有の良知は行爲の標準たるに足るべしと雖も、一般人が總て同一程度に發現せる良知を具ふと曰ふにあらず、然れば其本體ありと雖も之を發現せしめずんば其作用を全うする能はず、故に先生は致良知の三字を掲げて教義の要部と爲せり、而して其の之を發現せしむるには人に依て難易の差なきにあらず、故に先生は之を三等に區別して之を示せり、

一、聖人—自然のまゝにして勞せずして良知を發現せしむ、—學知利行(學知者)(中の上)

二、賢人—勉强して良知を發現せしむ、……困知勉行(困知者)(中の下)

三、凡人—困學して良知を發現せしむ、……困知勉行(困知者)(中の下)

四、愚人—自ら蔽昧して良知を發現せしむるを肯んぜざる者、……(困不學者)下)

又た譬喩的に之を示して曰く、

一、聖人の良知は青天白日の如し、

二、賢人の良知は白雲聚散せる日の如し、

三、凡人の良知は雨天の日の如し、

四、愚人の良知は暗夜の如し、

縱令ひ暗夜と雖も猶ほ薄明かりに黒白を見得るは則ち是れ日の餘光の未だ盡きざる所なり、愚惡の極と雖も、猶ほ惡を爲すの非なることを知るは良知の消滅せざるが故なり、先生の致良知の說は暗夜を轉じて雨天と爲し、雨天を轉じて雲日と爲し、雲日を轉じて遂に白日と爲さんとするが如し、致良知とは即ち「發揮良心之光明」是れのみ、

然れども先生は他方に於て聖人も亦た是れ學知なり、衆人も亦た是れ生知なりと說けり、門人之を疑ひ、問て曰く、其意何如と、先生曰く良知は人々皆な之を有す、聖人は只た是れを保全して些の障蔽なし、戒愼勉强、自然に息まず便ち亦た是れ學なり、只た是れ生的分數多し所以に之を生知安行と謂ふ、衆人は孩提の童より

此の知を完具せざるはなし、只だ是れ障蔽多し然れども本體の知は自ら泯息し難し、學問克治と雖も只だ良知に悉る、只だ是れ學的分數多し、所以に之を學知利行と謂ふ」と(卷七丁下)

此語に徴して以上に言へる生知安行てふ語は唯だ比較上學問的分子の少きを意味するを知るべし、語を以て意を害する勿れとは蓋し此等を曰ふならん、學問克治するには良知に依り、而して良知を致すには又た學問克治を以てす、然り而して此間相互漸次進歩あるを見るべし、因て惟ふミユアヘッド及びグリーンの自我實現と致良知とは如何に異なりや、佛教の自證眞如と致良知とは如何に相似たりや參考すべし

七、致良知の功夫

上述の如き良知を致すには如何なる功夫を爲すべきか、是れ最も緊要なる問題にして、進修涵養の方法を簡單にするは先生教學の本旨なり、先生の致良知の功夫を案するに、大略左の如し、

致良知之功夫(靜的功夫—靜坐澄心(讀書調息等)

(動的功夫—事上練磨(活動實驗)

之を其語に徴するに曰く、

「良知は明白に個(なんぢ)の靜處に去るに隨て體悟するも亦た好し、個の事上に去るに隨て磨鍊するも亦た好し、良知の本體は原と是れ動も無く靜も無きもの、此れ便ち是れ學問の頭腦」と、(卷中三十一丁)

先生は或時は門人をして靜坐澄心的功夫を爲さしめたれども、是れ必ずしも唯一の方法にあらず、唯だ臨時矯正的に之を用ひしのみ、然れども靜處に於ても亦た致良知の功夫は必要なり、夫の小人間居爲不善(シテスヲ)は致良知の未熟なるに由る且つ讀書は閑暇なる時に爲すべき功夫なり、故に先生は讀書即致良知と曰ひ、又た戒愼恐懼は是れ致良知的功夫とも曰へり、抑も致良知の功夫は事物繁劇(はんげき)の間に在りて之を爲すこと更らに緊要にして、吾人の一擧一動、一應一接は皆な致良知の好機會に非るはなく、特に聲色貨利等惑溺し易き場合に在りては良知の精明を要すること最も大なり、若し此難處に遭遇して猶ほ陷溺(かんでき)することなくんば、最早や致良知の功夫は醇熟せりと謂つべし、上述の如きは則ち動的功夫事上練磨

にして先生が常に進修涵養の最要訣と爲し、所なり、盤根錯節に當らずんば以て刀の利鈍を知るに足らず、良知の力も亦た難關に當るにあらずんば之を檢するに由なし、然れども致良知の功夫は各自發現の程度に從ふべし、今日良知發現の程度此の如くんば只だ今日知る所に隨て擴充すべく、明日良知又た發現するあらば則ち明日知る處に從て擴充すべし、而して又た致良知に就て部分的なるものは全體に及び難からんとの疑を起す者あり、門人問て曰く、

「先生の格物致知の說は時に隨て物を格し、以て其の知を致すときは、則ち知は是れ一節の知、全體の知に非ず、何を以てか全體を致さん、先生曰く一節の知は即ち全體の知、全體の知は即ち一節の知、總て是れ一箇の本體なりと。(卷下 十三丁)

然れば吾人は一事に當りて一事を正し、二事に當て二事を正して、漸次進步せば萬事正しからざることなきに至らん、吾人今日の社會には既に前賢の嘉言善行の鑑戒と爲すに足るものあり、又た師長知友の訓誡忠告あり、讀書講學の方法あれば、善く之を用ふるときは決して乏しきことなからん、之を要するに致良知の功夫は他なし、唯だ心即理の眞意を知り、良知の指揮に從ひ、爲善去惡に當て知行合一なるべきのみ、斯かれば吾人の修養は良知に依て良知の發達を致すものにして方法是より簡易直切なるはなし、加之、先生の眼より見れば吾人の知るべきものは良知なり、爲すべきことは致良知なり、求むべきものは致知の功夫なり、學問の要は唯だ致良知に在るのみなるべし、故に先生曰く、功夫は愈々簡易にして愈々眞切、愈々眞切にして愈々簡易なるを要するのみと、蓋し致良知の訓なり、

第四節　心即理知行合一致良知の關係

先生は初年には主として心即理を唱へ、三十七歲始めて格物致知を悟り、三十八歲始て知行合一を論じ、五十歲始て致良知の敎を揭げたり(年譜)隨て先生の遺書に就きて見るも、時代に由て其の論說する所の繁簡同じからず、然れども是れ只だ其の盛に唱へし時所の異なるのみ、世人往々先生の眞意を究めず、直ちに以て先生は其の說を變ずること三回に及べりと斷言し、其の間に於て何等の關係をも認めず、甲を捨てゝ乙を取り、復た乙を捨てゝ丙を取りしものゝ如く誤解するものあり、甚だしきは重ねて此の誤解を妄用して先生を誹譏せんとするものあり、實に痛歎すべきなり、或は稍々三者の關係あることを知りしが如き者あるも未

だ之を熟知せず、說かんと欲して說き盡さず、隔靴搔痒の憾を免かれざるものあり。余輩の見を以てすれば該三者は恰も鼎足の如き關係を有し、若し三者其の一を缺がば先生の學說は到底成立せざるなり、而して先生が或時代には盛に心即理の三字を標榜して學徒を導き、或時代には致良知の三字を提げて天下に呼號せしは是れ當さに然るべき順序ありて、時機に應じつゝ遂に王學體系完備に至れるなり、而して龍場に於て格物致知を大悟せる瞬間は即ち先生の學說の確立せし時期なり、其の後の論說は之を敷衍して精密ならしめしのみ、惟ふに先生が致知格物を悟りしは明かに致良知と心即理と知行合一を悟りし時なり、何となれば先生の致知格物の解釋は此の三者を待たずんば決して爲し能はざればなり、

致良知より言ふときは、良知に致るには格物せざるべからず、格物を爲すには事上に就きて之を爲すべきも心即理たらざるべからず、心即理たるも知行合一ならずんば功を成さず、故に致良知には必ず心即理と知行合一を欠くべからざるなり、

心即理より言ふときは、吾人の行爲に際して善惡を判斷して正當なる標準を示すは則ち良知なり、良知が標準を示し善惡を知らしめんには致良知せざるべからず、且つや心即理なるも、之を直ちに行はずんば其功を成就するなし、故に心即理には致良知と知行合一を欠くべからざるなり、

知行合一より言ふときは、此こに知るとは良知が善惡を知るの意なり、只だ一般の見聞の知識を意味するにはあらず、行とは善と知れば直に之を爲し、惡と知れば直ちに之を去るを云ふなり、斯かる知行合一には固より心即理ならざるべからず、心即理なるには致良知を爲さいるべからず、故に曰く以上の三者は其の一を欠かば陽明學を完成すべからずと、

上述の如く三者は孰れも相待ち相助くる者なれば容易に輕重し難し、致良知は全く心即理知行合一を成すには勿論良知に依らざるべからず、此こに於てか必ず疑を生せん、何となれば致良知を成すには格物を以てし格物を成すには良知に依ると云へば端なく循環して孰れを最初と定め難きのみならず、致良知を成さいる間は他の二者は成し遂げ得べからざるものなり、然るに却て他二者を以て致良知の良法と爲せるは何ぞやと、是れ實に

免るべからざる疑問なり、然れども先生は先天良知說なるが故に良知は本來昭明靈覺なるものなり、若し外物の誘惑蔽遮なくんば常に能く善惡を判定し得べきものと爲す、而して致良知と云ふは外物の誘惑蔽遮を去る上に就きて言へるものにして、元來何等の靈能なき良知に格物に依りて之を附與すると云ふにはあらず、且つ既に稍々外物の誘惑蔽遮を蒙むれる良知と雖も尙ほ幾分の作用を爲さゞるなし、是こに於て紛亂せるが如き中にも自ら一道の光明を認め、之れに由て善惡を判定しつゝ心即理知行合一を遂ぐること難からず、紛亂せるが如き道德界に於て此の耿々たる一道の光明を認て善惡を判定しつゝあることは、現在の社會に就て之を見るべし、若し先生が後天的良知說を立つる者ならば此の疑問は容易に答ふるを得ざるべきも、直覺的なる先生の學說に於ては固より難關と稱するに足らず、此の如く良知が一道の光明を放ちつゝ心即理知行合一を成し遂げ得る時は、心即理知行合一を成しつゝ漸次致良知を成し遂げて能く良知を發達せしめ得ん、朱子の說に就きて該三者に類する者を見るも、朱子は心外有理即ち天下の物は理あらざるなしと說くが故に、之に相應して先知後行の說あり、且つ之に應じて初めに人心の靈は知あらざることなしと說き、終に一旦豁然貫通と說けり、若し此の如く說かずんば其の學說は完備せざるなり、先生が該三者を說くの眞意も亦推して知るべきなり、

第五節　四句教（二種）

王子は平生門人を敎導するに致知格物の說を以てしたるのみならず、又た心の本體及び意思の發動に就て說くこと多く、尙ほ人をして知り易からしめんが爲に之を四句に約せり、是れ則ち所謂四言敎なり、四言敎又は之を四句敎或は四句訣とも曰ふ、蓋し四言敎は元來簡單なる陽明學の要訣を更に簡單に槪括して暗記に便にしたるならん、故に陽明學に在りては頗る緊要なるものと爲れり、何をか四言敎と曰ふや、曰く、

無善無惡心之體　有善有惡意之動
知善知惡是良知　爲善去惡是格物

之を便宜上、漸進的四言敎と曰ふ、今其の意義を細釋せん

心の本體は則ち昭明靈覺なり、寂然不動なり、廓然太公なり、未發之中なり、何を以てか善惡の比較對稱すべきものあらんや、即ち所謂粹然として至善なるもの、之を亦た超絶的善の狀態と謂つべし、故に之を無善無惡と曰ふ、

有善有惡意之動

意は本體を以て發動することあり、過不及を以て發動することあり、本體を以て發動する者を善と爲し、過不及を以て發動する者を惡と爲す、故に意に就ては有善有惡と曰ふ、

亦た王子が以上二句の關係を明示する語あり、曰く、至善なる者は心の本體なり、心の本體何ぞ不善あらん、如し今、心を正さんと欲する時、本體上何れの處にか功を用ひ得ん、必ず心の發動の處に就て纔かに力を着くべし、心の發動は不善なきこと能はず、故に須らく此處に就て力を着くべし、便ち是れ意を誠にするに在り」と、（傳習錄下、六十四丁）

抑も四言教の第一句は古來孟子の善一元的倫理說即ち性善說と相容れずとの非難あれども此說を參考せば非難は直ちに消滅せん、

知善知惡是良知、

熟れか本體の善を爲し、熟れか過不及の惡を爲すや、吾心の靈、自ら之を知る、即ち所謂昭明靈覺なるが故なり、昭明靈覺なるもの、即ち是れ良知なり、

爲善去惡是格物、

凡そ行爲に就きて善と知らば則ち之を爲し、惡と知らば則ち之を去る、即ち亦た良知の指揮の下に知行合一的功夫を爲すなり、

王子門下の諸子は以上の四言教の主意に從ひ修養して學德を進むること多かりしならん、然れども或は之を以て王子の教旨の至極と考ふる者あり、或は此四言教は未だ其の極意にあらずして更らに高尚なる者あるべしと考へたる者あり、凡そ同一教義を聞くも聽者の性質經驗學力等に不同あれば、了解する所も亦た高低の差なきこと能はず、果して王子の高弟中に錢緒山（德洪、名）王龍溪（畿、字）の二人ありて王子の教旨を了解すること各〻同じからず、緒山謂へらく、此四言教は是れ我師の人を教ふるの定說にして少しも變更すべからざるものなりと、龍溪謂へらく、陽明先生の教を立つるや、人の性質學力に應ず、所謂應病與藥なり、此くの

如きを權法と云ふ、未だ一概に固守す可らずと、蓋し龍溪は上揭の漸進的四言教を以て一手段即ち方便說と考へたらん、其意を按するに、若し既に心の體を無善無惡と悟り得ば即ち意知物の三者は皆な無善無惡と悟り得べし、何となれば若し心の本體を無善無惡と曰ひながら、意知物の三者を有善有惡とするは却て前後衝突する所あればなり、是に於て龍溪は此主意を復た四句を以て示して曰く、

心是無善無惡之心　意是無善無惡之意

知是無善無惡之知　物是無善無惡之物

此の龍溪の說を名けて四無的四言教と曰ひ或は單に四無說と曰ふ、前の漸進的四言教に對せば之を頓悟的四言教と曰ふべし、蓋し心意知物の四者を通じて無善無惡と達觀すればなり、

尙ほ龍溪の四無說の意義を細釋せんに、

抑も體用顯微は只だ是れ一機にして心意知物は只だ是れ一事なり、

體と用と自ら異なれども體を離れて用なく用を離れて體を表はすを得ず故に機の通ずるより云へば一にして體が善にして用が惡なることなし、

顯も微も亦た然り顯なくんば微なく微なくんば顯あることなし故に顯微は只だ一機のみなり、

心も意も知も物も異なる點より云へば其の名の如く異なれども只だ是れ一事なれば意が有善有惡にして心知物の三者が是に異なりて無善無惡なることとあるべからず心意知物の四者は共に無善無惡か有善有惡なるべし、

王子嘗て身心意知物は只だ是れ一件なることを示して曰く耳目口鼻四肢は身なり心に非ずんば安んぞ能く視聽言動せん心は視聽言動せんと欲するも耳目口鼻四肢なくんば亦た能はず故に心なくんば則ち身なし身なくんば則ち心なし其の充塞する處を指してこれを言へば之を身と謂ひ其の主宰の處を指して之を言へば之を心と謂ひ心の發動する處を指して之を意と謂ひ意の靈明なる處を指して之を知と謂ふ意の涉着する處を指して之を物と謂ふ、只だ是れ一件なりと、（傳習錄下、二丁）

若悟得心是無善無惡之心

意卽是無善無惡之意

物卽是無善無惡之物（モチレ）（ナリ）

蓋（シ）無心之心（ハチ）則密藏（ス）

無心の心とは心の未だ發動せざる所、卽ち心の本體にして用に表はれざる所なり、心の本體は密に萬端の作用を爲すべき能力を含藏するの意味なり、

無意之意（ハチ）則應圓（スルコトナリ）

無意の意とは所謂有心故造と云ふことなく、彼を斯（か）くせん是を斯（か）くすると云ふことなくして働くは應ずること圓滿無碍なり、但し無意の意と云ふも機械的に動作するの謂に非ず、意の作用の最も精妙なる所を云ふ、

無知之知（ハチ）則體寂（ナリ）

無知の知とは別に之を知らんとするの勞なくして知るは、體自ら靜寂なり、所謂知ることなく知らざることなきの知は靜寂にして知るの妙用を爲すを云ふ、

無物之物（ヘチ）則用神（ナリ）

無物の物とは事とせざるの事は、其用は一に止らず、神變不思議なりとの謂な

り、物は事なりと解するは王子の語には其例少からず、事を事とせざるの用は、事を事として勞するの功よりは却て大なり、有爲にして化するよりは寧ろ無爲にして化するの用は却て神なるに如かざるを知るべし、

上述の四句は王龍溪が善惡を貫通して之を悟りたる後に發したる語なれば、普通の心境にては解し易からず、

夫れ天命の性は粹然として至善なれば神の如く感應して、其の機は自ら私を容れず、善の名狀すべきなく、惡も亦た固より無し、是れを無善無惡と謂ふ、若し有善有惡ならば則ち意が事物に應じて動くも自然の流行に非ず、是れ有に拘泥（こだわ）す、有に拘泥する者は縱令ひ行動するも故造の動なし、是れ無なればなり、有に拘泥する者は其の行動は皆な有心故造なり、故に動きて勞するを免れず、

夫れ意とは是れ心の發動する所なり、然れば若し有善有惡の意ならば則ち知物二者も俱に皆な有善有惡なり、然らば心も亦た之を無善無惡と謂ふべからず、斯かれば陽明先生が無善無惡を心の體に附しながら、有善有惡を意の動に附するの

は疑ふべし、若し善ならば心意知物は共に善なることを知るべしと、以上は龍溪の論なり、

緒山謂へらく、龍溪の論の如きは實に是れ師門の教法を破ると、龍溪謂へらく學は須らく自得する所あるべし、徒らに人の後へに從ふて轉せざるべし、若し師門の權法を固守し之を以て定案と爲さば未だ言筌に滯るを免れずと、緒山謂へらく、心體は是れ天命の性にして元と無善無悪なれども猶ほ人は習染心ありて一念一念の上に善悪の存するを見る、格物致知誠意修身は正さに是れ彼の本體に復すべきの功夫なり、若し元來善悪なくんば、功夫も亦た說くことを要せざるべしと、反覆論難容易に決すべくもあらず、

時に緒山は龍溪に謂て曰く、吾等二人の所見同じからず、何を以てか他人を教導せん、何ぞ相與もに我師に就きて之を質さゝると、

時方さに嘉靖六年九月、王子思田二州の蠻賊征討の命を奉じて將に遠征の途に上らんとする某日の前夜なり、此夜客始めて散じ、先生將に燕室に入らんとせし時、山緒龍溪と與もに庭下に待つと聞きて、復た出で席を天泉橋上に移す、

越の山水は由來絶勝を以て聞え、王子が同志を教化するも亦た多くは登遊山水の間に於てせらる、天泉は即ち王子講學の園、風致閑雅幽邃にして最も逍遙に適す、秋天高く澄みて明月皓々、涼風遠く來て銀波瀲灩、今夕何の夕ぞ、王門の師弟をして斯高會を爲さしむ、緒山乃ち龍溪と論辯の端末を擧げて之を王子に質す、先生欣然喜びて曰く、正に兩君此一問あるを要す、我今將に遠征の途に上らんとす、學友中更に談論の此に及ぶ者なし、熟ぶ案ずるに、兩君の說は相助けて始めて能く用を爲すべし、各自一說に拘泥すべからず、吾教法には元來此の兩種の說あり、夫れ人心の本體は元と明かにして何等の翳りあるとなし、四無的四言教は上根上智の人の爲に立つ、上根上智の人は頓に本源上より悟り、無善無悪なる心の本體を知り得て無たる處に基礎を立つるが故に意知物の三者皆な無より生ず、即ち本體即功夫なることを悟りて、人我も內外も一齊に達觀して過不及なく障礙なし、所謂頓悟圓融の學なり、中根以下の人は最初有善有悪の上に於て基礎を立つることを免れず、心意知物の四者皆な未だ嘗て本體を悟り得ず、邪慾に溺れて本體に猶ほ障礙を受くることを免れず、

故に先づ一念一念の上に於て着實に善を爲し惡を去るの功夫を爲し、惡は小と雖も必ず之を除去し、善は小と雖も必ず之を發達せしめ、斯くして漸進悟入し有善有惡の狀態より以て無善無惡の狀態に歸し、遂に本體に復せしむ、其成功に至りては上根中根の別あることなし、此功夫醇熟して後ち障礙去り盡くるの時、本體も亦た清明なるを得ん龍溪の說は是れ我が利根の人を敎導するの說なり、我久しく此說を懷きしも、世人の或は信ずることを得ず、或は妄信して害を爲す者あらんことを恐れて發せざりしのみ、今汝已に之を發す天機已に洩れたり、唯だ愼みて妄りに世人に傳ふること勿れ、緒山の見は是れ我が中根以下の爲に法を立つるもの、緒山は性質沈毅、龍溪は性質明朗なり、故に其の得る處も亦た各〻性質の近き所に因る、若し能く互に相助け相益せば、吾敎法以て上中下三根の人を敎導するを得ん、若し各自の一說に拘泥せば、直に人を誤るのみならんと、既にして王子又曰く、今より以後朋友と學を講ずるには決して漸進的四言敎の主意を忘るべからず、卽ち唯だ我が漸進的敎旨に基き、各人の性質に隨て敎導せば自ら弊害なからん、是れ元と何人にも適當なるの功夫なり、上根上智の人は世に甚だ遇ひ難し、頓に本體卽功夫なることを一悟徹底するは古の大賢、顏回、明道も敢て當らざりし所、豈に輕しく世人に望むべけんや、凡そ人は旣に惡習に染めるが故に宜しく良知の指揮の下に在て着實に善を爲し惡を去るの功夫を用ふべし、若し誤て徒らに高遠に馳せ空しく心の本體を想像し、日常の言行倶に着實ならずんば、唯だ一種の空想を養成するに過ぎず、切に之を戒めざるべからず、と、是夜、緒山、龍溪倶に省悟する所ありたり、此より海內天泉證道の論を相傳へて王子の敎學始めて一に歸せり、豈に唯だ二子の幸のみならんや、實に亦た陽明學の幸なり

第六節　朱子の宇宙觀

甲、理氣二元論

案ずるに朱子の純正哲學は程伊川及び周濂溪より得る所多し、周濂溪の太極圖說は支那古來漸次發達し來れる思想を統一して之を簡單なる文章に表はしたる者にして、哲學史上頗る重要なる者と爲れり、而して朱子の思想を了解するには先づ之が大意を知るの要あり、圖說に曰く、

「無極にして而して太極、太極動て而して陽を生じ、動極て而して靜に、靜にして而して陰を生ず、靜極て復た動く、一動一靜互に其の根と爲る、陰に分れ陽に分れて兩儀立つ、陽變じ陰合して而して水火木金土を生ず、五氣順ひ布き四時行はる」と、(下略)(周子全書二丁)

朱子の哲學思想は此圖說を解釋するに就て發表したる所甚だ多し、而して朱子には別に太極圖說解一册あり、就て參考すべし、又た朱子の學統は程伊川より來れるが故に殆ど總ての部分に於て伊川の思想に類似せり、而して伊川の哲學は既に理氣二元論の萠芽を發し、其れより啟傳して朱子に至て理氣說は倍〻發達し頗る顯著なる二元論と爲れり、即ち概括して之を言へば朱子は宇宙の森羅萬象を解釋するに理氣の二元を以てしたるなり、程朱以外の諸家は理氣を分說する者なく、大抵氣一元論を立てたり、是を以て吾人は先づ特に朱子に就て理氣の關係を考究するの必要あり、請ふ朱子の語に就て之を討究せしめよ、朱子曰く

「理と氣とは是れ決して二物なり、但〻物の上に在りて看るときは則ち二物渾淪す、分開して各〻一處に在らしむべからず、然れども二物の各〻一物と爲るに害おらず、若し理の上に在りて看るときは則ち未だ物あらずと雖も已に物の理あり、然かも亦た但〻其の理あるのみにして、未だ嘗て實に是物あらざるなり」と、(性理大全卷二十六理氣總論)

是れ則ち理氣二物說の要領なり、猶ほ朱子は理氣二物の先後を說て曰く、

「理と氣とは本と先後の言ふべきなし、然れども必ず其の從て來る所を推さんと欲ずるときは則ち須らく先づ是理ありと說くべし、然かも理は又た別に一物と爲れるに非ず、即ち是氣の中に存す、是氣なきときは則ち是理も亦た掛搭(罣礙)する處なし」と、(朱子語類卷一)

以上の語に徵するに朱子は明かに理氣に前後を附し、二物として之を說きたるなり、然れども後世學者往〻此說に就きて朱子を非難せり、抑も氣一元論を唱へて理は其中に具はるものとして明言せざるものあり、『周易』周濂溪、程明道、張橫渠等は概して此類に屬すべし、又た一氣を先とし理は自ら其中に具はると明言して朱子の二元論に反對する者あり、明の楊晉庵、羅整庵、吳蘇原、我邦の伊藤仁齋、貝

原益軒等も亦た此類に擯すべし、王陽明の如きは宇宙問題に就て多く語らざりしも、之を其の談片に徴するに、是れ又た一元氣中理自ら具るの說なり、然れば吾人は理氣二元論は伊川朱子の特唱說と見るを得べし、猶ほ理氣其物に就て語らしめよ、朱子曰く、

「天地間に理あり氣あり、理は形而上の道なり、物を生ずるの本なり、氣は形而下の器なり、物を生ずるの具なり、是を以て人と物との生ずるときは必ず此理を稟て然後に性あり、必ず此氣を稟て然後に形あり」と、(朱子語類卷一)

此說に依て理氣の性質及び其の作用を知るべし、又た朱子は再び人類萬物の生ずるに就て理氣の性質及び作用を詳說して曰く、

「氣は能く凝結造作す、理は情意なく計度なく造作なし、只だ此氣の凝聚する處に理は其中に在り、且つ天地間の人類萬物禽獸草木の如きも其の生ずるとき、種子あらざるなし、種子なくして白地に一箇の物事を生出すべからず、是の種子は都て是れ氣なり、理の若きは只だ是れ淨潔空濶底の世界のみ、形迹なし、理は造作せず、氣は能く醞釀凝聚して物を生ず」と、(朱子語類卷一)

以上の語は理氣二物の性質の異點を示せるものなるが、理氣の現象界に表はるゝ者如何と曰ふに、理は萬物が具ふる所の性、是れなり約言せば性即理なり、人類に就て曰へば仁義禮智信と爲る、氣は則ち水火木金土と爲る、故に朱子曰く、

「氣は則ち金木水火と爲り、理は則ち仁義禮智と爲る」と、(朱子語類卷一)

此所に金木水火と曰ひて土を曰はざるは、土は他の四行にも普通なるが故なり、仁義禮智信を曰はざるも、亦信は他の四者に普通なるを以てなり、金木水火土を五行と曰ひ、仁義禮智信を五常と曰ふ、五行は萬物を生ずる五箇の元素にして支那古今に通ずる所の元素說なり、而して該說は印度哲學特に俱舍論等に地水火風の四元素說を立てしに類似せり、支那印度西洋の元素說が斯くの如く自然に暗肖する所あるは實に奇と謂つべきも亦以て人間思想發展の大抵同一轍に出づるを證すべし、西洋に在ては其後ち哲學と理化學と別途の研究開けたれば、四元素は化學者の精密なる分析探究を經て今日は既に六十有四元素に細分せらるゝに至れり、之を要するに支那の五元素は未だ西洋の如く精密なる分析を經ざる者

所紋 第六節 朱子の宇宙觀 乙、大極論 一、大極は是れ理なり 三二三

なれども其の元素として萬物を生じ得るの作用に至ては則ち六十有四元素と同一なり、五元素を約めては之を陰陽と曰ひ、陰陽を約めては之を一元氣と曰ふ、唯だ分合の差のみにして其の實質に於ては異なる所なし、次に理より五常の性を得ることは後の性說の條に論ずるを便とすれば今は之を略す、

乙、太極論

一、太極は是れ理なり

朱子の理氣說は既に之を述べたれば、今や太極と理氣との關係を討究すべし、蓋し太極てふ語は儒書に在ては易の上繫辭傳及び周濂溪の太極圖說に在り、而して朱子の太極說は主として圖說に就て立てたるものなり、今先づ朱子の語に徵せんか、

「太極は只だ是れ一箇の理の字」と、(朱子語類 卷一)

又た曰く、

「只だ是れ一箇の理のみ、其極致に因ての故に太極と曰ふと、(同上)

是れ則ち太極は即ち理、理は即ち太極とするを知るべし、蓋し宇宙間一切の現象を分析討究して其の終局に存するものは唯だ太極のみ、太極と曰ふときは唯一にして絕對的なれども、理と曰ふときは必ず氣と相對す、故に太極と理とは見方を異にするに由て起れる兩名なり、尙ほ理が太極に當ることを他の語より證せんか、朱子曰く、

「未だ天地あらざるの先き、畢竟只だ是理のみ、此理あれば便ち天地あり、若し此理なくんば便ち亦た天地なく人なく物なく却て該載なし、理あれば則ち氣あり流行して萬物を發育す、」と、(朱子語類 卷一)

是れ則ち理は究極にして天地以前に存するの本源なることを示せるなり、故に此理は卽ち太極なることを見る、是に於て朱子の理氣說を以て易及び周濂溪の太極圖說に比較對照せば朱子の所謂理は濂溪の所謂太極に當り、朱子所謂氣は濂溪の所謂陰陽兩儀に當るを知るべし、然れども是れ只だ朱子が理氣二元論の立脚地より太極圖說の語を解決したるものにして濂溪が太極を說くに當て朱子の如く理氣を明辨したりと曰ふに非らざるなり、今は唯だ朱子の解決を示すのみ、

二、太極と萬物との關係

抑も萬物は太極より生ずることは以上の說に依りて知るを得べし、然れども太極と萬物との關係は亦た一應の討究を要するものあり、而して之を分つて二種と爲すを便とす、曰く萬物體統一太極、曰く萬物各具一太極是れなり、

宇宙間の萬物は皆な太極より生じたるより考ふるときは、之を合して言へば一太極に統括（とうくわつ）すべきこと明かなり、故に朱子は萬物は一太極に體統すと曰へり、然かも亦た朱子は個々の萬物より言ふときは物々各〻一太極を具ふと曰へり、更に考ふれば太極は一方より言へば唯一にして他方より言へば萬物と其數を同くするものなり、

故に朱子曰く、

「人に一太極あり、物々一太極あり、合して之を言へば萬物は一太極に體統し、分て之を言へば一物各〻一太極を具す」と、（學的上六十八）

朱子が萬物各具一太極の說は往々人の疑問を免かれざるが如し、朱子は嘗て或人が之を難せしに答へて曰く、

「萬物の生ずるや太極を同くす、而るに其の各具を謂ふは則ち亦た疑ふべき者あり、然れども一物中天理完具し、相假借せず相凌奪せず、是則ち安んぞ各具一理と曰はざるを得んや已、（周子全書 朱熹書）

蓋し朱子の意は太極は天地萬物の理なれば、天地に在て言へば則ち天地の中に太極あり、萬物に在て言へば則ち萬物中に各太極ありと曰ふに在り、然れば此所に一物天理完具と曰へるは人類禽獸草木等に共通普遍なる理に就て曰へるなり、蓋し人の人たる所以の理も、禽獸の禽獸たる所以の理も、草木の草木たる所以の理も皆な同一なることを意味するなり、卽ち朱子は萬物は理氣三元の合して成れる者とするが故に此の萬物共通の理の外には個々物體の成れる特殊の理あることを認めず、其の共通普遍の理を名けて太極と曰ふが故に萬物各具一太極の說を生せしなり、猶ほ之を粟粒發生の妙喩を以て示せるあり、曰く、

「一粒の粟生して苗と爲り、苗は花を生し花は實を結ぶ、又た粟を成して本形に復す、一穗に百粒あり、每粒箇々完全なり、又た此百粒を種ゆる時、一粒又た各〻百粒を生し、生々して已まざるも、初は只た一粒より分かれしなり、此と同しく

物々各々理あれども只だ是れ一理なりと。(語類卷一)

是の譬喩に依て太極は唯一なりや將た萬物の數に等しきやの疑團氷解するならん、換言せば太極は一即萬、萬即一なり、唯だ説明に分合を異にするのみにして理其物は異なる所なし。

三、理同氣殊

朱子は宇宙間の萬物を理氣の二元より解説して、理同氣殊の説を爲せり、謂へらく理の側より言へば萬物は悉皆同一にして毫末の差異あらざるなり、換言せば萬物各具同一理と謂つべきなり、然らば何故に萬物てふ無數の差別相は生ぜしや、曰く、是れ唯だ氣の正偏清濁あるに由るのみ、凡そ聖賢凡愚以下動植物等無數の差等の存するは全く氣稟の側より觀察したるの結果なり、即ち清正なる者は人類と爲り、偏濁なる者は禽獸草木等と爲るなり、若し氣に正偏清濁の差別なく皆な同一ならしめば、所謂千差萬別の物は生存するに由なく、遂に一物と爲るべからんのみ、然れども天地自然の道理此事ある能はずして必然的に發展の際、精粗昏明の差を生ずるが故に無數なる品物は生ぜしものなり、但し朱子の此の説

明は現象を見て其を解釋したるのみ、詳言せば何の目的を以て天地は生ぜしや、何の爲に人類は生ぜしや、何故に萬物は生ぜしやを討究せしに非ずして、如何なる狀態に於て天地は生じ、如何樣に人類は生じ、如何に草物は生ぜしやを説明せしのみ、太極は因果の原則を超越したる者なれば其の本源は討究するに由なきなり、否な宇宙の本源は無究際なることを知れば足れりとすべきのみ、故に宇宙間の現象は太極より必然的原則に循て發生せし者にして其の如何に發生せしかは上述説明の如きものなり、而して現象界は無究際に消長變化新陳代謝するものなり、

抑も朱子が既に理は萬物に通じて同一なりと曰へるは、理其物は完全無缺平等無差別にして何物にも支配せられざるより立言したるなり、然れども現象に入りて差別ある氣に從ふときは亦た隨て異ならざる能はざるなり、故に曰く、

「人と物の生ずるや、天之に賦するに此理を以てす、未だ嘗て同からずんばあらず、但、人と物の稟受に自ら異あるのみ、一江の水の如し若し杓を以て取らば只だ一杓を得、椀を以て取らば只だ一椀を得、一桶一缸に至るも各自器に隨て同

からず、故に理も亦た随て異なり」と。（朱子語類、巻四）

蓋し萬物の二原を論ずるときは則ち理は同くして氣は異なり、萬物の異體を觀るときは則ち氣は猶ほ相近くして理は絶えて同じからざるが如し、然れば朱子が一方に於て理の同一普遍を說き、一方に於て理の隨物殊別を說くは各〻觀察の方面を異にするの結果にして前後矛盾（むじゅん）する所に非るなり、

上來論述じたる朱子の哲學即ち宇宙發生說を概括するに、太極は理にして理は精なり、氣は陰陽に分れて又た精粗なき能はず、陰陽の二氣は五行に分れ、五行が萬物を生ずるに稟受に正偏あり、正を得る者は人類と爲り、偏を得る者は其他の萬物と爲る、人が萬物の靈たる所以實に此くの如し、今假に宇宙萬物發生の狀を圖を以て示せば左の如し、

右圖の太極（理）より五行に至る五段は一處に縮めて考ふべし、決して延長したる圖に拘泥すべからず、

抑も上圖に示す如く朱子の哲學は太極即理として理氣二元を立て且つ氣に於て又た精粗の二元を立るが故に之を二重的二元論と名くべし、而して太極と曰ひ理と曰ふは只だ見方の異なるに由て起れることは既に之を辨したるが如し、

案ずるに朱子が理氣二元を立て又た氣に精粗二元を立つるは恰もデカルトが神と世界の二元を立て又た世界に心物二元を立つるに似たり、故に朱子デカルト二氏は共に二重的二元論者と稱せらる、且つ又た朱子が萬物體統一太極と曰ひ又た萬物各具一太極と曰へるは恰もライプニッツの所說の元子に似たり、即ち

ライブニッツの元子は皆な宇宙の全體を具し小宇宙大宇宙と相一致すと曰へるに類せり、猶ほ委しくは、デカルト、ライブニッツを參考すべし、

第七節　王子の宇宙觀

王子は主として實踐倫理を說きたれば、宇宙問題を考究せしことは極めて希れなり、然れども復た古人の說を評し、或は良知を主唱するに當りて其意見を發表するものあり、案ずるに王子の宇宙觀は一氣を以て宇宙の本源と爲し、理は此中に具はりて井然秩序あるもの是なりと爲すなり、故に之を朱子の理氣二元論に比するときは頗る異なる所あるを見るべし、而して王子は天地萬物を說くに主として理の方面よりする時あり、即ち良知が天地萬物を生ずると說くが如きは即ち是れなり、又た時には主として氣の方面より萬物の發生を說くことあり、即ち氣屈伸して陰陽四時と爲りて萬物を生ずと說くが如きは即ち是れなり、然れば大體に於ては一元氣ありて理は其中に備はるものと曰ふに歸すべし、今先づ其の語に據りて氣の方面より立てたる說を窺はんとす、

「王子曰く、周濂溪の「靜なること極りて動くの說も苟も善く觀ずんば亦た未だ病あるを免れず、蓋し其意は太極動て陽を生じ、靜にして陰を生ずるより說き來り、太極生々の理、妙用息むことなくして常體易はらず、太極の生生は即ち陰陽の生々なり、其の生々の中に就きて、其の妙用息むことなき者を指して之を動と謂ひ、之を陽の生と謂ふ、動て而後に陽を生ずと謂ふに非るなり、其の生々の中に就きて、其の常體易はらざる者を指して之を靜と謂ひ之を陰の生と謂ふ、靜にして而後に陰を生ずと謂ふに非るなり、若し果して靜にして而後に陰を生じ動て而後に陽を生せば則ち是れ陰陽動靜は截然として各自に一物と爲るなり、陰陽は一氣なり、一氣が屈伸して陰陽と爲る、動靜は一理なり、一理隱顯して動靜と爲る、春夏は以て陽と爲し動と爲すべくして未だ嘗て陰と靜となくんばあらず、秋冬は以て陰と爲し靜と爲すべくして未だ嘗て陽と動となくんばあらず、春夏は此れ息まず、秋冬も此れ息まず、皆な之を陽と謂ひ之を動と謂ふべし、春夏は此れ常體なり、秋冬も此れ常體なり、皆な之を陰と謂ひ之を靜と謂ふべきなりと」（傳習錄中五十二丁）

以上は周子の太極圖說の語を評するより起れる說なれども、王子の氣一元的宇

宙觀を知るには既に充分なるべし、猶ほ左に理の方面を主とせる說を窺はんとす、

「王子曰く、良知は是れ造化的精靈なり、這些の精靈なれども天を生じ地を生じ鬼を爲し帝を成すことは皆な良知より出づ、眞に是れ物と對なし、人若し良知を復し得て完完全全にして少しの虧欠なくんば自ら手の舞足の蹈を覺えず、天地間更らに何の樂か之に代はるべきかを知らず」と、（黃以方錄）

問ふ、人虛靈ありて方さに良知あり、草木瓦石の類の如きも亦た良知ありや否や、王子曰く、人的良知は就ち是れ草木瓦石的良知なり、若し草木瓦石に人的良知なくんば、以て草木瓦石と爲すべからず、豈に唯だ草木瓦石を然りと爲すのみならんや、天地も人的良知なくんば亦た天地と爲すべからず、蓋し天地萬物は人と原と是れ一體なり、其の發竅（蘊奧を發す）の最精なる處是れ人心一點の靈明なり、故に五穀禽獸の類は皆な以て人を養ふべし、藥石の類は皆な以て疾を療すべし、只だ此の一氣を同くするが爲めの故に能く相通ずるのみ」と、（黃以方錄）

以上の語に徵せば王子の宇宙說は陸象山と朱晦庵とに似たる所あるが如し、何

となれば陸象山は理を以て宇宙の原則と爲し、又た其理を人心に受得するより名けて之を本心と爲せり、本心とは即ち王子の所謂良知なり、宇宙の理は即ち人心に具備する所の理是れなり、象山は慨じて宇宙よりして人心に說き及ぼせる所多けれども王子が良知よりして宇宙の原則に及ぼせるも亦た唯だ順逆の差あるのみ、若し王子の所謂良知即ち天理は象山の所謂理と同一なることを知り、復た象山の所謂理は宇宙に充塞遍在して天地鬼神萬物も皆な之に由ることを知らば、王子が人的良知即ち天理を以て草木瓦石等天地萬物に具するものと爲すは固より異とするに足らざるなり、子思が誠を以て宇宙の原則と爲し又た人道の基礎と爲せるに比するも異なる所なし、但だ良知と理と誠とは指す所に隨て名を異にせるのみ、抑も王子の此說は專ら理より立言し、宇宙間の森羅萬象の消長變化しつゝ條理井然一毫も亂れざる所を以て誠乃ち天理即ち良知即ち理の發現流行と爲すのみ、王子が常に言ふ所の天則自然なる語は此所に所謂良知にして之を人心に受得するより曰へば百行の標準たるべきものなり、故に王子の天人合一の主意も亦た此れに徵して知るべし、

次に朱晦庵に似たる所ありと曰ふ所は、天地萬物は原と是れ一體なりと爲し、心は是れ氣の精爽と爲すにあり、抑も朱子は理氣二元論者にして氣の方面よりして形質を説明す、夫れ此の氣たるや萬物の共に稟くる所なるが故に之を以て萬物一體と爲すを得べし、王子が天地萬物は人と原と是れ一體なり、其の發竅(竅奥を開)の最精なるの處是れ人心一點の靈明なりと曰へるは正しく朱子の心は氣の精爽との説と符合せり、而して五穀藥石等を以て人體を養ひ病を療すべしと曰へるは專ら氣の方面より説きたるものなり、故に此の一氣を同くするが爲めの故に能く相通するのみと曰へり、

以上の如く王子の宇宙説は朱陸二子に類するの點あり、而して其の説の元と良知より悟入したることは固より論なし、且つ王子は良知を主とするが故に氣は之を詳説する所なし、但し此所に一言すべきは「心を以て氣の精爽」とする説は朱子の主唱せし所なれども王子も亦た心を以て純理と爲すの言なく、依然として心は氣に屬し理は之に具はりて其の本體と爲るものとするなり、世人或は心即理なる語に誤まられて直ちに之を以て朱子の「心は氣の精爽」てふ語と對比すれども是れ大なる謬見なり、何となれば朱子の理氣説は專ら宇宙に關係し陸王の心即理は專ら倫理に關係す、若し强ひて陸王の心即理に比較せんと欲せば朱子の倫理説中の本然之性を以て之れに充つべきなり、凡そ宇宙觀は以て宇宙觀に比すべく、倫理説は以て倫理説に比すべし、余輩の見に依れば心と理氣との關係を論ずる所は朱王二子異なる所なし、唯だ朱子の説の精緻にして王子の説の粗なるを見るあるのみ、

第八節　朱子の性説

抑も性善惡論は支那倫理學史上に在ては頗る重要なる問題と爲り、古來の學者之に就て意見を立てざる者殆んど希なり、

孔子は性相近也習相遠也(陽貨第十七)唯上智與下愚不移(雍也第六)と曰ひ、有教無類(衛靈公第十五)と曰ひ、一陰一陽之謂道(繫辭上傳)繼之者善也成之者性也(繫辭上傳)と曰ひ、猶ほ性を説かれし語あれども、未だ性善説とも性三品説とも決定せず、故に後世學者が孔子の性説に就て意見を異にするに至れり、

孟子は性善の一元論者にして、荀子は性惡の一元論者なり、且つ孔門七十子

の間にも性有善有惡等の說ありしことは、後漢の王充の論衡の本性篇に見え、前漢の劉向は孟子を駁して孔子を取り、性情相應說(論衡本性篇、申鑑雜言下篇)を立て、揚雄に至ては性善惡混の二元論(法言修身篇)を唱へ、荀悅は性三品說(雜言下篇)を爲し、王充は性有善惡說を立て、唐の韓退之に至て一層精密なる性三品說(原性篇)を爲し、孟荀揚三子の說を以て不完全と爲し、遂に孔子の「上智と下愚とは移らず」の語に歸着せり、而して其性說の最も發達せしは宋代にして、就中、張橫渠、程伊川、朱子を以て其の顯著なる者とす、朱子の性說は橫渠伊川二子を繼ぎて其の極度にまて發達せしめたる者と謂つべし、特に朱子は伊川の學に得る所多く、性說に就ても程朱は大體に於て同一なれば朱子の說を知ると同時に伊川を知るを得るなり、程朱は人性を分て本然之性(又は天地之性とも曰ふ)氣質之性と爲せり、張子も亦た天地之性氣質之性と二分して說きたれども、程朱の如く詳密ならず、今左に朱子の性說の要を示さん、

「有天地之性、有氣質之性、天地之性則太極本然之妙、萬殊之一本也、氣質之性則二氣交運而生、一本而萬殊者也」と、(朱子語類大全性理)(學的上七十一)

又た曰く、

「天地の性を論ずるときは則ち專ら理を指して言ふ、氣質之性を論ずるときは則ち理と氣とを以て雜へて之を言ふ」と、(同上)

又た曰く、

「理を以て之を言へば則ち全からざることなし、氣を以て之を言へば則ち偏なきこと能はず」と、(同上)

以上の數語に依て天地之性は理にして、氣質之性は氣を主として之に理を雜ふるを見るべし、而して程朱が性卽理と曰へるは天地之性に就きて曰へるのみ、

次に天命性道理心情の關係を示せる語を揭げん、

「仁義禮智は性なり、惻隱、羞惡、辭讓、是非は情なり、仁を以て愛し、義を以て惡み、禮を以て讓り、智を以て知るは心なり、性は心の理なり、情は性の用なり、心は情性の主なり」と、(同上)

又た性と情との關係を示して曰く、

「性は心の具する所の理なり、情は性が物に感じて而して動く者なり」と、(學的上三十五)

又た命と性との關係を示して曰く、

「天の萬物に賦予する所より之を言へば之を命と謂ひ、人物の天に稟受する所を以て之を言へば之を性と謂ふ」と、(上同)

又た心を解して曰く、

「心は人の神明、衆理を具へて而して萬事に應ずる所以の者なり」と、(上同)

道と理との關係は左の如し、

「道即理なり、人の共に由る所を以て言へば則ち之を道と謂ひ、其の各々條理あるを以て言へば則ち之を理と謂ふ」と、(上同)

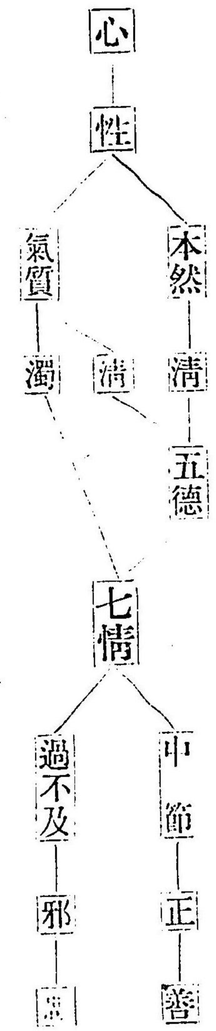
性と生との別は左の如し、

「性は人の天に得る所の理なり、生は人の天に得る所の氣なり」と、(上同)

次の語は專ら本然の性に就て言へるものなり、渾然として至善なり、未だ嘗て惡あらず」、(上同)

「性は人が天に稟て以て生ずる所の理なり、渾然として至善なり、未だ嘗て惡あ

以上の諸語に依りて天命性、道、理、心情の關係を知るを得ん、尙ほ朱子は心性等を



辨ずるの語甚だ多し、

朱子は哲學に於て已に理氣の二重的二元論を立て、性說に於ても亦た本然氣質の兩性を立つるが故に之を亦た二重的二元の倫理說と曰ふを得べし、蓋し本然之性は理より得て精清なる者なれども、氣質之性は氣より得て清濁あるを免れず、且つ人は理よりして仁義禮智信の五德を得て之を具すれども、喜怒哀樂愛惡欲の七情發する時に當て正を得ることあり、或は正を得ざることあり、故に善惡賢愚等の別を生ず、即ち節に中る者は正なり、善なり、天理なり、過不及は邪なり、惡なり、人欲なり、今假に小宇宙即ち心性發展の狀を圖を以て示せば左の如し、

上圖の心より七情に至る六段は一處に縮めて考ふべし、決して延長したる圖に拘泥すべからず、

此圖を前に掲げたる宇宙發展の圖に比較對照せば、小宇宙と大宇宙との關係を知るべきのみならず、朱子の哲學倫理は確乎たる根據ありて調和融合脈絡貫通する所あるを知るべし、

今玆に朱子の哲學と倫理を通觀するに、哲學に於ては理氣と說き、倫理即ち性說に於ては本然之性氣質之性と說く、其他の細說も亦た已に大小宇宙の圖解に示せるが如し、但々特に宇宙と人類の比較にして萬物全體に亘らざれども亦た之を萬物に通じて考ふるも、天地間の萬物は皆な共通の基礎を有し、此點より觀れば同根、同體と謂つべきなり、而して人類は萬物中最清最厚の氣を稟けたる靈長にして、天賦の理即ち道德性を完備す、是れ則ち儒敎に道德固有と說く所以なり、換言せば道德は人性必然的にして偶發的たらず、又た先天的にして後天的たらず、宇宙の本源よりして既に道德性を賦與せらるゝ者なれば之を沒了するに非ずんば完全なる人間として生存するを得る者なり、其の天性を保全せる者は則

ち聖人にして靈長の又た靈長たる者なれば、衆人に先て人道の正を悟り衆人を敎訓するの方法を講ぜらるゝなり、是れ亦た聖人の天職を盡くすに外ならずして、中庸に所謂中和を致して天地位し萬物育すと曰ひ、至誠の聖人は天地の化育を贊すと曰ふもの是れなり、朱子の哲學倫理は最も善く融和する者にして夫の純理門と實踐門と相容れざるが如きの異觀あることなし、朱子の哲學倫理學は洋々として大海の盡きざるが如く、愈討究して愈深廣なるを知る、

今、程朱二子性說立論の態度を見るに、孔孟二子を結合するに就て頗る苦心したるが如し、元來孔孟二子の性論は相合はざる所あり、故に韓退之蘇東坡の如きは孔子を以て標準と爲したれば孟子の性說を以て不完全と爲せり、然るに所謂宋儒は孟子の學說を信奉すること極めて厚く、孟子を以て直に孔子に亞ぐべきの大賢と爲し之を聯稱して孔孟と曰ひ、其の遺書を聯稱して論孟と曰へり、然れば性說に於て孔子を取らんか、孟子を取らんか、孔子を含てざるべからず、孟子を取らんか、孔子を含てざるべからず、程朱の態度よりすれば孔孟二子は共に取るべくして舍つべからざるの關係あり、是に於て程朱は自家の性說を確立するの先決問題として如

何に孔孟二子を圓滿に融合すべきやを討究すべきの機會に遭遇せり、幸にして程伊川以來本然氣質の兩性を唱へ、孔子は義理を主とするあり、或は氣質を主とするあり、或は義理氣質を雜へ說くものありと爲し孟子は純然たる義理の性を說けるもいと爲す、是に於て殆んど何等の障碍なく本然氣質兩性の下に孔孟二子を結合するを得たり、朱子は之を發達せしめ、巧妙に論孟の性論諸章を註釋せり、是れ古來性善惡論史上に於ける一大發明なり、此發明ありてより以後は孔孟以外の古來諸家の說も亦た自ら評定せらるゝに至れり、宋明以後の諸儒は皆な多少性論の章なきはなしと雖も、大抵程朱を布演する者にして別に鮮明なる旗幟を建て得し者あることなし、程朱性說の功も亦た大なりと謂ふべきなり、

第九節　王子の性說

按ずるに王子の學說は儒教の要旨を得たる者にして特に孟子の良能良知及び良心說より得來れる者多し然れば陽明學の根底より推論するも萬人同性にして性善說たるを認むるを確知するを得るなり、若し王子が性善說を取らずして

良心の固有を唱へ、仁義禮智の固有を主張せば自家撞着と爲るべし、詳言せば若し性善說を取らずんば王子の學說は成立せざるなり、設令ひ言論文章を以て性善と主張せざるにもせよ、已に然かく假定せるものと謂はざるべからず、況んや明かに之を論證せるものあるをや、故に余輩は斷じて王子が孟子の性善說を承けたることを言へり、抑も世の論者往々王子の性說の曖昧にして性善惡混說なるかの如く評する者あれども是れ恐らくは非なるべし、左に其說の要を示さんとす、曰く、

「性は一のみ、仁義禮智は性の性なり、聰明睿知は性の質なり、喜怒哀樂は性の情なり、私欲客氣は性の蔽なり、氣に淸濁あり、故に情に過不及あり、而して蔽に深淺あるなり、私欲客氣は一病兩痛なり、二物に非ず」と、（傳習錄中　六十丁）

此言は王子が最も明白に自家の意見を示したる者にして其の性善說にして孟子と同說たることは「仁義禮智は性の性なり、私欲客氣は性の蔽なり」と云へる二句のみにても判定し得べきなり、

王子嘗て善惡を論じて善惡は唯だ是れ一物と曰へり、蓋し王子の言は七情の發

動するとき、中和を得ば固より善と名け、若し過不及あらば惡と名くるのみ、元來善と惡と相對立して存するにはあらずとの意なり、程明道の意も亦た然り故に王子の言に由て明道の語意を悟るを得るなり、朱晦庵が善惡を定義せるも亦た此くの如きに外ならず、唯だ王子が簡易直截の方法を執つて達觀洞察するの結果、遂に善惡唯だ是れ一物と言へるのみ、王子の用語往々此の如きものあり、言を以て意を害することなくして可なり、又た性と氣を論じて曰く、

「生之れを性と謂ふ、生の字卽ち是れ氣の字なり、猶ほ氣卽ち是れ性と言ふが如し、氣卽ち是れ性、人生れて靜なる以上は說くべからず、才かに氣卽ち是れ性と說かば卽ち已に一邊に落つ、是れ性の本原にあらず、孟子の性善は本原上より說く、然るに性善の端は氣上に在て始て見るべし、若し氣なくんば亦た見るべきなし、惻隱羞惡辭讓是非卽ち是れ氣なり、程伊川謂ふ「性を論じて氣を論せずんば備はらず、氣を論じて性を論せずんば明かならず」と、亦た是れ學者各〻一邊を執るが爲めに只だ此の如く論せしなり、若し自性を見得して明白なる時は氣卽ち是れ性、性卽ち是れ氣原と性と氣とは分つべきなし」と、(傳習錄中、四十五丁)

王子が孟子の性善說を承けたることは以上に論述したるが如し、孟子は明々白々に人性善なりと斷言して之を論辨し、以て其の仁義固有說の基礎と爲せり、故に孟子の性善說は何人も疑を容るゝ者なし、之に反して王子は致良知說、去人欲存天理說を主張するに力を注ぎ、表面に人性善を唱ふること少かりしなり、然れども其の眞意の在る所は既に明白にして疑ふべき所なし、王子卒せし時門人黃綰上疏して僞學の禁を反駁し王子の學說の淵源あることを說きて謂へらく、「王守仁の致良知の說は實に先民(孔孟二子を指す)の言に本づく、蓋し致知は孔氏に出でゝ良知は孟軻性善の論に出でたり(王陽明全書卷三、十四年譜)と、此言取て以て副證と爲すべし、王子の語皆な光彩陸離たり、以に往々讀者の眼を眩せしむるものあり、

第十節　朱子及陸王二子の異同

上、朱陸二子の異同

第一、朱陸二子哲學上の差異は主として周濂溪の太極圖說に就きて起れり、初め象山の兄、梭山論じて曰く、太極圖說は濂溪の作にあらず、何となれば濂溪の『通書』四十章中には一も無極而太極てふ字なければなり、設令ひ一歩讓りて濂溪の作とするも

も少年時代の作にして通書を作りし頃は既に其說の非なるを知りて之を除去せるなり、且つ易に太極の二字あれども無極の二字なし、太極と言へば既に足れり、何ぞ又た無極と云はん、是れ濂溪が無極の字を改めし所以なりと、之に反して朱子は「無極而太極」てふ語否な該圖說全文を濂溪の眞說として之を奉承し、其作の少年と老年とを論せず、且つ先聖の既言と未言とを問はず、故に梭山が無極は無用の字なりとするを駁して曰く、

「不レ言二無極一則太極同二於一物一而不レ足レ爲二萬化根本一」と（朱子文集卷三十六）

是れ則ち朱子が「無極而太極」の語は一字を變ずべからざるを示せるなり、其の後ち象山が梭山の說を繼ぐに至て益〻論鋒を鋭くせり、象山は朱子の論を駁して無極と言はずとも、太極は能く萬化の根本たるに足るべきを主張し、且つ極の字を解釋して曰く、

「極者中也、言無極則是猶言二無中也一、是奚可哉」と（象山全集卷二十、十二丁）

朱子は之に對して諸儒が極◎を解して中と爲す者あるは蓋し此物の極が此物の中に在るを以てならん、極の字を指して中と訓するにあらず、極は至極のみと云へり、象山は又た無極の二字は老子知雄章に出づるも吾が聖人の書には有ることなし、且つ二程子の言論は至て多けれども亦た未だ嘗て一も無極の字に及ばず（卷二、十二丁）と辨せり、

朱陸の折衝は往復論難數回に及び頗る奮戰の迹あり、蓋し太極は朱子學に在ては重要の部分を占むれども、陸學に在ては太極を說かざれば學說に關係なし、之れ又た朱陸學風の異なるに因るなり、

第二、朱子は即物究理を重んじ、陸子は心即理と說き唯だ心を重んず、是れ陸王學を特に心學と名づくる所以なり、約言せば朱子は知的探求に傾き、陸王は心德練磨に傾かんとす、（此一段は朱王二子の差異にも通用すべし、）

第三、朱子は六經を以て金科玉條と爲し、終生六經を註釋するに力を注げり、陸子は之に反して非我註六經、六經皆我注脚（錄）と曰へり、以て二子の差を見るべし、（此一段も亦た朱王二子の差異に通用すべし、王子は所有倫理書は我が良心の註釋と考へしなるべし）

第四、朱子は稍、經驗的歸納的なり、故に學者或は力量の不足を感じ、或は支離滅裂に陷るの傾あり、陸子は直覺的演繹的にして禪學と疑似の點多し、(同上陸王共通)

第五、象山は德行を先とし學問を後とす、王子も亦た然り陸王二子は德行其れ自身を即ち學問と見るなり、朱子は學問より方法を求めて然後に德行に及はんとす、朱子嘗て曰く、陸子は專ら德性を尊ぶを以て人を誨ふ、故に其門に遊ふ者踐履の工多し、然れども問學に道ふ處に於て欠く、某が人を敎ふる豈に是れ問學に道るの處に些子を多くせずや、故に某の門に遊ぶ者は踐履多く之に及ばすこと、(語錄)蓋し陸子が實踐を以て人を導けるを讚美せしなり、

第六、朱子謂へらく學は必ず聖賢の遺意を其の書中に求めざるべからず、修身の法は必ず洒掃應對進退より順序を追ふて始めて聖人の域に達すべしと、而して朱子は伊川の說を承け常に居敬究理を以て主眼と爲せり、陸子謂へらく文字の末に拘泥し、區々たる禮儀法則の中に其身を屈するは是れ天資を害するなり、學問の道は精神に在りて文字形式にあらずと、是故に朱子の如く居敬を詳說するに至らず王子も亦た然り)

第七、當時一般の學界は研究論辨愈〻精密にして道義實行愈〻廢頹せり、朱子は固より一代の大宗として學德善く調和を保ちたれども、元來研究的精神に富めるが故に亦た聊か此弊風を助長するの勢なしとせず、朱陸二子は信州鵝湖寺の會合に於ても亦た互に反對の意見を吐露せり、陸子は簡易直截を旨とするが故に此風を慨きて曰く、後世の學者は好事無益の言多し、古の學者は以て心を養ひ以て事を爲し、今の學者は以て心を病ましめ以て事を敗ると、(王子も亦た之に類するの嘆聲あり、又た曰く、古人は實學、後人は未だ議論辭說の累を免かれずと、以て其の意を察すべし、

第八、朱子は學者著述家として自家の學說を完備し儼然哲學を集大成したり、此點に於ては之を孔子以後の一人と稱するも溢美にあらざるべし、陸王二子は專ら本心即良知を開明して實踐躬行を奬勵したれども、哲學體系の如きは到底朱子に比較すべくもあらず、蓋し朱子と陸王二子とは元來立脚地を異にし、各自其の志す所を完成したるなり、

第九、朱子の理氣說は既に述べたるが如し、陸子は宇宙を理の一點より觀察して

之を解釋したれば恰も子思が中庸に於て誠を以て宇宙を解釋したるが如く爲れり、子思陸子は氣は之を豫想して殊更に詳論せず、其間に具はれる理の方面のみを說きたりと謂つべし、何となれば宇宙萬物豈に氣、即ち物質なくして生ぜんや、此に於て朱子の理氣說の完備せるを知るべし、

第十、朱陸の各特徵は各自の資性及び學統に由るのみならず、二氏の家學も亦た之に影響せるならん、陸子の二兄、梭山、復齋の學風も亦た簡易實踐を重んじたるを以て推知すへし、

下、朱王二子の異同

第一、致知格物

抑も朱王二子の差異は種々の點に就て見るべけれども、最も著しき差異は大學の一書、特に致知格物の四字の解釋に就て見るを得べし、故に此四字の解釋は頗る重要なるものなり、

一、朱子は致は推し極むるなり、知は識なり格は至るなり物は事なりと解す、故に格物とは一念發動の初を正すとも云ふべし、

二、吾人の知識を推し極めんと欲せば天下一個々々の事に即きて其理を究むべし、

三、人心の靈能は如何なる微妙の理をも知り得ざるはなし、

四、知識の完備せざるは理を究むること充分ならざるに由る、

五、天下の事は皆な理あらざるはなし、

解す、

一、王子は致は至るなり、いたすなり、知は良知なりと解す、故に良知を致すとも、良知に至るとも曰ふ、格は正すなり、物は事なり、又た念頭なりと解す、故に格物とは一念發動の初を正すとも云ふべし、

二、吾が良知に至らんと欲せば事毎に就て不正を正し以て正に歸すべし、惡を知りては惡を去り、善を知りては善を爲す、皆な知行合一的なるべし、

三、良知は昭明靈覺なるものにして是非善惡を判斷せざるはなし、

四、良知の光明の顯はれざるは則ち爲善去惡的功夫の不足なればなり、

五、心外無理、心外無事なり、

六、學は凡て天下の事に即きて、其の既知の理に因りて益、推究して未知の理に及ぼし以て其終局に至るべし、

七、事理研究に力を用ふること久しければ、一旦豁然貫通することありて衆物の精粗も表裏も盡さゞることなく、吾が心の全體も大用も清明なこらざることなし、是れ學問至極の功驗なり、

以上七條の主意を見るに朱子の說は主として程伊川の格致說より來れり、伊川嘗て或人と問答して曰く、

六、學は唯だ良知を致すを以て主眼とす、良知の光明昭々たらば萬理自ら之に具はる、區々たる日常の事項は豫め講習するに足らず、機に臨みて爲し得べきのみ、

七、良知を致して良知昭明ならば衆理具はりて萬事出づ、衆物の精粗も表裏も知れざることなく、猶ほ明鏡の物を照すが如し、是れ學問至極の功驗なり、

以上は王子格致說の大意なり、猶ほ簡單に格致を示せる語あり、曰く、

致知格物は吾心の良知を事々物々に致すなり、吾心の良知は即ち所謂天理なり、吾心の良知の天理を事々物々に致すときは則ち事々物々皆な其の理を得ん、吾心の良知を致すは致知なり、事々物々皆な其の理を得るは格物なり、是れ心と理とを合せて一と爲す者なりと、（一卷中、十丁）是れ則ち格知上の心即理說なり、以て兩者の關係を知るべし、陸象山の主意も亦た之に同じ、蓋し陸王の說は簡易的切にして支離散漫に流るゝの弊を防ぐに足れども、陸王は主觀的なるが故に客觀界との關係を粗忽にするの傾あり、今朱王二子の說を見るに、恰も經驗論者が知識の起源を感覺に由りて說明し、唯理論者が之

或人問ふ、格物は須く物物之に格るべきか、只だ一物に格て萬理皆な知るかと、答て曰く、須らく是れ今日一物に格て明日又た一件に格りて積習既に多くして、然後に脫然自ら貫通する處あるべしと、（全書卷十九丁）又た曰く、須らく是れ偏ねく求むべし、若し後來理に達するに到らば億萬と雖も亦た通ずべし、（全書卷二十、二丁）と、此語は古今の事業家老練家に就て檢するも頗る的切なるが如し、

程朱の說は精密確實にして後進の發達を補益すること少からず、然れども此ごに又た疑問なきにあらず、何となれば程朱は經驗に經驗を重ねて既得の

知識を應用し以て未知の理を究めて其の極に達し天下の物理を知り盡くすべきことを言ひながら、終には廓然大悟するの時あることを斷言せり、

今若し經驗のみより言へば天下無數の事理と無限の書籍等は到底盡すべくもあらず、伊藤東涯も亦た『古今學變』(卅名)に於て之を以て朱子を難せり、程朱の說は此に至て一たび窮せん、

程朱は此の窮處を通せんが爲に、豁然貫通と言て天下の事物に就て逐一研究せずとも、進んで息まずんば何時しか頓悟通達すべきの機會あるべきを示せり、然れども難ずる者は必ず曰はを理性作用に由て說明せんとするが如し、就も弊に陷り易し、王子の學友、湛甘泉が讀書講學を粗忽にすることを痛撃し、門人等が屢〻日常の事項を遺却することと無からんかを疑ひしは、實に王學の藥石と謂つべし、後の王學者が動もすれば野狐禪に坐するに至るは蓋し內觀に溺るゝの結果なり、吾人深く注意すべきなり、

ん、如何なる程度にまで經驗を積めば果して貫通すべきや、程朱は果して此の妙境に達し得たりや否やと、

其他、朱王二子の異同は大抵朱陸二子の異同と同じきもの多し、何となれば陸王二子の學風が粗同一なればなり、但し時代の異なるが故に其關係又た少しく異なるものあり、

第二、既に述べし如く朱子の研究法は動もすれば支離滅裂、繁衍叢脞に流るゝの弊を生せんとす、明代に於ける朱子の末流の弊害は王子をして一層簡易なる講學法を唱へしめたるなり、即ち明代朱子學の弊害を救正せんが爲に其れと正反對の方法を取れるなり、

第三、朱子の學は始終遠心的、即ち經驗的にして王子の學は始終求心的、即ち內省的なり、此兩方法は朱王二學の全部に行き渡れり、

第四、朱子學は讀書を重んじて理を究むることの精しきの益あれども、又た迂遠と爲り事功乏しきの弊あり、陽明學は實踐を重んじ功を立つるに勇なるの益あ

れとも、又た稍過激に失し常道を逸するの弊あり、近く我邦維新前後の朱王兩派の諸大家に徴して知るべし、

第五、朱子は二程子の說を承け大學の一書を經傳に分ち又た多少誤脫ありとして之を訂正補修して之に註釋を施せり、王子は大學の古本を以て一字の誤脫なしとして之に旁釋を施したり、二種の大學共に世に行はる、

第六、朱子は學者にして政治家を兼ね常に著述家としての態度を有し、王子は軍人にして政治家を兼ね常に事業家としての態度を有せり、

第七、朱王二子の學は各長短あれば相待て用を爲すべし、初學者が徐々に進修するには或程度までは專ら朱子經驗說の平易着實にして手を下し易きに從ふを可とす、之に反して資性聰明にして急進頓悟を欲する者は陽明學に依るを可とす、是故に古今の陽明學者が後進子弟を敎育するには往々此順序を用ひたるものあり、我邦の王學者吉村秋陽は常に弟子に敎ふるに大抵朱子學を取り陽明學に至りては學者の篤信懇請にあらざれば敢て妄りに講せず、謂へらく陽明學は猶ほ利刀の如し善く用ひずんば則ち手を傷けんと、是れ眞に朱王二學を知れる者と謂つべし、

參考書類（左記の諸書に就て必要の部分を參考せり）

王陽明全書三十八卷二十四冊
王陽明全集八卷十六冊
傳習錄附錄共四卷四冊
王學提綱二卷二冊　吉村秋陽撰
王陽明出身靖亂錄三卷
明儒學案四十冊六十二卷
陽明先生則言二卷二冊
陽明先生集要十五卷十冊
王陽明奏議選　桑原忱著
王陽明文粹四卷四冊　村瀨晦輔著
陽明學雜誌自初號至第八十號(終)
王門宗旨十冊

王心齋全集二卷
王陽明文錄鈔五冊
王陽明一冊　三宅雄次郎著
王陽明の學を論ず　井上哲次郎論
雜誌陽明學第壹第貳第參號に在り
明史　清張廷玉撰
朱文公文集百二十一卷
朱子語類大全百四十一卷
朱子全書六十六卷
朱子書節要二十卷
朱子學的二卷
宋學概論一冊　小柳司氣太著
宋元學案百卷四十冊
二程全書六十六卷十六冊

張子全書十七篇十七卷
周子全書一冊
陸象山全集三十六卷
陸象山一冊　逃部遯吾著
三魚堂集十八卷十冊　清陸隴其撰
學部通辨十二卷三冊
求是編四卷一冊
國朝先正事略六十卷
清名家小傳四冊四卷
國朝學案小識十四卷十二冊
四書五經等
支那歷代沿革圖說一冊　河村與一郎編

王陽明詳傳附錄 終

明治三十七年五月十二日印刷
明治三十七年五月十五日發行

王陽明詳傳奥付
並製價七十五錢
上製

版權所有

著作者　高瀨武次郎

發行者　東京市本郷四丁目五番地　清水金右衞門

印刷者　東京市神田區表神保町二番地　三島宇一郎

印刷所　同所　電話本局(二一三一六番)　弘文堂

發行所　東京本郷四丁目　電話下谷(二〇二九)　文明堂

賣捌所　京都市西六條　興敎書院
大阪市備後町　吉岡書店
名古屋本町　川瀨代助

文明堂出版圖書大賣捌所

東京堂、上田屋、林書店、東海堂、警醒社、森江書店
北隆館、富山房、新橋堂、鴻盟社、仙鶴堂、松村書店
勉强堂、日本堂、文魁堂、岡崎屋、鷄聲堂、目黑書店
佛教館、中庸堂、福島書店、森江分店

京都市四六條 興教書店
大阪市心齋橋 福音社
廣島市大手町 東西堂
越中國富山市 學海堂
札幌區東一條 富貴堂
福岡市博多 積善館
越後國水原町 萬松堂
金澤市片町 宇都宮
横濱市吉田町 有憐堂
京都市西條 便利社

京都市東六條 法藏館
大阪市備後町 吉岡書店
大阪市心齋橋 松村書店
久留米米屋町 菊竹書店
鹿兒島仲町 久永金藏
岡山市大寺町 金正堂
秋田市茶町 成見書店
京都市西六條 顯道書院
横濱市吉田町 勉强堂
京都市木屋町 貝葉書院

名古屋本町 川瀨代助
京都市宮小路 聖書房
靜岡市吳服町 吉見書店
信濃國信濃町 高美書店
島根縣松江市 文會堂
岡山市大寺町 武內書店
京都市五條 法文館
新潟市古町通 北光社
長野縣長野市 西澤書店
此他各全國書店

以上の各書店は同一の割引を以て確實迅速に取次販賣可致候間御便宜の處に御注文被成下度奉願上候也

文明堂出版圖書大賣捌所

東京堂、上田屋、林書店、東海堂、警醒社、森江書店
北隆館、富山房、新橋堂、鴻盟社、仙鶴堂、松村書店
勉强堂、日本堂、文魁堂、岡崎屋、鷄聲堂、目黑書店
佛教館、中庸堂、福島書店　森江分店

京都市四六條　興教書店
大阪市心齋橋　福音社
廣島市大手町　東西堂
越中國富山市　學海堂
札幌區東一條　富貴堂
福岡市博多　積善館
越後國水原町　萬松堂
金澤市片町　宇都宮
横濱市吉田町　有憐堂
京都市西條　便利社

京都市東六條　法藏館
大阪市備後町　吉岡書店
大阪市心齋橋　松村書店
久留米米屋町　菊竹書店
鹿兒島仲町　久永金藏
岡山市大寺町　金正堂
秋田市茶町　成見書店
京都市西六條　顯道書院
横濱市吉田町　勉强堂
京都市木屋町　貝葉書院

名古屋本町　川瀨代助
京都市富小路　聖書房
靜岡市吳服町　吉見書店
信濃國信濃町　高美書店
島根縣松江市　文會堂
岡山市大寺町　武內書店
京都市五條　法文館
新潟市古町通　北光社
長野縣長野市　西澤書店
此他各全國書店

以上の各書店は同一の割引を以て確實迅速に取次販賣可致候間御便宜の處に御注文被成下度奉願上候也

文學博士　松本文三郎先生著

最新版九月十五日發行

佛教史論第一編　佛典結集

紙質特撰印刷鮮明
新版三百八十頁餘
上製定價金八十錢
郵稅金十二錢
並製定價金六十錢
郵稅金八錢

本篇は最古の信頼すべき紀傳により佛典結集四回の顚末を詳叙し傍ら後代の書が如何に之を紛亂せしめたるかを指摘し、併せて東西學者の妄說を列擧論破し、從來曖昧模糊の裡に沒了せられたる佛教史上の一大事實をして一見明晰ならしめ四者をして眞贋立ろに之を辨せしむ。附錄には彼の最近最要の印度史料たる阿育王碑文の一切を飜譯し、錫蘭島佛教傳來の狀態を記述し、古代印度王統年代を比較對照したる等、皆是佛教學者並に東洋史家の坐右に缺くべからざる珍書なり。

發兌元　東京本郷四丁目　文明堂

文學博士 前田慧雲師著

◎好評嘖々再版出來

大乘佛教史論

菊版 三百三拾貳頁

上製 價九十錢 稅二十

定價金七十錢

郵稅金十錢

本書は大乘佛教の源流を歷史的に論述したる者にして議論嶄新考證該博なり卷尾に◎大乘佛教考を附錄とせり佛教史を研究せんとする者は一讀、再讀すべし、大乘佛教論者も必ず讀むべし大乘非佛說論者も亦必ず看るべし佛教學校の教科書として尤も適當なり

發兌元 東京本郷四丁目五番地 文明堂

賣捌所 森江書店 上田屋 京都市 光融館 東京堂 西六條 興教書院 同 顯道書院 法藏館

文學博士井上哲次郎先生著

好評嘖々第八版

釋迦牟尼傳

菊版 三百頁

上製 價金八拾錢 郵稅拾貳錢

並製 價金六拾錢 郵稅金八錢

釋迦の史傳として、從來我國に行はるゝもの、其類少しとせざれども大抵小說的のものに非ずんば空想的のもの、學者の一顧に價ひするもの殆ど稀なり、博士茲に感あり、此の世界的大偉人の眞相を知らんが爲め正確の材料を討ね多年研究の結果終に此篇となる、其內容の如何は絮說を要せず、只一言此書の特徵を附記すれば博く歐米學者の釋迦に關する評傳を參考したる事、孔子、基督、マホメット等を併せて比較評論したる事と及び釋迦の史傳並に佛教を學ぶもの爲めに精細に其材料と其研究法とを示したるにあり伏して識者の一覽を待つ

發兌元 東京本郷四丁目五番地 文明堂

海老名彈正先生（大好評第六版發賣）

耶蘇基督傳

菊版 三百頁

上製價金六拾五錢　郵稅金拾錢　並製價金五拾五錢　郵稅金八錢

今や宗教を求むる聲、天下に洽く且つ之を求むるもの唯理論のみを以て滿足せず、直に偉人の胸臆を叩いて活ける光明と生命とに接せんとす憾むらくは此千古の宗教的天才を傳ふるもの、我國亦二三の書なきに非ずと雖、或は單に福音書の切拔に止まり、或は主觀的理想的基督の讃評に陷り、未だ歷史的考察に基づく正確なる叙述なきを。本書は耶蘇基督を猶太國に生れたる一個歷史上の人物として主として其時勢と周圍との關係に於ける活動を描けるものにして井上博士の釋迦牟尼傳と相俟ちて我讀書界の多年の渇望を滿たすものあらん謹で江湖の一閲を祈る

發兌元　東京本郷四丁目五番地　文明堂

文學博士　井上哲次郎先生校閲
小野藤太先生著

日本佛教哲學

九月上旬發刊

△菊版三百頁餘
△定價金六十錢
△郵稅金十錢

稱して佛教といふ、その意一言にして盡きたるが如し、而も之を惟ふにたゞ日本に現存するものゝみを以てするも宗は十三。派は三十三、經論八千餘卷疏釋殆と數なし。これを探れば愈々深くこれを仰げば益々高く、その歸趣得て測り知るべからざらんとす、こゝに至て佛道に志あるもの遂に亡羊の嘆を發せざるものなし、先生茲に見る處なり、多年の研究と、特得の觀察とにより尨雜なる佛教を組織的に整理し巧に其の深邃の妙理を闡明し今や漸く此の大著を公にせらるゝに至れり、其文章の簡潔、勇健にして明透せる、其組織順序の秩然たる、此類の著述としては敢て絶後と謂はざるも蓋し全く空前なり、苟しくも宗教、教育、哲學、倫理、等の研究に志ある者は必ずや一讀せざるべからざるものなり、

發兌元　東京本郷四丁目　文明堂